

座間市文化財調査報告書 第十一集

座間の石造物

道裡神・庚申塔編

座間市教育委員会



三峰台の庚申塔 (No.13)

(青面金剛像・三猿像付の具像塔
道標を兼ねている。最も典型的に近い庚申塔)



中谷戸の道祖神 (No.17)

(碑に刻まれた寛政11年と干支の「^{かのえさる}庚申」
が一致していない (本文P 86 参照))

目次

序 凡例

本市の石造物調査によせて	1
道祖神	2
座間の道祖神一覧表	14
道祖神・庚申塔造立年代表	15
庚申塔	16
座間の庚申塔一覧表	49
四ツ谷地域の道祖神・庚申塔	50
所在地図	56
新田宿地域の道祖神・庚申塔	57
所在地図	66
座間地域の道祖神・庚申塔	67
所在地図	80
座間入谷地域の道祖神・庚申塔	81
所在地図	97
栗原地域の道祖神・庚申塔	98
所在地図	132
おわりに	134

序

「座間の石造物―道祖神・庚申塔編」を座間市文化財調査報告書第十一集として刊行いたします。いつもは何げなく通り過ぎていた街の辻々に、静かにたたずむお地藏様や道祖神様。忙しい生活を送る私たちも、ふと立ち止まると自然の移り変わりの中にひとときの心の安らぎをおぼえるように、街角の石造物にも何かほのぼのとしたものを感じることがあります。

いつのころに、どのような願いをもつて建てられたものなのでしょう。これらの石造物に込められた先人たちの思いを、今の私たちの暮らしの中に振り返ってみることも、地域を見つめ直すうえで大切なことのように思われます。

このことから、当教育委員会では、長年の風雨や都市化の中で次第に失われつつある市内の石造物を記録するため、市文化財調査員の方々に、これら石造物のうち、「道祖神」、「庚申塔」についての調査をお願いし、その結果を本書にまとめました。

この冊子を郷土理解の一助にご活用いただけましたら幸いに存じます。

なお、今回の調査に当たり、「道祖神」については市文化財保護委員の飯島忠雄、故鈴木芳夫両氏による調査資料を、「庚申塔」については、故鈴木芳夫氏が以前に調査された資料を基礎資料とさせていただきます、これらのまとめとして本調査がすすめられたことを申し添えます。

最後に、今回の調査執筆に御労苦をいただきました市文化財調査員の方々と、貴重な資料を収録された飯島忠雄、故鈴木芳夫両氏をはじめ、本書刊行にあたり種々のご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和六十一年三月

座間市教育委員会

凡 例

一、本文化財調査報告書では、調査地域の区分をできるだけ造塔當時に近づけると同時に、現在においても地域区分を理解しやすくするため、市域を旧村名別の五地域に分けた。

※五地域（四ツ谷、新田宿、座間、座間入谷、栗原）

二、碑形は次のとおり分類統一した。



三、形態は文字塔と具像塔にわけ、具像塔は具像の内容を記した。

四、石造物に付けた番号はすべて共通で、「大字」別の道祖神・庚申塔の所在地図の番号とも一致する。

また、順序については字別、地番順とした。

五、現存しない石造物については一覧表には入れず、本文の中に記した。

六、再建された新塔と旧塔が並立して現存している場合は、双方を一覧表に入れ、備考欄に注記した。

七、所在地については、現況の大字、地番に合わせた。また、所在を明確にするため隣接の個人宅の世帯主名等を付記した。

八、判読できない文字は□で記し、推定できるものについては□の中に記した。

九、十千十二支の刻銘は斜めに標記されている場合が多いが、本書ではそのまま縦書とした。

座間の石造物調査によせて

路傍の片隅にひっそりと建っている石造物……。それは、私たちの祖先が日々の激しい労働と収穫への安らぎを見出し、子々孫々の繁栄を祈って、建立されたものである。そこには、祖先の生活に託した祈りを感じる。

しかし、これらの石造物の中には、長い風雨に晒され磨耗・剝落が進行し、そこに記された文字すら判読できないものもある。あるいは、種々の時代の波に洗われ、あるものは壊され、あるものは消失してしまっている。

このまま放置しておけば、全ての石造物がこれらの状況に類する危険性をもっている。

そこで、当調査委員会は、これらの石造物を記録に留め、祖先の足跡を永遠に残すべく、昭和五十九年に調査に着手したものである。

石造物といっても、道祖神塔・庚申塔・地藏尊・講中記念碑・歌碑……等々、多種類に及んでいる。そこで、手初めに、道祖神塔・庚申塔に調査対象をしぼり、現地調査・資料収集・まとめの作業を行っていった。

ここに集大成した道祖神塔・庚申塔は、合わせて七十基に及び、碑文の判読に多くの日数を費した。幸い、道祖神塔は、昭和五十年、県よりの委託で当時の文化財保護委員飯島忠雄氏、故鈴木芳夫氏に

よって、詳細な調査がなされていたので、その調査を原点として調査報告をまとめた。

また、庚申塔は、故鈴木芳夫氏が市内各地を独力で回り、昭和五十五年「座間むかしむかし第五集『座間市内の庚申信仰』』という労作を残されており、その時まとめたカードも大切に保存されていたので、それらの労作とカードをベースにしてまとめあげたものである。

この調査報告書は、読者にわかりやすくするため、市内を五つの地域に分けて記述し、地域毎の地図を添付し道祖神塔・庚申塔の位置を示した。また、道祖神塔・庚申塔にナンバーをふり、銘文を記載し解説を加えた。

本書を参照しながら、市内の散策の折、祖先への熱い思いをこめて、新たな目でこれらの道祖神塔・庚申塔を見ていただければ、この稿をまとめた私共の喜びも一入である。

私たちが調査の中で心強く感じたことは、「だんご焼き」が自治会・子ども会育成会などを中心にして、年々盛んになり「ふるさとづくり」の核として、また、地域連帯の行事として、復興されていることである。特に、立野台にある市内の最も新しい道祖神塔（昭和五十四年建立）はこの目的をもって造られたものである。このように、古くからの地域も、新しい地域も一体になって、伝統を継承し発展させることが、地域の絆や活性化へつながっていく道でもあると思うと共に、この報告書がそれらの一助となれば幸いである。

道祖神

はじめに

市内に昔からある道路の、辻や三叉路又は分岐点、その他一部の路傍には、多くの道祖神塔が現存しているのを見ることが出来る。これらの塔のうち、明治以降に建立又は再建されたものを除くと、何れも風化が甚しく、中には崩壊寸前に近いものも何基かあって、今回の調査に当たっても相当の苦心を要したところである。

道祖神塔をはじめとして、市内に現存する他の石造物類の多くは、通称「七沢石」と呼ばれる石材を使用しているものが多い。この七沢石とは、厚木市及び伊勢原市更にその西に隣接する秦野市の北方地域に跨る大江山麓周辺の石切場から産出されている石で、厚木の西寄りて古くから有名な温泉のある七沢の地名から名付けられたものだという。しかしこの石は材質が凝灰岩のため、他の石材に比べ強度の点で、かなり劣っているが、昔は距離や運搬等の関係で、なるべく近い所からということ、この石を多く用いたのかも知れない。元来材質が軟弱な上に、塔を囲んでお飯屋を作り、火災の危険のない所であれば、塔を中心にその場で焚上げをしたので、そんなことも理由の一つとして、既に寿命が尽きたようになり形が崩れて、銘文なども剥落・磨耗の部分が多いので、判読し難いものも多くなっている。

このような現状のもとで、今回の調査を行ったことは聊か遅きに失した感がなくはないが、前記の通り年々消滅に近づきつつあるこれらの道祖神塔を、遅まきながら出来得る限り詳細に調査し記録に留め、後世に残すことは、多少なりとも地域史に関連をもつ我々の務めであることを自覚しつつ、以下調査の内容について、逐次稿を進めていくこととする。

一、道祖神の由来

昔から市内には居住地域の小字単位毎に、殆んど全域に亘って、必ず一基の道祖神塔が建てられている。

昔の人達は何んのために、又どんな理由で、そしていつの頃からこうした道祖神塔を建てたものであろうか、参考文献を参照しながら記すこととする。

(一) 道祖神の名称

まず「道祖」の文字は既に古く「続日本紀」にみえ、又古代の説話集にも道祖神が哀れな老人の姿で現われてくる。しかし何れも時代が古すぎて、近世の道祖神信仰とつながりがあるとは一概に信じられない。

中世に於て山伏信仰が盛んになった時点で、道祖神を祀ることが僅に記されているものがあるようだが、一般庶民はどうであったか、若し信仰されていたとしてもその内容や儀礼、習俗などを知る手懸

りは極めて乏しく、近世に至って道祖神塔が建てられるようになって、はじめてその存在が明らかになってきたのである。

一体この道祖神とはどんな神様なのだろうか。普通には道に関する神で「猿田彦命」と呼ばれて「道案内」の神、又は「道を守る神」と考えられている。従って建てられている場所なども一定していないが、初めに書いたように、小さい範囲の集落毎に、四辻や分れ道の所、又はその地域のほぼ中央付近の路傍か、或いは隣り村と境を接する付近の道端に建てられている。

道祖神のことを昔の人は「サイノカミ」とか「セイノカミ」と呼んでいたが、今では塔に刻んである文字通り「道祖神」とか「道祖神様」と呼んでいる。

(二) 道祖神塔の現状

現在市内には、三十六基の道祖神塔が現存している。しかしこれらの中には時代の変遷に伴って、道路の拡幅のため已むを得なかったもの、或いは敷地の色々な事情によって、最初に建てられた所から、移転しているのが明らかなものも何基もあり、その他古い塔は破損剥落が甚しく、殆んど文字の判読困難なもの、従って建立年月の全く不祥なものも数基含まれている。

二、道祖神の信仰

前段で書いたように、道祖神は道に関する神様で、「道案内」を

するとか「道を守る」神として信仰されているため、旅行をするとき（昔の旅は殆んど徒歩だった）などの安全を守ってくれる神として信仰する以外に、「防災」の神と考えて信仰していた人達も相当多かったと言われる。

こうしたことから道祖神は、道案内の神であると同時に、防災の役目も果して、村全体をまとめて守る神であるとも信じられ信仰されていたものである。

ただ不思議なことに、道祖神は道案内の神と言われているながら、道標を兼ねて建てられているものは、市内で僅かに一基だけで、道標に関しては全面的に、庚申塔に任せた状態となっているのが現状で、その理由はつまびらかではない。

三、道祖神の行事

(一) 日常の行事

まず日常においては、氏子又は講中の人々は、不浄にすることを憚る物で不用となったものは、道祖神様に「納める」と称して、道祖神塔の処に持って行く。例えば神事やお目出度いことに関係のあったもので、不用になったもの、古いお札やお守り、御幣など、或いは古くなった破魔弓、破魔矢、雛人形や達磨など、又以前は抱瘡棚など、その他煤払いに用いた笹竹、正月のお飾りや門松類など、これらの品々はすべて「捨てる」のではなく「納める」という気持

ちで持って行ったものである。

昔はこれらのものは、不用となった都度随時納めたものであるが、近年は町の環境整備や美観・交通障害等の関係で、次に述べる一月十四日の行事の直前に持寄るようになっていた。尚参考ながら「仏事に関係のあった品物」は一切納めなかったのである。



道祖神塔の前に「納め」られたお飾りやお札など

(二) 新年・節分の行事

新年には、道祖神塔に講中の誰かが注連飾りをして初詣りをする。そして二月の節分には豆撒きをする。この仕来りは今でも相当数の講中の人々が実行している。

(三) 一月十四日の行事

道祖神の最大の行事は、毎年一月十四日に行なわれる「サイトバライ」である。この行事の内容や、方法は、それぞれの地域によって、多少異なっているようだが、ここでは一般共通なことについて、述べてみたいと思う。

(ア) 行事の名称

この行事は通常「サイトバライ」と呼ばれているが、これが訛つて「セートバライ」とか「セートバレエ」などと言われている。しかし、近頃は「団子焼き」と言うものが非常に多くなっている。外に少数ながら「ドンド焼き」と呼んでいる人もいるようである。

(イ) お仮屋作り

行事はまずお仮屋作りから始まる。前述の煤払いに使った笹竹、注連飾り、門松類、或いは氏子から集めた竹や藁を用いて、塔を囲んでお仮屋を作る。この場合お仮屋を作った場所、即ち道祖神塔が人家から相当離れていて、火災の恐れや、交通に支障のない所であれば、その場所で余った材料等も共に積み上げて燃やす。又人家が近くしかも交通の障害になるような場所では、予め適当な空地を選

んで余分な材料を先に運び準備しておき、お飯屋をそこまで運んで、お焚上げをする。移転先で行う場合には、藺形をした石をお飯屋の中心に入れて火をつける。藺形石のない所では古い五輪塔の残片などを代りに用いる。この石は後日道祖神塔の所に戻しておき翌年また使用する。

(ウ) 藺玉作りと藺玉飾り

お焚上げの火で焼く団子のことを「藺玉」とも言う。藺玉の材料は米の粉であるが、粉の製法は、先ず白米を良くといでから、すっかり水分をとって十分乾燥してから石臼で碾き、絹篩という非常に目の細かい篩を使って粉を作る。一月十三日の晩か、十四日の朝早く、この粉を温湯で捏ねて色々な形の団子を作る。それを早蒸しという蒸し器を使って蒸かして出来上るのである。

この団子のことを普通は「オマイダマ」とか「オメエダマ」と呼んでいる。団子は養蚕の豊作を願って、必ず藺形のをいくつか作る。大部分は直径三センチ位の丸い団子であるが、そのほか里芋、甘藷、茸、栗などを形取ったものもいくつかは作る。

作った団子は神棚や仏壇に供えるのは勿論だが、成るべく枝が沢山あってよく繁った、檜や櫟の一メートル以上ある木を、座敷の隅か床の間の前に立てる。この木を立てるには、大抵の農家にあった自家用の粉挽きに用いる、石臼の上半分を台に利用して、その臼の穴にこの木を挿し込んで固定する。これだと団子を沢山挿して重み

が掛かっても絶対に倒れる心配はない。臼の周りには風呂敷か布などを巻いて台石を覆う。立てた木の枝先には出来るだけ沢山の団子や藺玉を挿し、外に千両小判や猫や鶏などを形取った軽い菓子（この飾りのためにこの時期にだけ特に作って売っていた）を、クリスマスツリーの飾りのように枝に吊り下げ、養蚕や農作物の豊作を祈願する。これを「藺玉飾り」と言った。この外に一斗枰（木製の丸い桶で十八リットル入り）を用いて、上部の方に団子を山盛りにして飾る家も一部にあった。大部分が農家であった昭和初期頃までは、この様な行事は、随分盛大に行われてきたが、戦後は団子焼き以外の行事はまったく途絶えてしまった。

(エ) 団子焼き（サイトバライ）

団子を焼くには枝が三本ある木（樹種は定まっていない）に三個の団子を枝先に挿し、各戸一本ずつ持寄り、お飯屋を燃やす火で焼く、このことを通常「団子焼き（サイトバライ）」と言っている。

以前は団子を焼く前に一個だけ誰かと取り替える風習があった。今ではあまり行われていないが、昔は取り替える相手が、養蚕の上手な家、農作物を上手に作る家、家運の盛んな家、その年の方角の良い家などの人を選んで交換して貰うことが多かったと言う。焼いて持ち帰った団子は家族全員で分けて食べる。ご利益としては「虫歯」にならないということであった。又黒い程ご利益があると言うので、特に真黒に焼いた人もあったと言う。又錫を持参して焼き、

御神酒を頂く時の肴にしたという地域もあったが、今日ではやっていないところは少ない。

(オ) 書初め等の焚上げ

以前はお焚上げをする時に、納められたお札類と共に子供達の書初めなどを燃やすことが盛んに行われた。書初めが燃えながら、空高く舞い揚るほど字が上手になると云って、競って燃やしたものである。又「奉納道祖神」とか「奉納猿田彦命」などと書いた紙の旗を燃やす所もあったと言う。

(カ) 賽銭集め

サイトバライの時は、氏子から賽銭を集めて、ご神酒や菓子果物類を買い、参加した大人達はご神酒を頂き、子供達には菓子や果物を分け与える習しであったが、今ではこの地域でも、特志寄付や奉納の神酒で賄っている外に多少の負担は、主催者である自治会や子供会育成会等の経費の中から支出しているところが多く、昔のように戸毎に賽銭を集めることは全くなくなってしまった。

(キ) 通せん棒

昔は氏子からの賽銭集めの外に「通せん棒」と言って、お仮屋の前に子供達が集まって（八、九才から十二、三才位までの男の子）納められた注連縄などを用いて、「通せんぼ」をして、通行人からお賽銭を貰い、氏子から集めた賽銭と合せて、サイトバライの費用にしたと云う地域も何箇所があったと言う。この通せんぼの仕来り

は、比較的交通量の多い地域の道祖神塔の前で行われたと言い伝えられている。

(ク) 焼け棒立て

サイトバライが大体終る頃になると、焼け残りの棒や竹を持ち帰り、門口に立てておく習慣があつて、昔は大体市内の全域で行われていたようであつたが、今ではこうしたことは全く行われていない。これは防災や防疫が目的で、火災、盗難、疫病などを予防するご利益があるためだったと言われる。

(四) 一つ目小僧の伝説

サイトバライと、一つ目小僧の関係についての話に触れてみたいと思うが、これは古くからの伝説で、この行事に関しては必ず出て来る欠かせない話の一つである。

さて毎年十二月八日の晩には、一つ目小僧がどこからかやってきて、村の家々の所業を事細かく調べて帳面に書き上げる。その帳面を「翌年の二月八日に取りに来るまで」と言う約束をして道祖神に預けて帰る。

十二月八日のことを今でも「ヨウカゾウ」と言う言葉が残っている。この八日の晩には、一つ目小僧が来ないようにと、どこの家でも玄関先や庭先に、目数の多い竹製の目籠などを吊るす。その他類は一切家の中に取り入れておく。こうしておく一つ目小僧が来ても、自分より目の多い籠を見て、驚き恐れて家の中に入ること

が出来ないので、家の事は何にも調べる事が出来ない。又外に履物を置くと、それに判を押して帳面に書き上げてしまふし、押された履物を履くと悪い病気になると言われているので家の中に入れるのである。

もしも調べた帳面が一つ目小僧の手に入ってしまったと、悪いことをした家ではそれなりの罰を受けなければならない。そこで二月八日の、一つ目小僧が帳面を取りに来る前の一月十四日に、預けた道祖神の仮屋に火をつけて、家もろとも帳面を焼いてしまふ。道祖神は村を守ってくれる神であるから、約束の二月八日に一つ目小僧が帳面を取り来ても「自分の家が全焼してしまふくらいだからとても帳面を取り出す余裕などなく全部燃えてしまった」と言訳をして下さる。一つ目小僧は帳面がないから、実際に悪いことをした家があつても、その家が判らないので罰を下すことが出来ないというのである。

又外に道祖神が一つ目小僧に借金をしてしまったが返済が出来ないので、自分の家を焼いて証文を燃やしてしまうのだ。と言う話や、一つ目小僧が、その地域に悪い病気を流行らせ、発病させて不幸にする人々を選んで作った名簿を、道祖神に渡して帰る。預かった道祖神は困つて色々考えた末、その人々を救うために、名簿を燃やしてしまえば、該当者が誰だか判らなくなつてしまふ、そのため自分の家を燃やすのだ。と言うように色々な伝承があるが、どの話がほ

んとうに元の話に近いか判断しがたいところである。

それにしても一つ目小僧は、村人に災厄をもたらす妖怪であると考えられているから、道祖神は村に悪霊などが入り込んで来て、災厄をもたらすのを防ぐ神と意識されていることは確かであろう。こうしたことから考えると、道祖神塔は村の出入口に建てるのが理想的かと思われるが、先にも述べたように、地域の実情によつて、必ずしも適当な位置でない場合もあり、特に座間宿方面では概ね地域の中心付近に建っているものが多い。

以上、道祖神の由来や行事、信仰等について一通り書いたが、その他に、道祖神は子供を守る神とも考えられて色々な話が言い伝えられている。例えば子供が道祖神の傍で遊んでいて、小便をかけるような無礼なことをしても決して罰が当たらないとか、子供の面倒をよく見てくれる神だから、子供達が道祖神塔の付近で遊んでいれば、親達は安心して子供をまかせておき、精出して仕事をすることが出来たとか、子供が丈夫に成長するように祈つたというような話が各所に残っている。

道祖神の行事の中で、かつては盛んだったが今は全く影を潜めてしまったもの、或いは一部分しか残っていないもの、そして今も昔もあまり変らずに引継がれているもの等色々書いたが、こうした行事に対して、忌中又は服喪中の家では、すべて参加を遠慮することが、全市を通じての昔からの習わしであり、そのことは今でも

堅く守られている。

四、道祖神の碑形・形態

道祖神塔には色々な碑形・形態があり市内に現存のものでも、文字塔が二十七基、具像塔が六基、石祠のもの一基、その他多重塔が二基で、更に分類すると、文字塔のうち角柱形が二十二基で、自然石のものも三基、他に前面加工隅丸形と円柱形のもがそれぞれ一基ずつある。具像塔は双立像が五基、単立像が一基で、この塔には道祖神としての銘はないが、氏子の人々は昔から道祖神であることを疑わず奉祀信仰している。更にこの単立像は、建立年代の判明しているものでは、市内で最も古い（享保六年—一七二一）道祖神塔である。

その他の双立像も年代の判明しているものは、大部分が文字塔に比較して古いものである。次に二基の多重塔であるが、宝篋印塔か五輪塔の残片を組合わせたような塔で、一応七重の塔の形態をしている。他の一基は殆んど崩れてしまっているので、何重であったかは不明であるが、前記の塔と同様な形をした部分が残っているので、五重か又は七重の塔であったかも知れない。

更に市内にただ一基の、石祠の道祖神塔は、座間神社の境内に他の五つの小社と共に合祀されているもので、合祀は明治四十二年（一九〇九）に行われているが、合祀以前の位置については、神社側

にこれを証する記録が無いため不明であるが、神官の話では、元は谷戸山付近にあったものらしいとの事であった。この地域は旧府中街道の経路に当るので、この街道のどこかにあったことは十分想像出来るところである。

道祖神塔の周辺には、多重塔の破片と思われるような、石の断片がころがっているのを所々で見かける。これらは講中又は氏子としての正規な奉納品ではなく、諸方の畑や路傍で、偶然発見されたものを、後々の祟を怖れて、道祖神に納めたものであろう。現在このような石片がある場所は、実に市内で十数箇所に及んでいる。

五、銘文

文字塔二十七基のうち、正確に文字の読みとれるものは二十基で、その中で一基だけ「衛祖神」となっているものがある。この「衛」の字は道の古字である。又具像塔六基のうちの二基にも「道祖神」の銘が刻まれている。その外文字塔と具像塔には、甚しく剝落、磨耗して判読出来ないものを除くと、何れも建立年代がはっきり刻まれているが、どうした理由か、建立年代を刻んだ形跡の全く目当たらない、自然石の塔が一基現存している。

塔の台座に「氏子」又は「氏子中」と名称のついているもの六基、「講中」と刻まれたもの五基、「施主」とあるのが二基でこれはどちらも具像塔である。また双立像のうちの二基は半欠であるため、僅かに

個人の姓を読みとることが出来るだけで、他の単立像の一基は、地名だけを漸く確認出来る程度である。世話人の名が刻まれている台座に「氏子」としたものと「講中」としたものが各一基ずつ存在している。



上栗原北の道祖神(No.⑤)、「衛」の文字が珍しい

その他特別な文字を刻んだものとしては「天下泰平国土安全」としたものと一基、氏子の氏名全員を記したものと一基、「奉造立□□□□二世也」としたものと一基、その外全く銘のないものは多重塔の二基となっている。

六、斉の神・性の神・その他

道祖神は防災の神として「悪病が流行するのを防ぐ」とか「悪神

が入って来るのを防ぐ」ということについては既に述べてあるので、ここでは「斉の神」と「性の神」その他について触れてみたいと思う。

(一) 既に第三項で書いたように、氏子は日常不浄にすることを憚る神事等に関係して不用となったものなどは「納める」と称して、道祖神塔の処へ持って行く。このことは明らかに道祖神塔の場所が一種の「聖地」であると考えているからであろう。氏子の人が前記のような物を納めに行くには、このような聖地は、むしろ集落の中心部にあるのがふさわしい。村の安全や農作物の豊作を祈願する神は、そのような場所に祀られているのが理想であろう。そのことが「サイトバ」或いは「サイノカミド」とも言われている「斉」の場所である訳である。従ってサイノカミは「斉の神」とも考えてよいであろう。こうしたことから道祖神塔の位置が、氏子の集落の中心付近にあるものが、市内で全体の三分の二を占めている。

(二) 次は「性の神」について言及してみる。既に述べているように道祖神の別称は「サイノカミ」と呼ぶのが本筋であるようで「性の神」とはあまり考えられていないようである。従って男根を形取った石造物が、市内で僅かに一個存在しているだけである。その外には「サイトバライの火で子供が股を炙ると早く大人になる」と言う伝承や、繭玉を作る時、家によっては、男女の性器を形取った団子を作ると言う一部の伝承が残っているに過ぎない程度である。

(三) その他道祖神に「疱瘡棚」を納めることは、各地域毎に長い間やってきたことである。昔は子供が七才位になると、天然痘に感染しないように予防接種をした。これを「種痘」と言い又「疱瘡を植える」とか「植疱瘡」とも言った。良く付くことを善感と言ひ免疫になるように疱瘡棚を作り神棚に捧げて祈願をした。

疱瘡棚は藁を用いて直径三十センチ位の円型に編んで作ったもの（通称サンダワラと言う）に、赤色の紙で作った幣束を三本立ててお供物を添えて、三ヶ所から細い藁縄で吊り下げるように作る。約一週間位で免疫（善感）になったことが認められると、前記のように道祖神塔に納める。疱瘡神と道祖神とは全く別なものであるが、前述の「斎の場」である道祖神の処に納めるのが最も適当な処置だと考えられたものであろう。しかしこのような仕来りも、医学の発達と医療技術の進歩向上により、大体大正の末期頃までで終ってしまつたようである。

その他特殊な例として、田植えが終つた後で、余つた苗を幾束か道祖神塔の前に供えて、米の豊作を祈つたところもあつたという。

七、道祖神塔の移転

(一) 道祖神塔の所在地は、小面積ながらも独立地番があつて敷地が共有地となつてゐるものと、隣接地番に包含されてゐるものがある。後者の場合は地先の地主と氏子との暗黙の了解のもとに一応

敷地は確保されている。ところがこの土地が何かの都合で売却された場合には、新地主は所有権を主張して、道祖神塔の移転を要求してくる。このような時はどうしても他に移転しなければならないことになる。又道路の拡幅などの場合も、やむなく移転する場合も生じて来る。

小池地区では従来から路傍にあつた道祖神塔（No. 23）が、自動車等の交通量が極度に多くなつたため、破壊される恐れが出てきたので、近くの庚申塔の建つてゐる共有地に、最近移転している。

(二) 戦時中の話であるが、道祖神塔（No. 28）の敷地の近くに、軍用の建物が出来たため、邪魔になるということで、別な所に移した。ところが当時の責任者であつた、庭場長（現在の自治会長）の妻が急病となり高熱を出して、うわ言でしきりに道祖神のことを言うようになったので、信心者に見て貰つたところ「道祖神様が元の処に戻りたい」と言つておられるとのことであつた。そこで早速元の処に戻したら、程なくその大病人も快癒したと言う。後でその人が言つた話では、高い熱の出た時には「白い髭の老人が三方を持つて室内をあちらこちらうろつてゐるのがはつきり眼の前に見えた」とのことであつたと言う。

(三) その他道祖神塔（No. 30）の隣りに家が建つてしまつたため、従来通りその場でサイトバライをすると火災の危険が生じるようになってしまつた。道祖神塔の所在地は独立地番でなかつたため、新地

主から移転してくれと要請されたので、別の土地の一部を借りて、そこに新たに道祖神塔（No.⑪）を建立した。それに伴って旧い塔もその傍らに移した。ところがその後氏子の中に悪い病気になる者が多く出たり、そのほか氏子によくないことばかり続いて起るので、地主とも話し合って了解の上、旧塔は元の処へ戻して現在に至っている。今では旧塔の所にお仮屋を作り、火を付けてから新塔のところまで運び、そこでお焚上げをし団子焼きを行っている。

（四） 又別にこんな例もある。道路拡幅のため塔（No.⑩⑪）移転しなければならなくなった。移転の場所が私有地の片隅だったので、移転の時点では地主も承諾したのであるが、その後になつて地主から「氏子がいろいろなものを納めに来るので大変迷惑をしているから移転してくれ」との申し出があった。付近で他に適当な移転先が見付からず、責任者の自治会長は困っていたが、地主の方から「道祖神を邪魔物扱いにして今まででさえ全く運がよくなかったのに、この上悪いことでも起きると困るから」と言つて移転の申し入れを取消したという。

（五） その他の例として、道祖神塔（No.⑨）が寺の境内の道路に面した片隅にあつたが、寺で道路に沿つて石塀を作つたため、塀にさえぎられて、道路からは塔が見えなくなつてしまつた。ところがその後、この道路付近で急に交通事故が多発するようになったので、程なく石塀の一部を改修し、今では一応道路の方から見えるように

なっている。

（六） 又ある地域の道祖神塔は、何者かによつて傍の川に投げこまれてしまつた。一通り探したが見当らなかつたので、氏子の一人が自費を投じて再建したものである。これは約二十年程前の話で、市内ではこの塔（No.⑫）が新しい塔の一つである。

（七） 新規の建立で最も新しいものは、立野台地域住民の意向によつて、市文化財保護委員の指導を受け昭和五十四年正月に建立された道祖神塔である。元来この地域一帯は、山林及び畑地であつたが、昭和三十年後半頃より急速に、宅地開発が進み、各方面からの来住者によつて、一大住宅団地が造成された。この人々により「第二のふるさと作り」の一環として一月の恒例行事の一つである「団子焼き」を行うことによつて、地域住民の連帯感を一層親密にするため中心的存在である道祖神塔を建立したものである。毎年一月十四日の小正月に、団子焼きが盛大に行われていることは他の地域と同様であるが、この日が子供の登校日である場合は、翌十五日の祭日（成人の日）に行っているのが現在までの状況である。

八、氏子の範囲

（一） 初めに書いたように、道祖神塔は大部分が、小字単位 of 地域に一基ずつあり、しかもこれは一部の有志だけのものではなく、その地域全体が講中或いは氏子となつているのが建前のものである。

そしていつの時代にも一般民衆は吾が身を守り、村を守り農産物の豊作を祈って、生活の安定、子孫の繁栄を期するために、神社仏閣に祈願するだけでは物足りず、他の何かに頼る気持が動機となって道祖神塔の建立となったものではないかと考えられる。

九、現況よりみた道祖神の盛衰

(一) 道祖神祭は昭和の初め頃より次第に衰えてきていることは確かで、かつて盛んだった焼棒などを持ち帰って門口に立てることや、書初めなどを燃やすことなども、大正の末か昭和の初め頃までで各地域とも終っている。そしてお仮屋を作って団子焼きをすることもある。その後徐々に復活はしているが、市域で最も盛んだった時代はいつの頃か、今では明治三十年（一八九七）ごろ以降しか知っている人がいないので、それ以前との盛衰の比較は事実上困難なことである。ただ一般的に言えば、道祖神のように深く地域社会に基盤を置き、極めて農山村的色彩の濃い神は、地域の変化に伴って、大きく影響されていたことは事実で、本市に於てもこの二十年程の間に急速に都市化が進み、古い農家造りの家も殆んどが現代風に建替えられると共に、昔のように笹竹を用いて煤払いする必要もなくなり、門松なども殆んど見ることがなくなり、開発に伴って竹藪等も切り払われて少なくなった。そのためお仮屋を作る主要な材料

である竹が不足し、又食生活の変化で、昔は貴重だった米の団子も、今では大して美味しく有難いものでもなくなった。しかも農業そのものも経営者が、昔ほどの熱意が無くなる等、従って豊作や健康を特に祈る気持も減退し、そんなために道祖神祭がしだいに衰えてきたのは当然なことであろう。

(二) 団子焼きの復活については、前述したように、道祖神の信仰は相当に複雑で、かなり根強いものが残っている。そして戦後復興した地域社会のあり方の反省とともに、最近では地域生活の連帯性などについて、色々な面から見直されるようになってきている。

既に大部以前から子供会育成会の人達が主体となって、この土地に生まれ育った子供も、他から移り住んだ子供も共に集めて、学校の放課後に近くの広場を利用して、団子焼きを続けている地区もあり、又ある地区では自治会が主催して、地区内の全家庭に、三個ずつの団子と三又の木を配り、予定時間に全員が集まって、恒例的に団子焼きを実施している。こうして戦中から戦後を通じて、一時中断されていたこの団子焼きの行事も、逐次復活し今日ではかなり広い範囲の地域で行われるようになってい

しかしこのような現状は、本市が農村であった頃に成長した人達が、現在では各地域の指導的立場の年令層に達しており、地域の有力な中心人物として活躍していることが、大きな要素の一つとなっているのではなからうか。実際こうした人々は、自分達が子供の頃

実際に体験した楽しい記憶を再現出来ることを心から喜んでいられるものと思われる。

今後益々都市化が進むにつれて、生活様式もそれに伴い合理化され変化して行く中で、成長してゆく若い人々や、他の地方からこの地に移って永住する人達が逐次増加し、やがてその地域の指導的な立場となって、地域社会の運営を行う時期になる頃には、その地域で行われていた伝統的な様々な貴重な行事も少しずつ失なわれてゆく懸念が決してないとは言えない。そのようになった時点で、本稿で書いたような伝統的な道祖神祭の祭祀は、果してどのように変化して行くのだろうか、又それがどのような形や方法に改められて、伝え残されて行くのだろうか。更に極言するならば、こうした行事はある時期以降には、或いは全く影を潜めてしまうのではなからうか、予測することは極めて困難なことであり、それは限られた座間市だけのことでなく、広く日本の伝統文化の進行状況や、今後の変遷推移と決して無関係ではないことと思われるのである。

しかし時代が如何に変わろうと、生活様式がどんなに改善されようと、そして年毎に風化が進んで既に消滅に近い状態のものが何基かはあっても、本市に於ては三十基以上の道祖神塔が明らかに現存しており、既に再建されている塔などを含めて、今後数十年は十分保存に堪え得るものと思われる。それ故に筆者等は道祖神塔の存在する限り、末永く何等かの形で、祭祀が継続されることを心から念願

しているものである。もし道祖神に関して将来何か必要な事柄が生じた場合、本書が参考資料として多少なりと活用されることがあれば、筆者の欣快之に過ぎるものはない。



楽しいサイトバライ（団子焼き）の風景

座間の道祖神

字	No	名 称	所 在 地	碑 形	形 態	銘 文	年 代	備 考
四ツ谷	①	西三屋の道祖神	四ツ谷1193 川島行夫氏宅横	隅 九 角 柱 形	文 字 塔	本文参照	大正2. 1. 14(1913)	再建
新 田 宿	②	上組の道祖神(1)	新田宿1 諏訪明神社横	角 柱 形	文 字 塔	〃	天保10. 1. 吉(1839)	
	③	上組の道祖神(2)	新田宿1 〃	角 柱 形	文 字 塔	〃	大正3. 1. 吉(1914)	No②の再建
	④	中組の道祖神(1)	新田宿71 池上信幸氏宅横	山 状 角 柱 形	文 字 塔	〃	天保11. 1. 吉(1840)	
	⑤	中組の道祖神(2)	新田宿71 〃	山 状 角 柱 形	文 字 塔	〃	大正9. 1. 一(1920)	No④の再建
	⑥	下組の道祖神	新田宿240-1 松木頼三氏宅横	山 状 角 柱 形	文 字 塔	〃	天保12.1.吉(1841) 大正5.1.一「改修」	
座 間	⑦	中河原の道祖神	座間1丁目1804 沢田正氏宅横	船 型 光 背 形	双立拱手像付	〃	明和9. 1. 吉(1772)	座間2丁目2107から現在地へ移転
	⑧	下宿北の道祖神	座間1丁目3028-1小俣勝平氏宅横	自 然 石	文 字 塔	〃	弘化5. 一. 一(1848)	
	⑨	上宿の道祖神	座間1丁目3300 宗仲寺堀外	隅 九 角 柱 形	文 字 塔	〃	文政8. 1. 18(1825)	
	⑩	座間神社の道祖神	座間1丁目3437 座間神社内	石 祠 形		〃	昭和30. 10. 吉(1955)	
	⑪	中宿の道祖神	座間1丁目4122 平和坂横	山 状 角 柱 形	文 字 塔	〃	嘉永5. 1. 吉(1852)	
	⑫	河原宿・上河原の道祖神	座間2丁目2803 河原宿公民館入口	自 然 石	文 字 塔	なし	不 明	
	⑬	河原宿・下河原の道祖神	座間2丁目2833 鈴木茂氏宅横	船 型 光 背 形	双立拱手像付	消失	不 明 (下半欠)	
座 間 入 谷	⑭	長宿西の道祖神	入谷1丁目3205-2飯島勇氏宅横	皿 角 柱 形	文 字 塔	本文参照	明治45. 1. 一(1912)	再建
	⑮	鈴鹿の道祖神	入谷1丁目3499 鈴鹿明神社内	自 然 石	文 字 塔	〃	文政10. 12. 吉(1827)	
	⑯	長宿東の道祖神	入谷1丁目3940 番神堂横	山 状 角 柱 形	文 字 塔	〃	嘉永5. 12. 吉(1852)	
	⑰	中谷戸の道祖神	入谷3丁目3660 加藤喜作氏宅横	船 型 光 背 形	双立拱手像付	〃	寛政11. 庚申(1799又は1800)	但し、庚申の年は寛政12年にあたる。5個の石造群のひとつ。
	⑱	北谷戸の道祖神	入谷3丁目5638 小田急ガード東側	山 状 角 柱 形	文 字 塔	〃	嘉永5. 10. 吉(1852)	
	⑲	星の谷の道祖神	入谷3丁目6351 浴 宗輔氏宅横	船 型 光 背 形	双立拱手像付	〃	明和8. 1. 吉(1771)	
	⑳	皆原の道祖神(1)	入谷5丁目1808-2小川久重氏宅付近	角 柱 形	文 字 塔	〃	天保2. 1. 吉(1831)	
	㉑	皆原の道祖神(2)	入谷5丁目1808-2 〃	円 柱 形	文 字 塔	〃	天保2. 10. 中旬(1832)	
	㉒	羽根沢の道祖神	入谷5丁目2547 奥津昭仁氏宅横	山 状 角 柱 形	文 字 塔	〃	文化7. 一. 一(1810)	
	㉓	上小池の道祖神	栗原1066 玉木富蔵氏宅付近	七 重 塔 形	無 銘 塔	なし	不 明	
栗 原	㉔	セーノ神坂下の道祖神	栗原1736 大木光雄氏宅横	船 型 光 背 形	単立拱手像付	本文参照	享保6. 〇. 一(1721)	
	㉕	上栗原北の道祖神	栗原2065-1 嘉兵衛坂下	隅 九 角 柱 形	文字塔・有縁	〃	安政4. 1. 一(1857)	
	㉖	芹沢の道祖神	栗原2787-1 芹沢下の橋横	皿 角 柱 形	文 字 塔	〃	安政4. 1. 14(1857)	
	㉗	中栗原の道祖神	栗原2983 消防倉庫前	角 柱 形	文 字 塔	〃	昭和39. 1. 14(1964)	再建
	㉘	栗原・中下の道祖神(1)	栗原3470 渋谷神八氏宅横	山 状 角 柱 形	文 字 塔	〃	安政4. 1. 14(1857)	
	㉙	栗原・中下の道祖神(2)	栗原3470 〃	角 柱 形	文 字 塔	〃	昭和53. 3. 吉(1978)	No㉘の再建
	㉚	栗原・大下の道祖神(1)	栗原3923 寒川橋横	多 重 塔 形	無 銘 塔	なし	不 明	
	㉛	栗原・大下の道祖神(2)	栗原3910 〃	角 柱 形	文 字 塔	本文参照	昭和8. 5. 吉(1933)	No㉚の再建
	㉜	栗原・大下の道祖神(3)	栗原3910 〃	角 柱 形	文 字 塔	〃	昭和59. 4. 吉(1984)	No㉜の再建
	㉝	中原の道祖神(1)	栗原4332 市川長作氏宅横	船 型 光 背 形	双立拱手像付	消失	不 明	
	㉞	中原の道祖神(2)	栗原4332 〃	山 状 角 柱 形	文 字 塔	本文参照	嘉永5. 9. 吉(1852)	No㉞の再建か
	㉟	西原の道祖神	栗原4978 吉村利玄氏宅横	隅 九 角 柱 形	文 字 塔	〃	明治17. 1. 14(1884)	
	㊱	立野台の道祖神	立野台385 立野台ロータリー中央	前面加工隅九形	文 字 塔	〃	昭和54. 1. 吉(1979)	

道祖神・庚申塔造立年代表

※現存中造立年代不明分12基

※道祖神  庚申塔 

西 暦	年 号		造 立 数 (基)										計 58基	地域別 (旧村) 年代の分布				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		四ツ谷	新田宿	座 間	座間入谷	栗 原
1650～1700	慶安 3 ～ 元禄13	道											0					
		庚											2					2
1701～ 20	元禄14～享保 5	道											0					
		庚											7			1		6
21～ 40	享保 6 ～ 元文 5	道											1					1
		庚											1		1			
41～ 60	寛保元～宝暦10	道											0					
		庚											1	1				
61～ 80	宝暦11～安永 9	道											2			1	1	
		庚											4			2		2
81～1800	天明元～寛政12	道											2				2	
		庚											0					
1801～ 20	享和元～文政 3	道											1				1	
		庚											2		1			1
21～ 40	文政 4 ～ 天保11	道											6		2	1	3	
		庚											2	1				1
41～ 60	天保12～万延元	道											9		1	2	2	4
		庚											2	1	1			
61～ 80	文久元～明治13	道											0					
		庚											5		1	1	1	2
81～1900	明治14～ " 33	道											1					1
		庚											2			1		1
1901～ 20	" 34～大正 9	道											4	1	2		1	
		庚											0					
21～ 40	大正10～昭和15	道											1					1
		庚											0					
41～ 60	昭和16～ " 35	道											0					
		庚											0					
61～ 85	" 36～ " 60	道											5			1		4
		庚											0					

庚申塔

はじめに

庚申塔には、村々の安寧と子孫繁栄の願いをこめた、「二世安樂」の祈りが託されている。これらの庚申信仰の歴史を探れば、古くは千年前の平安時代にさかのぼるが、庶民の間に流布され盛んになったのは江戸時代である。

村々の各地域には講が出来、人々は幸せを願い夜を徹して集い笑談し合ったことであろう。また、浄財を出し合つて講のシンボルとして庚申塔を造り、村々の辻や道沿いに建立したものである。これらの庚申塔を調査することにより、各地域の庚申信仰の歴史を明らかにすることができるとともに、当時の人々の生活の一端をうかがうことができる貴重な資料でもある。

本市には、三十四基の庚申塔が現存している。それらの庚申塔が建てられた年代を探ってみると、江戸中期の延宝二年（一六七四）から明治二十七年（一八九四）までの約二百二十年間に跨っている。

庚申塔には、「庚申塔」、「庚申供養」等の文字が彫られている文字塔と庚申のご本尊（主に青面金剛像）等が彫られている具像塔に分かれている。文字塔・具像塔に共通するものに「見ざる」、「言わざる」、「聞かざる」の三猿像の刻まれているものもある。また、江戸後期から明治初年にかけて建立された塔には、道標を兼ねたものも

あり、道と庚申塔の関係を示している。

以上、庚申塔の由来を大摺みに記してみた。今回本市に建立現存している庚申塔を詳細に記録するとともに、マクロな視野に立ち庚申塔が庶民史の中で果たした役割を追究してみた。その中から本市の庚申塔を見つめ直すことにより、今まで疑問に思われていた幾つかの問題点の解明をみる事ができた。

例えば、座間地域の上宿、中宿に庚申塔がないのは何故か。北向きの庚申塔は、何故靈験あらたかであるのか。小池地域に庚申塔が多いのは何故か、等々……。

以下、前記した趣旨にしたがい「庚申の名の由来」から始まり「本市における庚申塔」へと稿を進めることとする。

一、庚申の名の由来

この名の由来は、中国から伝えられた十干十二支の思想の中から生まれたものである。

即ち、十干「甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸」と、十二支「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」の組み合わせで年号や月日を表記したものである。この十干・十二支の全てが組み合わされると六十年周期で一まわりする計算となり、古くから年号の表示に使用されていたものである。暦を見るとその年は、「丙午」の年とか「甲子」の年と書かれている。その中の一つに

「庚申」の組み合わせがあるのである。また、これを年号だけでな

く一年三百六十五日に当てはめて使用して、吉凶を占ったりもして

いる。その読み方を分るように表にすると、

十干	木	火	土	金	水
	甲乙	丙丁	戊己	庚辛	壬癸
	子丑	寅卯	辰巳	午未	申酉

十二支
子丑寅卯辰巳午未申酉
戌亥
となる。

この干支の考えは、中国の道教の思想に基づくものであり、人間の運命に関する様々な信仰を生みだした。中でも庚申の日は、干支相剋の厄日として広く忌まれていた。というのは、庚（金ノ兄）と申の中にある金気が重くなるので、殺の気が強くなり、対人関係がトゲトゲしくなるとして、非常に警戒されていた。これらの事柄や後述する道教の庚申伝説等と、在来の民間信仰とが結びついて、日本独特の庚申信仰になっていったと思われる。

二、庚申信仰の歴史

我が国の庚申信仰の基本をなした教えは、前記したごとく道教である。その中の庚申信仰についての考えをまとめてみると、

「人間の体内には、三匹の尸（虫）がひそんでいて、庚申の夜、人が眠っている間に体内からぬけ出して天帝のもとにのぼって、その人の罪やあやまちを天帝に告げその人の命を奪うので、その夜は眠らずに身をつつしんで過ごし三尸の災いを防ぐ」ということである。そのため、「守庚申」とか「庚申待」という形でこの信仰が伝えられ、営まれたのである。

この考えが平安時代に伝えられ、朝廷を中心とした庚申の会が催されている。その会は「庚申の御遊」として歴史上知られ、多くの貴族たちが集まって囲碁、双六、和歌、管絃に夜を徹して興じたといわれる。

その当時、貴族のために書かれた「簾中記」という書には、「庚申の夜の誦」として、

「彭候子、彭常子、命児子、我身ヲ離レヨ。夜モスガライネズシテ、コレヲ唱フレバ、三尸サリ、万福キタル。」と記されている。

この時代は「もののけ」を深く信じ、三彭という虫が自分の体内に住むことを疑わず、庚申の夜に前記のような誦をしたと思われる。また、「一話一言」という書には、「庚申の御遊」の催しを「年代記」から抜粋して記載している。

朱雀帝 天慶二年（九三九）内裏有庚申御遊。

一条帝 長保元年（九九九）五月九日庚申。……有。

三尸御遊。五年六月二日庚申。……。

これらは、ほんの一例に過ぎないが、当時の「庚申の御遊」の催しが、盛んであったことがわかるであろう。

中世になると、貴族社会だけではなく武家社会にもこれらの行事が普及していった。鎌倉時代には將軍の主催する「庚申の御会」が行われていた。三代將軍実朝が若くして暗殺されたのは、「庚申の御会」の最中に、居眠りをしたからだと言われている。

室町時代から戦国時代にかけて、武家社会では益々この行事を重視した。特に、戦国時代は一族郎党の団結を強固にする意味をもって、酒宴を催したといわれる。中でも有名なのは、織田信長の「庚申待」で夜を徹して武将たちと酒宴を催し、舞などに興じた。「信長公記」に記されている。また、この頃になると、武家社会だけではなく一般庶民にもこの行事が普及していったのである。このような普及形態によって、庚申信仰も次第に性格を変化させていった。

すなわち、平安時代の「守庚申」のように、単に害虫が体内から抜けでないように見張るという消極的な考え方から、戦国時代という下剋上の風潮を反映して「この夜は徹夜してでも、神仏に祈り現世と来世の安楽を確保しよう」とし、積極的に考えるようになった。

これらの考えを積極的に推進したのは、神官、僧侶、修験行者、祈禱師等の宗教家である。この点については次の「庚申塔の歴史」の中で詳述することにする。

江戸時代になると、現世や来世の安楽を求める傾向が強くなり、

庚申塔の中に「二世安楽」の文字が多く彫られているのは、こうした傾向を示している。（本市の最も古い下小池の庚申塔に、この文字が見える）

また、庚申信仰は、庶民の生活の中にしっかりと根をおろし「二世安楽」を願うと共に、農村では庚申を農業の神様と仰ぎ、家畜の健康や豊作を祈願したり、町家では悪疫除去や亡霊鎮護を含めた重要な年中行事であった。年に六度ある庚申の日には、各地域で講が開催され、「庚申待」、「宵庚申」、「おかのえ講」と呼ばれていた。

年に六度ある庚申の日になると講中の人々は、申の刻七ツ（今の時刻で午後四時）に講の開かれる庚申堂や当番の家に集まってくる。そこでは、背面金剛や三猿等の掛軸をかがけ、明け方の寅の刻七ツ（今の時刻で午前四時）までの十二時間を眠らずに過ごすのである。その様子を柳田国男は「年中行事覚書」の中で次のように記している。

『夜あかしの行事と一手も、さうこみ入った行事があるわけではなかった。……全員が揃ふと、やがて定め作法によって唱へごとがあり、又経文が読まれるが、初夜即ち十時頃にはもう終わって、神酒を下げて少しづつ戴き、ゆるりと一同が食事をしてまた夜中にならない。それから夜明けまではただ雑談に時を過ごし、眠ってしまえばよかったのである。兼々相談したいと思う村の問題を、この晩まで溜めて置くことも有ったが、それも片

づいてまだ残る時間には、興味ある色々の世間話、又は何度も聴くような昔話もこの時に出て、忘れていたものは思ひ出し、若い連中は新たに覚えるのであった。……」

集まっている講中の人々は、家代々の友であり、固い絆で結ばれていることが、この文章の中で明瞭に記されている。

農村では、正月から二月にくる初庚申と年の暮れに近い留めの庚申（別名「つめ庚申」）を特に重視したのである。この時期は、農閑期で人々がのんびりできたし、初庚申はその年の豊年祈願を懇ろに行い、また、留めの庚申は一年の収穫を神に感謝し、来年もよろしくとの願いを込めたので、重要視されたのだと思う。

これらの講の名称の中で一般的に使用される「庚申待」の「待」の語源は、一夜を眠らずに語り明かす催しをした総称としてまちごとと言っている。すなわち、まちとは古語でその意味は、「おそばにいる」で神と共に夜を明かすことであつたらしいが、後に、日の出を待つことの意味に転じたのである。このことから「庚申待」は、夕方よりも朝の方に重きをおいたのではないかと推定される。

「おかえ講」とは、庚申のかのえねざるの「かのえ」を敬称して講の名前にしたのである。

時代が下がるにつれこれらの講も衰退して、催しの回数も減っていくが、「初」、「留め」の庚申だけは長く続けられている点に注目したい。

庚申信仰は、このように庶民の生活と密着した信仰であったことを、今回の調査で改めて認識させられた次第である。

三、庚申塔の歴史

さて、庚申塔のご本尊は……と問われると、しばし考えてから答えなければならぬ。それ程、庚申塔のご本尊は複雑怪奇なものである。本市の庚申塔のご本尊は青面金剛像のみであるが、全国に現存している庚申塔のご本尊を分類してみると、いちばん一般的なのが憤怒の形相をした一面六臂（手）の青面金剛像菩薩で、その他に阿弥陀仏・観世音菩薩・大日如来・地藏菩薩・不動明王・帝釈天・猿田彦命等の神様や仏様の姿、文字が彫られており、また、猿の姿もしばしばみかけるのである。これらの事実をみると、まさに正体不明のご本尊であることが理解出来るであろう。

しからば、何故このような複雑怪奇な正体不明のご本尊になったのであろうか……そのルーツをさぐることにしよう。

庚申信仰に係わる石造物は、古くは室町中期ごろに建てられている。その一つに、吉野地方にある長享二年（一四八八）建立の庚申塔が注目されている。その塔には、密教の修験行者と思われる僧融秀阿闍梨を中心として、数名の農民による庚申講がつくられ、それを記念して建立されたものである。この塔が注目されているのは、庚申信仰が上流社会から庶民へ伝播していく過渡期の姿を示してい

るからである。

特に、庶民伝幡への大きな役割を果たしたのが密教系の修験行者で、密教の中に大青面金剛呪法と呼ぶ呪術があつて、邪気退散・息災延命の利益を媒介とし、庚申信仰を呪術的にとり入れて積極的に布教していったのである。これらの布教の様子を物語る庚申塔が、近畿、九州、中国の各地域に建立されている。関東地方では、埼玉県に一基あるのみで、密教僧や修験行者の布教状況を如実に物語るものである。やがてこの布教活動は、全国に流布され、江戸期に入り各地の庚申講が結成されていくのである。また、その布教の根拠地として庚申堂が建てられ各宗派の修験行者や祈禱師が、自派の拡充、伝幡を図つたのである。

これらの人たちの指導や影響により各地に庚申塔の建立が本格化し、江戸中期にピークを迎えるのである。

近隣市町村の庚申塔の建立年代をみても、一六四〇年代頃からはつばつ建立され、一六五〇年から七〇年代までに急増しているのが特徴である。

庚申塔は、仏像などと違って塔そのものが信仰の対象ではなく、庚申講の記念碑的傾向が大である。すなわち、講の結成記念等の行事として浄財を積み立てて造つたものである。現に庚申講が盛んに行われていた地域でも庚申塔が一基もないところもある。（本市では、座間地域の上宿、中宿がその対象となる）

庚申塔の歴史をこれらの状況から分析してみると、戦国から江戸初期の時代は、仏教系、神道系等種々な宗派の影響により、本尊は多様な像をつくりだしていった。

その中には、地藏尊あり阿弥陀如来あり観世音菩薩あり猿田彦命ありで、さながら諸宗派の展示会の様相を呈していた。本市には、これらの庚申塔は建立されてはいないが、近隣の市町村に現存し庚申信仰の歴史を知るうえで貴重なものである。しかし、庶民の願いは「二世安楽」の方向にあるのだが、宗派争いの狭間のなかでもがいていたと推定される。しかし、古くから布教をし庚申信仰の担い手であった修験行者や祈禱師は段々と系列化されてきている点に注目しなければならぬ。中でも、浅草の浅草寺・京都の八坂神社・大坂の四天王寺は、日本三大庚申寺社として知られている。

また、「男はつらいよ」で有名な寅さんの住む葛飾柴又の帝釈天は、日蓮系の庚申さんで題経寺として江戸時代から庶民の深い信仰を集めていた。中でも大坂の四天王寺は歴史が最も古く、庚申信仰の大本山の観を呈していた。四天王寺の南門外にある庚申堂から発行された「青面金剛像」の掛軸が、庚申信仰の本尊として定着するようになった。

その証拠として、各地の信者が大坂へ出かけて買い求めてきた掛軸が、現在でも各地に保存されており、庚申信仰の普及を知る上で重要な手掛かりとして注目されている。

また、庚申信仰に係わる猿田彦命や猿の像が神道系の修験行者の布教で浸透し、ピークを迎える江戸時代には「青面金剛像」、「三猿」の庚申塔は、ゆるぎないものとなっていた。そのような状況を反映して、庚申塔にこれらの像が、積極的に刻まれそれまで混迷していた本尊にピリオドが打たれていった。

この時代に建立された庚申塔の典型が次の写真の庚申塔である。



津久井郡藤野町の庚申塔

この塔は、津久井郡にある庚申塔であるが、本市に現存しているものには下部の鶏の図柄はない。

この塔の図柄を説明すると、上部に日輪・月輪・中央部に青面金剛像・下部のやや上に二羽の鳥（一羽は鶏、一羽はセキレイ）・下部に悪鬼・台座に三猿像が刻まれている。

これらの図柄について説明すると、

(一) 日輪・月輪の由来

この図柄は、本市の庚申塔の中にも彫られている。その意味するものは、日輪は農業の中でも最も重要なもので、天の恵みの中で最高のものである。そのため、人間の歴史の中で欠かすことのできない神として、古来から崇められていたものを形づくったものである。月輪は、月の神を形どったもので、月の神は人々に徳や恵みを施し、無病息災を与えてくれる神として信じられていた。それらの人の願いを日輪、月輪に託したものである。また、庚申の夜は徹夜して月をおがみ、日の出を拝したことからこれらの図柄が彫られたものと思われる。

(二) 悪鬼の由来

この図柄は、青面金剛像と一体として彫られている。悪鬼とは別名天邪鬼と呼ばれ、昔話にも登場する伝説上の魔物で、意地悪でいたずら好きで、人間のいやがることを平気するので、人々には嫌われている。しかし、なんとなくユーモラスな顔をしており、憎めない形をしているので、仏像の足の下にもよく彫られている。

青面金剛は、人間に及ぼす悪業を払い除くために派遣された仏様であるから、庚申の三戸になぞらえて金剛に踏みつけられた悪鬼（天邪鬼）が彫られたのであろう。

(三) 二羽の鳥の由来

庚申の申を猿に、翌日の酉の日を鳥になぞらえ、二匹の動物を徹夜の行事の象徴として配したものと推定される。

鶏は、日輪をめざめさせ夜明けを報ずるので、めでたい鳥として古くから崇められていた。一方、セキレイは、猿と共に馬の災いを防ぐ力のある動物と考えられてきた。そのため、猿とセキレイの組み合わせの図柄が出来たのだと思う。しかし、セキレイは、鶏に比べて変わられ二羽の鶏の図柄の方が一般的である。

但し、本市の庚申塔には鳥の図柄を配したものは見当たらない。

(四) 青面金剛像の由来

広辞苑によると青面金剛とは「顔の色の青い金剛童子。大威力のあつて病魔・病鬼を払い除く。六臂三眼の忿怒の相をしている。俗に民間で行われている庚申会の本尊で、猿の形相をしているもの」と解説している。

この解説は、青面金剛が庚申塔の本尊として定着し、一つのパターン化された事実をまとめたものである。しかば、青面金剛とは本来どんなものであったかを追究してみよう。

青面金剛は、仏法の守護神である四天王の総大将・帝釈天が、人間界を救済するために派遣した使者で、種々の武器を持ち人間に害を及ぼす悪魔を退治してくれる仏様で、金剛夜叉明王の変態ではないかともいわれているが、仏像図典には名が出てこない不思議な仏像である。言い伝えによると、青面金剛像は、天台宗円珍・智証大

師（八一四―八九一）が、唐から持ち帰ったお経の中にあるという。それによると、四臂（手）で三眼、二鬼上に立ち、二童子と四葉叉を伴う忿怒の像として説かれている。

しかし、わが国で一番古いと言われる青面金剛像は、木像で鎌倉時代の作といわれ東大寺にある。その像を見ると、六臂で剣以外の持ち物は失われているが、蓮台上に立っている姿で彫刻されている。これは、先の円珍が持ち帰ったという像の姿とは大変異なっている。この東大寺の青面金剛が、どのような文献を基にして造られたかは定かでないが、先に引用した円珍が持ち帰ったお経とは別に、青面金剛に関する文献があったと推定される。庚申信仰の中に青面金剛が現われるのは、南北朝期（一三三三―九二）頃で、密教の中に（青色大金剛薬叉辟鬼魔法）という呪術（通称『大青面金剛呪法』）があるが、その行法は、伝戸病（結核）の子防治療を青面金剛に祈るものである。この呪法を基に修験行者の間で庚申信仰の結社がつくられている。

また、室町時代の中頃（一四八〇年頃）に作られた「庚申縁起」の中に礼拝本尊を文珠・薬師・釈迦・阿弥陀・観音等の仏様と共に、青面金剛があげられている。即ち、庚申の夜の子丑の時刻（午前〇時―午前二時）青面金剛を礼拝せよとの記事がある。このようにして、青面金剛は、伝戸病の病原菌の伝戸を除く力が青面金剛にあるので、当然人間に災いを及ぼす三戸の虫を駆除する力があると信じられ、

その駆除を背面金剛に託したことが庚申信仰と結びついたのであろう。

現存する石造物の中に初めて登場する背面金剛は、「生面金剛」という文字塔で、東京秋川神社の永禄二年（一五五九）建立の庚申塔である。以上、これらの庚申塔を古い順に列記してみると、

○天正十九年（一五九一）八月二十一日建立の板碑で宮崎県西諸県郡高原町広原にある「背面金剛者、三者不退益」と刻まれている。

○文禄五年（一五九六）大阪府能取町にある板碑型の石造物で「背面金剛庚申」と記されている。

○寛永元年（一六二四）京都府山城町十輪寺内にある庚申塔で「無背面金剛」と彫られている。

○慶安五年（一六五二）東京都荒川区三河島にある庚申塔の銘文の中に「背面金剛……」の文字が見える。

のようになる。これらの石造物をみると、後世の「背面金剛像」の原型をなすもので、庚申信仰と背面金剛の結びつきを具体的に示した資料として重要なものである。

庚申塔の中に「背面金剛像」が初めて出現するのは、承応四年（一六五五）に建立されたもので、茅ヶ崎市甘沼にある八幡宮の境内にある塔で、四臂の金剛像と二猿像が彫られている。

その後、明暦（一六五五―五七）、寛文（一六六一―七二）、延宝（一六七三―八〇）と年を追う毎に、全国各地で背面金剛像の庚申

塔が続々と建てられているのである。

この時期は、四代将軍家綱の時代で世の中も落ち着き、除々に農村経済も向上していった時でもある。

しかし、これらの時期の背面金剛像は、二臂・四臂のものもあつたり、六臂のものもとより八臂のものもあつたりして、多種多様な姿をしているのである。

何故このような多種多様な姿になったのかというと、先記したように背面金剛像自体の定型が明確でなかったため、このような現象が生じたと思われる。それらの現象に拍車がかけられたのは、庚申信仰が高揚したため、各地に庚申堂が建てられ各宗派の修験行者や祈禱師がそこを根拠として布教をし、自派の主張をこめた背面金剛像を描いた掛軸を発行し講を増やしていったことである。

講の記念碑である庚申塔を建てるに当たって、これらの修験行者や祈禱師の指導を仰ぎ、また、掛軸がお手本になったからであろう。しかし、江戸中期頃になると、大阪四天王寺が庚申信仰の本山化をし、ここで発行された庚申縁起や背面金剛の掛軸が權威を持ち全国的に流布されていくのである。

多くの人たちが、伊勢詣りの帰りに大阪の四天王寺に詣で、庚申縁起や背面金剛の掛軸を購入し、各地の庚申講の守り本尊として信仰したそうである。

それにしたがって、背面金剛像も四天王寺の掛軸のように三眼六

臂の形にしたいに統一されていくのである。市内で二番目に古い青面金剛像付きの庚申塔は、栗原の八軒庭にあり元禄十三年（一七〇〇）に建立された庚申塔（No. 四）で、三眼六臂の像である。言い伝えによると、八軒（八軒庭）八戸の家があったことから名付けられた）が揃って伊勢詣りにいつている。

その折りに、大阪へ寄り四天王寺に詣で、掛軸を求めてきたのではないかと思われる。現在、掛軸は消失しているが、庚申塔に彫られた青面金剛像は、それを彷彿させるものである。

中期以降の多くの青面金剛像は三眼六臂で、悪鬼を踏まえている立像である。六臂の真ん中の手は合掌型と剣人持に分かれているが、上部の手には向かって右側に宝輪を、左側には鉾（ほこ）を持っている。下部の向かって右側には弓、左側には矢を持っているのが典型であるが、上部の手は像によって違う持ち物を持っている場合もある。



八軒庭の庚申塔

さて、青面金剛の由来については、この程度にして、庚申塔と切っても切れない関係にある猿と庚申信仰について話をすすめることにする。

(五) 猿と庚申信仰の由来について

庚申塔のことをある研究者は「三猿塔」と言っている。これ程、庚申信仰と猿の関係は、切っても切れないものであると言える。しかし、中国から伝えられた庚申信仰の中には、猿との関係は皆無である。では、どうして猿が庚申信仰の中に、登場してきたかを追究してみよう。

猿と庚申信仰の結びつきは定かでない部分はあるが、日吉山王信仰との結びつきに深い係わりをもっているのである。

日吉山王信仰とは、中国の北斗七星護魔秘要儀軌に基づき庚申の夜三尸の虫が人間の悪業を報告する天帝を北斗七星になぞらえ、庚申の日にこの七星を供養すれば死を免れると説いた信仰で、始め朝廷・貴族の間に信仰され、やがて室町期になると庶民へ流布されていったものである。猿は、この天帝の神使あるいは化身とも考えられ崇められた。本来この信仰は、天台宗系の神道で、天台宗の始祖伝教大師が唐の天台山国清寺の山王祠を模して、比叡山の守護神として山王社を創設したことに始まると言われている。本宮は、滋賀県大津にある日吉神社で教義の北斗七星をかたどって「日吉七社」と称し、また、七社の末社を合わせて七の三倍で「山王二十一社」と

とも言われている。

日吉山王信仰は、庚申の日の七星供養を教義として、各地の庚申信仰と結びついて、修験行者や祈禱師の手により全国に流布されていくのである。そのため、神使である猿も崇拝の対象として、重きをなしていった。

日吉山王信仰の中に始めて猿像が現われるのは、庚申塔ではなく、日吉山王信仰のご本尊として造られた山王曼荼羅や懸仏（本来御正体と呼ばれるもので、鏡面や円板に像を立体的に配し取手をつけ懸れるようにしたもの）の中に見い出すことができる。

猿像を刻んだ懸仏では、町田市常盤にある永禄二年（一五五九）の作で、山王像を中心にその脇士に二匹の猿が正面向きで合掌している図が描かれている。それより時代がかなり下がるが、八王子市南浅川町にある寛永五年（一六二八）作のもので、阿弥陀の坐像を中心に二猿が向かい合い合掌している図柄である。銘文には「武州之住権田郷案内之村、為庚申供養……」とあり、庚申信仰と猿の関係をはっきり示す資料である。

更に、天海僧正の尽力により、日吉山王信仰は江戸初期以降隆盛をきわめていくのである。天海僧正は、家康の政治顧問として活躍すると共に、日吉山王信仰の教義を体系化し、山王一実神道（日吉神道）として完成させた人でもある。

僧正の働きによって、家康公に「東照権現」の称号が朝廷より贈

られ、家康公の遺骸を久能山から日光に改葬させている。これらの事柄も全て、山王一実神道の教義に基づいて実施しているのである。そのため、この神道は国教的な扱いを受け、全国に広まっていくのである。

その影響ではないかと思われる猿像付き庚申塔が、下野の国を中心に建て建立されていくのである。以下、建立年代順に列記してみると、

○寛永十三年（一六三六）日光市跳石八幡の塔

○寛永十八年（一六四一）神橋際の塔

○寛永二十年（一六四三）長野県須坂市の塔

○「」（高崎市妙典寺の石祠）

これらの塔の猿像も全て二猿で、図柄は前記した町田市や八王子市の山王系の懸仏の図柄と同じである。

即ち、初期庚申塔には、三猿の姿はなく二猿像が中心で他に、一猿像やえぼしをかぶる猿、御幣を持つ猿等々各宗派の特徴を現わす種類の猿像が現われているのは興味深いことである。

三猿像が庚申塔に現われるのは、正保三年（一六四六）を初出に、承応年間（一六五二―五四）に多く現われている。

そもそも三猿は、古代インドで着想され、唐の天台大師が止観（散乱する忌念を止め、静寂な正智を以て観照すること）の空・反・中の三諦を不見・不聴・不言に喩えて止観の思想を説いたものである。

その教えを天台宗の始祖伝教大師が日本的に具体化し、不見を見ざる・不聴を聞かざる・不言を言わざるの三猿とし、三匹の猿を刻んだのが三猿像の始まりだと伝えられている。

その教えが、日吉山王信仰に伝えられ山王一実神道により再認識されていくのである。

正保三年（一六四六）に完成した日光東照宮。その中に彫られている三猿像は、厩屋の欄間に彫られており、山王一実信徒の影響を受けていると思われる。

また、この三猿は、馬との係わりを端的に物語っている図柄でもある。このことは、馬を大切にした祖先の心意気をも示している。馬と猿との因果関係については、柳田国男「年中行事覚書」の中で次のように記している。

「……三つの坐った猿、見ざる聞かざる言わざるとも謂って、一つは両手で眼を蔽ひ、一つは口をおさへ、一つは又耳に手を當て、居る。これは庚申が猿の日の祭である為にちがひないのだが、猿が天台宗と縁が深い日吉神社、俗に山王さんといふ御官の使者だからと、言って聴かされて居る人が今日では多い。……猿も日本を始めとし、東亜細亜の諸民族の間において馬の災いを防ぐ力のある動物と考えられ、初春には厩の前で猿を舞はし、又厩の柱に猿を繫いで置く風習が廣く行はれて居た。即ち庚申はその猿の日だから、この日祭をする神社は馬の安全を守りたまふべしと、考へ始めたのが元

だったからとも見られるのである。」

種々の要素を含めて、三猿と庚申信仰の結びつきを民俗学的にまとめとめてあり、一つの説として興味をひく文章である。

また、三猿は庚申の日に人間の悪業を伝える三尸になぞらえて伝えられた。即ち、悪いことを見てはいけない、聞いてはいけない、語ってはいけない。「万一、これらのことが天帝に報告されると、庚申の晩に大きな災いが生じるぞ」という戒めや世の中の生き方の人生訓となっていた。それと共に、江戸幕府は武士を中心とした身分制度を維持するため、「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿思想を普及させ、政治的背景としても利用したのである。

このように、三猿は江戸の初期に発生し、四天王寺の掛軸等を通して、全国にまたたく間に普及していったのである。

江戸末期の四天王寺の庚申の縁日について次のように記されている。

『天王寺南門外の庚申堂の縁日は、庚申の日に行われ立錫の余地のない賑い方である。売られているものは、青面金剛の掛軸、三猿の張子の像等の信仰に関するものや庚申こんにやくという関東薯の茶店は大入満員、参拝者の全てが横串をしゃぶっている。庚申昆布の店がずらりと並んで、お客を呼び込んでいる。お寺からは、盗難除けと称して三角型の袋に入った七色の豆や子供の虫除けとして赤紙包みの小さいお猿さんも供物として、希望者に配布されていた。』

本市の三猿像で最も古いものは、下小池にある延宝二年（一六七四）建立の庚申塔（No. 24）にあり、近隣の市町村に比しても、比較的早く現出している。

また、市内の庚申塔で江戸時代に造られた塔の中の三猿像があるものは、約六十％に達している。本市においても、庚申塔、すなわち「三猿塔」と言っても過言ではない。

また、この猿の由来に基づいて、江戸中期ごろから神道系では猿田彦命の文字塔が見受けられる。これは、山崎闇斎によって体系化された「唯一神道」の影響を強く受けている。特に江戸末期から明治になって建立されたものに「猿田彦命」や「猿田彦大神」の文字塔が目立っている。



下小池、セーノ神坂下の庚申塔

柳田国男の「石神問答」の中にも『庚申を猿田彦神と云う』という一項が見える。本来「猿田彦命」は、道祖神塔の神であったが、山崎闇斎により庚申信仰へと結びついてきた。このように庚申信仰のご本尊は、宗派の隆盛により大きな影響を受け、庚申のご本尊は……という問いに、なかなか回答が出来ないのもむべなるかなの感を強くした。

ともあれ、庚申信仰は、庶民の平穏な生活を願う祈りであったことを結びとする。

四、本市の庚申塔

（一）庚申塔の現状

本市には三十四基の庚申塔が現存しているが、年代が明確になっている塔が二十八基（これは今回の調査で年代が明らかになったものも含む）、磨耗・剥落等で年代不明の塔が六基ある。

また、近年まで現存していたが、開発の波に洗われて消失してしまった塔が二基ある。

一つは、相模野小学校下の鶴間街道と江戸街道の分かれ道にあったもの。二つ目は、立野台第一配水場西方の星の谷街道と巡礼街道との分かれ道にあったものである。

一つ目の塔は、全く記録が残されていないが、座間市文化財調査報告書第九集「座間の道坂橋」（昭和五十九年三月刊行）の二十八項

に次のように記されている。

『この分かれ道には道標があり、重さ二十貫（八十kg前後）あった。かつて春秋の道普請の折り、代々青年達がこの道標をかつぎ力くらべをしたという。この道標は現在所在が不明であり、銘文等も記録されていない。』これが、唯一この塔の存在を記したものである。

二つ目の塔は、「座間むかしむかし第一集」（昭和三十二年刊行）の中に記録され、前述した「座間の道坂橋」三十四項に記録されているもので、碑文を紹介してみると、

『寛政十二年（一八〇〇）に建立されたといわれる道標があり、東南に「かながわ道 ほしの谷道 江戸道」、西南に「大산道 ぐめうじ道」と刻まれていた。』との記録が、ありし日の塔の姿の一端を知ることができるが、碑の大きさ、具像等が彫られていたかは不明である。

これらの庚申塔の造形様式等をまとめてみると、次ページ（表1）のようになる。



立野台第1配水場西方の星の谷街道と巡礼街道の分かれ道
以前ここには道標があった。

〈表1〉

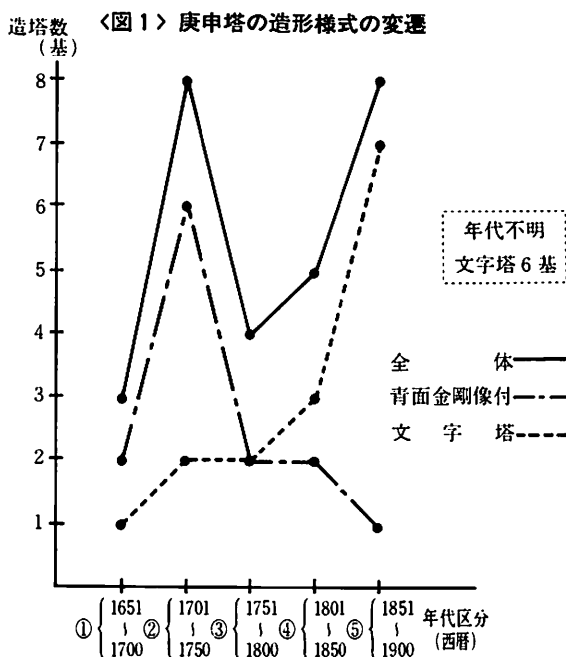
No.	年号	干支	西暦	文字塔	具像(丸印) (背面金剛像)	鬼惡	三 面 一 面	三 狼	輪月輪日	標道	道標・ 主な街道	講中	建 立 地 域				碑 形	備 考
22	文化二	乙丑	一八〇五	庚申供養						道	栗原縦貫	9名	上小池	山状角柱形			山状角柱形	
23	安永六	丁酉	一七七七	庚申□□						道	栗原縦貫	小池 世話人 4名	下小池	山状角柱形			山状角柱形	
25	明和八	辛卯	一七七一		供 服		○		○	道	星の谷街		上栗原	隅丸角柱形			隅丸角柱形	三狼消失
13	明和五	戊子	一七六八		背面金剛供養塔		○		○	巡礼街道	星の谷街道	6名		唐破風付角 柱形			唐破風付角 柱形	榎庚申
17	明和二	乙酉	一七六五	庚申供養塔						羽根沢道	羽根沢			山状角柱形			山状角柱形	
4	寛延二	己巳	一七四九		庚申供養	○			○	三谷道	三谷	村講中 四ツ谷		唐破風付角 柱形			唐破風付角 柱形	
30	延享一	甲子	一七四四			○						村中	中原	船型光背形			船型	船型
9	享保七	壬寅	一七二二		奉供養庚申・世安楽	○						6名		角柱形			角柱形	悪鬼と三狼
13	享保三	戊戌	一七一八	奉庚申塔			○			巡礼街道		9名	小池 東原	唐破風付角 柱形			唐破風付角 柱形	庚申塚
23	正徳三	癸巳	一七二三		奉□申供養	○				府中街道		2名	中下	唐破風付角 柱形			唐破風付角 柱形	
16	宝永六	己丑	一七〇九	奉□庚申供養			○							角柱形			角柱形	
31	宝永四	丁亥	一七〇七			○				巡礼街道		4名 施主	中原	角柱形			角柱形	道標付として は一番古い
21	宝永四	丁亥	一七〇七		(真言宗密教) 密法	○						7名	西原	唐破風付角 柱形			唐破風付角 柱形	密教との関係
29	元禄十三	庚辰	一七〇〇		奉納庚申供養	○	○			・海老名市 郷境		8名	八軒庭	唐破風付角 柱形			唐破風付角 柱形	
33	元禄五	壬申	一六九二		奉納庚申供養	○	○					15名	下小池	角柱形			角柱形	一番古い奇面 金剛像
24	延宝二	甲寅	一六七四	奉待庚申供養 二世安楽処			○			道	栗原縦貫	4名 有志		唐破風付角 柱形			唐破風付角 柱形	一番古い庚申 塔

34	32	14	10	11	2	27	8	7	19	18	28	12	3	6	20	1	5
(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	明治十七	明治二十四	明治十一	明治八	明治五	慶応四	文久三	嘉永七	弘化二	天保四	文政十	文化四
						甲午	辛卯	戊寅	乙亥	壬申	戊辰	癸亥	甲寅	乙巳	癸巳	丁亥	丁卯
		(一八六〇年代)	(一八六〇年代)	(一八六〇年代)	(一八六〇年代)	一八九四	一八九一	一八七八	一八七五	一八七二	一八六八	一八六三	一八五四	一八四五	一八三三	一八二七	一八〇七
		庚申塔		庚申塔		庚申塔	④庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔		庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔		
											○					○	天下泰平国土安全
○	○		○		○						○			○		○	○
											○			○			○
		○		○				○	○		○	○	○				
	巡礼街道	府中街道		道	八王子街			渡船場道			道	星の谷街	江戸街道	府中街道	道	八王子街	道
				4名	(個人)	鈴野	31名	10名	13名		(個人)	大沢	(個人)	稲田	講中	小池村	8名
			中河原	油面	下宿		中河原					神社	相武台				宿尻
		庚申北							星の谷								
					社	日枝神							北河原			社	日枝神
														諏訪明			
社	西原							窪河原		大下	上栗原				上小池		
柱形	隅丸角柱形	山状角柱形	角柱形	皿角柱形	船型光背形	隅丸角柱形	皿角柱形	山状角柱形	山状角柱形	皿角柱形	山状角柱形	山状角柱形	山状角柱形	山状角柱形	山状角柱形	柱形	笠付角柱形
							信徒(丸山教)			龍巢	北向庚申		唯一の円柱形	三猿立像			

(二) 造形様式の変遷について

〈表1〉でまとめたように庚申塔の建立は、延宝二年(一六七四)に初出し、明治二十七年(一八九四)に終焉となっている。

建立年代を五十年区切りにして整理すると、五つの区分になり、その区分で庚申塔の造形様式の変遷をグラフに表してみると〈図1〉のようになる。



この〈図1〉に基づいて、塔の建立年代の分析をしてみると、②の区分(一七〇一―一七五〇年)と⑤の区分(一八五一―一九〇〇年)に、ピークがあることがわかる。

この②と⑤の年代を造形様式の変遷から見ると、それぞれ違った特長があることが分かる。

②の時期は、元禄・享保を中心とした江戸中期に当たり農村の生産力も向上し、それを背景にして庚申塔の建立も盛んになっていた。この時期の造形様式は、背面金剛を主尊とし、悪鬼・三猿像付きの図柄で、庚申塔を代表する様式が、各地域に建てられている。

この傾向は、本市ばかりではなく、相模地方の傾向とも一致し、庚申信仰の主尊として背面金剛の位置が確立したことを示している。

⑤の時期は、幕末から明治の二十年代に当たり、庚申塔建立の終焉の年代でもある。

幕末の動乱期を経て明治維新の近代化政策の大波に洗われ、庚申信仰も衰退期に入り講そのものの存在さえ危ない状況となった。神仏分離・廃仏毀釈・小字の村社合祀化などの中で、じっと耐えた姿が塔の中から聞こえてくるようである。

多くの市町ではこの時期に塔を寺社の中に集中化させているが、本市では建立当時の位置を維持し続け、しかも、新しい塔を建立しているのである。その数は、幕末期に三基、明治期に五基を数えている。

その中で特筆されるのは、個人の力で建立した塔が三基ある点である。これは、講という共同体が衰えた証拠であると共に、庚申信仰が個に対して強い影響力をもっていた伝統力でもあると思う。この時期の造形様式は、道標付文字塔が主流となり商業経済の農村への浸透が活発化していった時代を反映している。

このように特長的な二つの年代区分を通して、時代の変遷を読みとることができるのである。

では、次に造塔様式から庚申塔の歴史を探ることにしてみよう。

ア、三猿像付庚申塔について

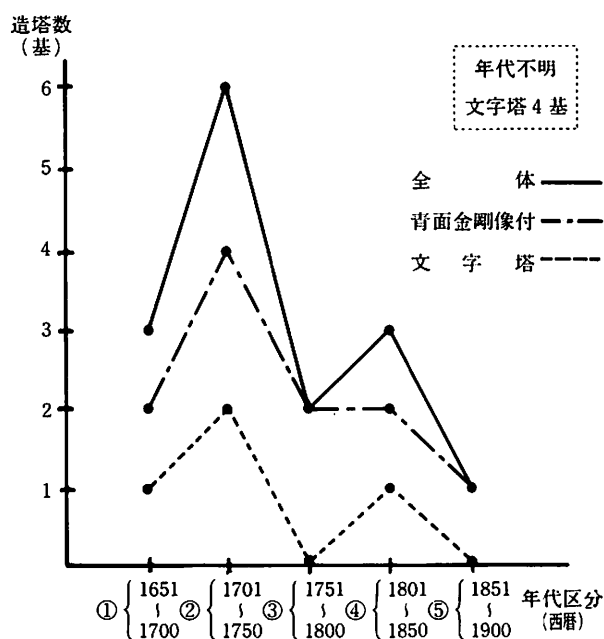
現存する三猿像付庚申塔は十九基ある。そのうち建立年代が明らかなのが十五基で、他の四基は塔の磨耗・剥落のため年代が不明である。

前記した五つの年代区分で、建立年代の変遷をグラフに表してみると下の〈図2〉のようになる。

三猿像付庚申塔は本市においても、約五十五%を占め、庚申信仰と猿との関係の深さを如実に物語っている。

この三猿像の初出は延宝二年（一六七四）建立の小池セーノ神坂傍にある庚申塔（No.4）である。この塔の造形は、上部に文字、下部に三猿が正面・右側面・左側面に一猿ずつ彫られている。この形式は、江戸初期に相模地方に多く見られるもので延宝年間（一六七三～一六八〇）を境にして衰退し、その後、塔の正面上部に背面金

〈図2〉三猿像付庚申塔の変遷



剛像、その下部に三猿がまとめて彫られている図柄へと変化していくのである。

背面金剛像・三猿像の普及は若干の年代的差異はあるが、全国的な傾向と一致している。

やがて④の年代区分（一八〇一～一八五〇）の後半になって庚申塔の造形様式に変化が表れ、背面金剛像の衰退と共に三猿像も同じ運命をたどるのである。

三猿は通称「見猿・聞猿・言猿」の順序で位置付けられているが、必ずしもこの順序が正しいわけでもなく、石塔を彫る上での見本となった掛軸や石工の見本帳等の影響と思われる。ちなみに、本市の庚申塔の三猿の順序をまとめてみると、(十八基中三基は順序不明) ○見猿・聞猿・言猿(九基) ○言猿・聞猿・見猿(三基) ○聞猿・言猿・見猿(二基) ○言猿・見猿・聞猿(一基)となっているのも面白い。

この中でも、特にユニークなのは、小池東原にある享保三年(一七一八)建立の庚申塔(No. 四)の三猿である。

この猿像は、向かって右側面に聞猿、正面に言猿、左側面に見猿が一猿ずつ彫られているが、それぞれが悪鬼をしたがえ、横向きで片手で耳、口、目を押さえている図柄になっている。これなど他とは別系統の掛軸があつたのではないかと思われる。

イ、背面金剛像について

背面金剛像は、十三基建立されており、全て建立年代が明らかである。(建立年代の変遷については〈図1〉を参照していただきたい)

背面金剛像を主尊とする庚申塔の初出は、元禄五年(一六九二)芹沢山王神社境内に安置されている悪鬼・三猿像付の典型的な塔No. 四である。残念ながら磨耗、剝落が著しく今回の調査でも碑文の判読に最も苦労した庚申塔である。

この造形様式の終焉の塔は、北向庚申神社のご神体になっている慶応四年(一八六八)の三猿、道標付の庚申塔(No. 四)である。但し、この塔は、もう一つのご神体である明和八年(一七七二)建立の道標付庚申塔(No. 四)の再建であると伝えられている。とすると、造形様式の終焉は、文化四年(一八〇七)の宿尻の三猿像付の庚申塔(No. 四)であると言うことができる。

即ち、元禄五年(一六九二)～文化四年(一八〇七)の百十五年間が、背面金剛像を主尊とした庚申塔が建立された期間である。

造形様式		基
悪鬼・三猿像付	3	
悪鬼・三猿像・道標付	2	
三猿像付	3	
三猿像・道標付	1	
日輪・月輪・三猿像付	1	
道標付	1	
背面金剛像のみ	2	

本市に建立されたこの様式の庚申塔を分析してみると上記のようになる。前述したように背面金剛像と三猿像の組み合わせは、十基に及び、この組み合わせのパターンの根強さをこの表でも示している。

他市に見られる最も典型的な様式、日・月輪、二羽の鳥、悪鬼、三猿像という図柄は見受けられない。

特に、二羽の鳥が一基にも付いていないのは不思議である。

背面金剛像の図柄を見ると、全部が六臂・三眼・合掌型である。これは、背面金剛像を主尊とした庚申信仰が確立された時期と

一致していることを証拠づけるものである。

背面金剛像は、忿怒の相をしていると言い伝えられているが、本市の庚申塔に刻まれている背面金剛像は殆どか穏やかな顔をしているのが特長である。

比較的忿怒の原型に近いのは、相武台プール横にある宝永四年（一七〇七）建立の庚申塔（No. 四）である。

ウ、文字塔について

文字塔は二十一基を数え、本市に現存する庚申塔の造形様式の中でも最も多い様式である。

特に、⑤の年代区分（一八五一―一九〇〇）に建立された文字塔は七基を数え、三十三％に当たる。また、年代不明の六基を除いてみると、四十七％に当たる。

この現象は、本市ばかりではなく、全国的な趨勢でもある。正にこの年代は、文字塔の時代といえよう。何故、文字塔が主流となつていたのであろうか、この点を論述してみよう。

一つには、造塔費用の削減・信仰心の衰退現象であると言われる。確かにこのような傾向は見うけられるが、中には飾り文字を使ったり、かなりな書家が書いたと思われる達筆な文字を見かける。本市にはないが、他市の例では、高名な書家や宗教家の落款、書名がある碑文もあるという。これらの点を考えても、先の説だけでは納得いかない部面がある。

この時代は、寺小屋の普及等により、文字を理解できる層が庶民にまで拡大されていった。また、文字を学ぶことにより、文字を書きとして鑑賞できるようになり、それがより美しい文字への憧れとなつて表れていくのである。そのため、塔に刻む文字もより美しいものへ、飾り文字等の華やかなものへの指向が働いてきたと思われる。

本市の文字塔の中で最も美しい文字は、栗原大下にある明治五年（一八七二）建立の庚申塔（No. 四）で、「庚申塔」と草書で書かれた文字は、そうとうの書家の字と推定できると共に、塔の文字を通して墨痕鮮やかな原書を彷彿させてくれるのである。

また、飾り文字としては、四ツ谷の北河原の円柱形の庚申塔（No. 三）に書かれている「ぬね塔」の文字は、円柱の碑形に映え、碑文を通して建立者の心意気が伝わってくるようである。

文字塔	基
庚申塔	11
庚申供養	1
奉庚申供養	1
奉庚申供養塔	1
奉庚申塔	1
奉庚申二世安樂	1
不明	4

では、文字塔の正面に書かれた文字をまとめてみると上の表のようになる。

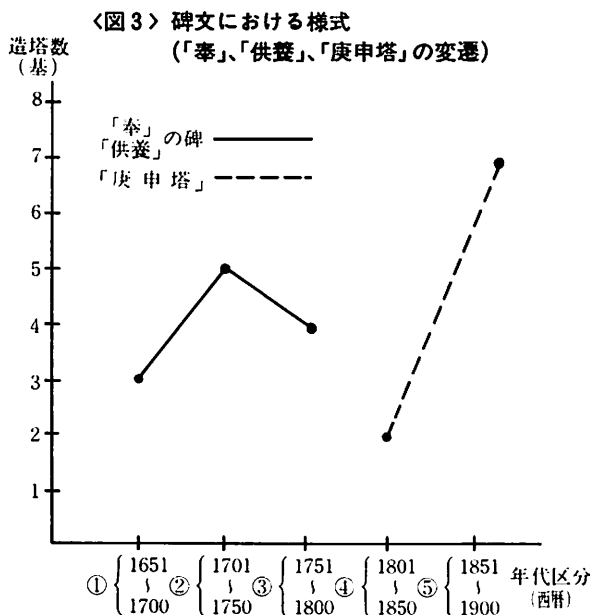
この中で圧倒的に多いのは、庚申塔と書かれた文字である。

この形態の初出は、栗原の上小池にある天保四年（一八三三）建立の庚申塔（No. 四）、栗原にある明治二十七年（一八九四）の庚申塔（No. 四）まで約六十年間に集中し、庚申塔建立末期の主流を占めた造形

形態である。

①・②の年代に建立された文字塔は四基で少ないが、「奉」・「供養」の文字が書かれており、庚申のご本尊に塔を奉ったり、ご本尊を供養したりする姿勢が感じられ、庚申信仰の高揚期の庶民の熱い思いが碑文の文字から滲み出てくるようである。

一方、④・⑤の年代にかけての「庚申塔」一辺倒の造形様式は、庚申信仰のパターン化と形態化を示す一つの証拠でもあるが、前述



した教育の普及と係わりも見逃すことはできない。

このことと青面金剛像付庚申塔を合わせて碑文を分析してみると、上の〈図3〉のようになる。

前述した「奉」・「供養」の文字が①と②の年代に集中し三の年代に終焉になっている点に注意し、文字塔と具像塔の碑文の傾向の一致は、先に述べた信仰形態を裏付ける資料でもある。

また、その他に二世安楽・天下泰平国土安全・庚申塔の碑文があり、碑文の中に宗教家、建立者の意図を垣間見ることができることは、本市の庚申信仰の歴史の上で注目すべきことである。

また、文字塔における造形様式をまとめてみると、上の表のようになる。

文字だけの庚申塔を除くと、三猿像付と道標付の塔が多いのが特長といえよう。

この造形様式については、別稿に記してあるので、それらの論述

はその項にゆずれ、傾向のみを表の中で確認してもらいたい。

エ、道標を兼ねた庚申塔について

道標を兼ねた庚申塔は、文字塔、青面金剛像付の具像塔を合わせて八基を数える。

現存するこの様式の庚申塔の初出は、栗原中原のストア―横にある宝永四年（一七〇七）建立の青面金剛像付の具像塔（No. ㊦）で、右側面に「にしわほしのやみち」、「ひがしくみようじみち」と刻まれている。

また、文字塔の初出は、四ツ谷北河原にある嘉永七年（一八五四）建立の円柱形の庚申塔（No. ㊧）で、右側面に「八王子ほしのやみち」、左側面に「厚木ひら塚道」と記されている。その他の道標を検討してみると、大部分が仮名書きのものが多く、誰が見ても非常に読みやすいものになっている。

即ち、道標は、不特定多数の旅人に道案内をする標識であるので、多くの人に読めなくてはその役目をしないので、主として仮名を用いたものと推定する。これは、庚申塔だけではなく、道標付の石造塔にも言えることである。

例えば、入谷皆原にある享和元年（一八〇一）建立の不動講供養塔には「左ふじさわ かまくら道」と刻まれており、前記のことを物語っている。

この仮名書きを主体とした道標も、教育制度の普及にともなう、しだいに漢字併用から漢字へと移行していくのである。また、道標も時代の動きを敏感に捉え、安政六年（一八五九）横浜港の開港にともない、神奈川、横浜の文字が増加している。

例えば、相武台神社内にある文久三年（一八六三）建立の文字塔

（No. ㊨）に「加奈川」、入谷三峯坂下にある明治八年（一八七五）建立の文字塔に「東京 横浜」の文字が、新田宿窪河原の旧堤防上の文字塔に「神奈かゑ」の文字が見えるもの、需要と供給の要素を見事に描きだしているのである。

一方、碑文の方は、漢字を主体とした記述が多く、中には種子や難しいお経の一部が刻まれているものもあり、道標とは対象的である。碑文は、理解されなくてもよい目的で刻まれ、信仰の中の呪術性や漢字の持つ権威性等が強調された証拠であろう。

以上、本市に現存する庚申塔の変遷を造形様式から追究してみたが、次に庚申信仰と庚申塔の関係について記してみることにする。

（三）修験行者・日吉山王信仰について

庚申塔の建立に当たっては、各宗派の修験行者が大きく係わっており、日吉山王信仰の影響を色濃く受けていることを前述した「三、庚申塔の歴史」の中で記したが、本市におけるそれらの係わりについて述べてみよう。天保十二年（一八四一）に刊行された「新編相模風土記稿」の中に、本市に係わる修験行者のことが記されている。

『以下同書を「風土記稿」と略す』

○座間入谷村の項に――

座間院 本山修験小田原、王瀬坊配下 瀧谷山現星寺大坊ト號ス。

坊號ヲモ 開山ハ定賢ト云フ。正和三年五月二十日寂ス。本尊不動尊ヲ置ク。

○新田宿村の項に――

別當壽命院 本山修驗小田原、王瀬坊配下。 新田山昌清寺開山ノ名ヲ用ウ。ト號ス。開

山昌清。信濃ノ人。横田氏ナリト云。上杉景勝ノ文書一通ヲ藏ス。

是ハ昌清カ先祖。横田右馬允及横田織部佑ヘ與ヘシ物ナリ。

年號ヲ書セス。九月十九日トノミアリ。

本尊不動。及役行者ノ像ヲ安ス。

○四ツ谷村の項に――

大覺院 當山修驗。吉岡村瀧岡寺配下。 開基大覺院。正徳三年五月二十八日死ス。 本尊不動。

一方、同書により山王社の記録を拾ひ出してみると、

○座間宿村の項に――

飯綱權現社（略）・天神社（略）・淺間社（略）・**山王社**・御獄社

……

○座間入谷村の項に――

諏訪社（略）・第六天社・若宮八幡宮・神明宮・稻荷社・**山王社**

古松一株神木ナリ燵・金毘羅社……

○四ツ谷村の項に――

山王社 村ノ鎮守ナリ。例祭七月二十一日。浄土寺持。末社

諏訪 稻荷ニ 秋葉 三峯

○栗原村の項に――

王子權現社（略）・若宮權現社（略）・龍藏權現社 村ノ鎮守。

山王稻荷 ヲ合祠ス。……

絹張明神社（略）・住吉社（略）・**山王社**・稻荷社・辯天社・崇

福寺・妙禪寺・專福寺

これらの資料に基づき、地域別の庚申塔と修驗行者と、山王社との関係を表にまとめてみると、次ページの「表2」のようになる。

この「表2」の説明をする前に、修驗行者についての簡単な説明を加えることにする。

修驗行者は修驗道をきわめる行者のことで、日本古来の山岳信仰が密教、道教などの影響を受け、平安時代中期頃に宗教的体系をつくりあげたものである。

中でも有名なものは、役の行者といわれる役小角で、奈良時代中期の代表的な修驗行者である。

本市の新田宿の諏訪明神社にある「神変大菩薩」の碑は、役小角の顕彰碑である。「神変大菩薩」とは役小角死後千百年目に当たる寛政十一年（一七九九）に、役小角の遺徳をたたえて、朝廷から贈られた称号である。本市と修驗行者との関係を表した資料として貴重である。

室町時代になると教義も確立し、熊野三山を修業の地とし、京都の山城聖護院を本山とする天台系の本山派が確立され、続いて、吉野の金峯山を修業の地とし、京都の醍醐三宝院を本山とする真言系当山派が成立した。当山派が強固な組織として確立するのは、江戸時代に入ってからである。その他に、本山、当山両派とは別に東北の羽黒山・関東の日光山・九州の彦山が有力な修驗行者の修業の地

〈表2〉

地 域	基数	建立位置(神社・小字等) (数字は基数)	風土記稿等に記された	
			修 験 行 者	山 王 社
四ツ谷	4	日 枝 神 社 2	大覚院 (正徳三年五月没) ＝当山派修験＝	山王社 (現日枝神社) 浄土寺持
		西 三 谷 1		
		北 河 原 1		
新田宿	3	宿 尻 1	別当寿命院昌三清 (明暦二年九月没) ＝本山派修験＝ 現諏訪明神社祖	
		諏訪明神社 1		
		窪 河 原 1		
座 間	5	中 河 原 3		山王社(富士山公園＝座間神社へ合祀)
		下 宿 1		
		相武台神社(元相武台前駅前府中・江戸街道分岐点)1		
座 間 入 谷	5	明 王 堂 1	座間院定賢 (正和三年五月没) 瀧谷山大坊	山王社 (羽根沢)
		三 峯 台 1		
		星 の 谷 1		
		庚 申 北 1		
		羽 根 沢 1		
栗 原	17	小 池 6		山王社 (現山王神社) 龍藏權現内山王稲荷
		北向庚申神社 2		
		上 栗 原 2		
		芹沢山王神社 2		
		中 原 2		
		中 下 1		
		大 下 1		
		八 軒 庭 1		

として知られている。

本県では、大山・箱根山・日向山・八菅山・高麗山・石老山・日金山が修験の地として古くから知られている。江戸時代になって幕府は、政策として修験行者の取り締まりを強化し、修験行者を本山派(天台系山城の聖護院)、当山派(真言系京都醍醐の三宝院)、羽黒派(天台系江戸上野の東叡山寛永寺)の三派に統一し、各行者はその派に属することを命じ、許可なく各地を遊行することを禁じた。

県内で一番修験行者の多かった箱根派修験は解散させられ、大山の修験行者は山から放逐された。このような現象が全国各地で起り、修験行者は各村々に散在していったのである。定着した修験行者は、村人の依頼にたえて鎮守の別当や仏寺の住職になることが多かった。このように安住の地を得た修験行者たちは、村のお祭りとはもとより、村の日待、月待、星まつり、庚申、大師などの講を主催し、村人の信仰の指導者として活躍していった。これらの在地修験行者の生活ぶりを、宮家

準氏はその著『修験道』『教育社歴史新書』の中に次のように記している。

「修験者はまた正月の春祈禱からはじまって、家祈禱・虫除け・風まつり・雨乞い・晴天祈願など一年間の種々の祈願、安産祈願、幼児を本尊の子にして加護ねがう取子・成人式・厄年ばらい・葬式と人々の一生にかかわる種々の儀式も行った。陰陽道的な卜占いや加治祈禱、調伏や憑きものおとしの修法、符呪やまじないの類はとくに好んで行われた。」と在地の修験行者の生活を描写している。

即ち、彼等は宗教家でもあり、時には祭文語りや念仏踊り等の芸能の導入者でもあり、時には医者役も果しているスーパーマンに近い存在でもあった。

以上、少し長くなったが修験行者について解説を加えてみた。

さて、稿を「表2」の説明にもどして各地域の庚申塔と修験行者・山王社との関係について追究してみよう。

ア、四ツ谷地域

「表2」にある山王社は、現日枝神社である。四ツ谷地域には別に鎮守として天神社があったが、大正二年（一九一三）四月、県の指示で天神社が山王社へ合祀され日枝神社となった。この神社には、山王大権現を祀ったお堂があつて日吉大社または山王社と呼ばれていたという。四ツ谷に四基ある庚申塔の内二基は、日吉山王信仰の影響を受けて建立されたものであることは、これらの事実からも証明

できるのである。

四ツ谷地域の発祥地は、相模川の旧堤防近くの西三谷だと言われている。ここに浄土寺があつたが、度々の洪水で江戸中期に村ごと現在地に移されたとの言い伝えが残っている。修験行者の大覺院もこの地に住んでいたのではないかと思われる。

寛延二年（一七四九）建立の青面金剛像付庚申塔（No.4）に記された四ツ谷村三谷講中も大覺院の影響を受けたのではないかと推定される。

イ、新田宿地域

別当寿命院昌清は、現諏訪明神社神官の新田氏の先祖で、この地域を中心とした種々の信仰に大きな影響を及ぼしている。新田氏は代々修験道を修行し、熊野山や大峯山へ入っている。先述した「神変大菩薩」の碑も、修験行者の開基である役小角を崇拝して建立したものであると思われる。昌清の七代目に当たる寿命院円隆は、文化十三年（一一八一七）頃、寺小屋を開き地域を中心とした子弟の教育に当たっている。その後英雄、一胤と続き、明治六年公立学校が発足するまでの約六十年間にわたって地域の幾多の人材を育てるのに貢献している。一胤を顕彰した筆塚碑が神社に残されている。

一方、諏訪明神社は新田宿の鎮守であると共に、「神変大菩薩碑」を初め、「庚申塔」、「富士講記念碑」、「筆塚碑」等数多くの石造物があり、石造物の博物館の様を呈している。これらの石造物は、

地域に密着した活動が続けた修験行者の指導者としての力量を示す証である。



—諏訪明神社内の石造物—

(左は庚申塔(No.6)、右の2基は富士山信仰碑)

この地域に庚申塔は三基だが、塔と講中がしっかり結びついている例として注目される。

諏訪明神社にある弘化二年(一八四五)建立の庚申塔(No.6)は上組。宿尻にある文化四年(一八〇七)建立の庚申塔(No.5)は下

組。窪河原にある明治十一年(一八七八)建立の庚申塔(No.7)は建立者九名の子孫によって現在も講が続いている。

ウ、座間地域

この地域にはかつて山王社が現富士山公園西南山麓にあったが、庚申信仰とは直接結びついていないようである。この地域で注目されるのは、中河原地区である。座間地域五基中三基が、この地区に集中している点である。

この地区は、県道座間・関口線に沿い相模川に近い集落で長宿と入谷の皆原の人が、江戸中期に開拓した場所である。

中でも珍しいのは、享保七年(一七二二)建立の庚申塔(No.9)で、観音の種子「」が刻まれており、宗派との結びつきを示す貴重な資料である。

これは推定の域を出ないが、中河原地区を開拓した人たちが旧集落の近くにあった星の谷観音を偲んで観音講をつくり、後にそれが母体となり庚申講ができたのではないかと思われる。

No.8の庚申塔は、明治二十四年(一八九一)、丸山教の信徒が富士山登拝の記念碑として建立したものである。

丸山教とは、もともと江戸中期に起った富士講一派であったが、明治三年(一八七〇)伊藤六兵衛に創始された教派神道である。富士山へ登拝の時、笠に⑩の文字を記したので、丸山教と称するようになった。

富士山の信仰を中心とした教義によって、明治中期に隆盛をきわめたが、現在は神奈川・静岡両県を中心として教会があり、本部は川崎市登戸にある。この庚申塔に名を連ねた三十一名は、相模原市磯部にある支部の人たちである。

No. 四の庚申塔は、剝落がひどく年代不明であるが、三面に一猿が彫られている造形様式から推定してNo. 四の庚申塔がNo. 四の庚申塔の再建ではないかと思われる。この地域は他地域とは違い庚申塔は少ないが、江戸時代から庚申講が盛んに行われていた。特に、元文四年（一七三九）の中宿の庚申講の様子が、当時の名主片野庄右衛門の日記に記されている（このことについては「四 講中及び講」の項で詳述する）。これは、前述した『三、庚申塔の歴史』の中で「塔そのものが信仰の対象でなく、講の記念碑的要素が強い」と、論述したが、正に庄右衛門の日記に書かれている庚申講は、それを裏付ける史料ではないかと思われる。

エ、座間入谷地域

この地域も新田宿と同じで、庚申信仰と修験行者との係わりを色濃く残している地域である。

特に、小字の大坊谷戸は、かつて星の谷観音が本堂山にあった頃、観音堂の別当であった瀧谷山座間院現星寺大坊定賢が修験道場を開いた場所として知られ、小字名もそこに由来している。この大坊定賢は、風土記稿によると正和三年（一二二四）没している。大坊谷

戸の修験道場は、この記事から推測して少なくとも、今から六百数十年たっていると考えられる。

修験行者と庚申信仰との歴史的係わりから考えてみると、大坊谷戸を中心としての庚申信仰は中世から近世初頭にかけて結成された公算が大である。この付近に庚申に因んだ小字が六箇所存在する。

それは、庚申下・庚申南・庚申北・向庚申南・向庚申北・南庚申北の小字名である。

伝承によると、この地名はNo. 四の三峯台にある榎庚申から発祥していると言われてきたが、この庚申塔は江戸後期初頭の明和五年（一七六八）の建立になっている。この年代、この地の歴史からみて小字の名称としては新しいのではないかと思われる。

推定であるが、榎庚申が造塔される以前にこの付近に庚申塚が置かれ、その付近に榎庚申が建立されたのではないかと考えられる。

庚申塚とは、中世末から近世初頭にかけて築かれた庚申の供養塚で、造塔を伴う庚申信仰が発達するにつれて衰退していったと伝えられている。したがって、庚申に因む小字名も古くからあった庚申塚から発祥しているという考えは飛躍であろうか。

ともあれ、入谷にある五基の庚申塔のうち四基までが、この大坊谷戸を中心として建立されていることは、修験行者と庚申信仰の深い結びつきを持っているという貴重な証拠である。

また、かつてここには修験行者の守り本尊である不動明王堂があ

り、現在の明王の地名の発祥の地でもある。



— 榎庚申付近 —

(左に見えるのが三峯台の庚申塔(No.13)、横を通る)
道は巡礼街道

他の一基は、羽根沢地区にある庚申塔で、明和二年(一六七五)の建立となっている。風土記稿にある山王社はかつてこの地区に鎮座していた神社で、小字名の中に山王山・山王前の名を残している。明治十二年(一八七九)に編纂された皇国地誌残稿の中に、この山王社のことが、「日枝神社 雑社 已十度 字山王ノ頂ニアリ」と

記されている。

この資料と庚申塔の因果関係は、塔の碑文には記されていないが、山王社と庚申信仰の結び付きを雰囲気として感じる庚申塔である。

また、この地区には、修験行者との関係があると思われる「南光坊」、「清造坊」という小字名が残されている。

南光坊は市道天台線の南側の立野台西斜面の小字名で、一方、清造坊は羽根沢谷を挟んで反対の東の斜面に位置しているのである。

この「坊」とは、京都の平安京の区画や僧の住家などを指す言葉であると言われている。かつてここには、江戸時代に大坊谷戸の名を残した瀧谷山座間院現星寺大坊定賢の流れを汲む修験道場があった場所なので、小字名にこの名が残されたと思われる。それを裏付ける伝承も残されている。

その伝承によると、江戸時代末期に、この地区の奥津総本家の主人がこの修験道場の修験者に案内され、羽黒山へ登拝したという話である。

この小字名に残された修験道場の詳細は不明だが、これらの事柄から推測してみると、修験行者と庚申信仰との結び付きを色濃く感じる次第である。しかし、この地区には庚申塔が一基しか現存していないが、修験堂や山王社との関係から考察して、かつてはもっと数があったのではないかと思われる。現に、羽根沢講中の名で立野

台公園上の通称芝原道に庚申塔がたつていたと言われる。

オ、栗原地域

この地域は面積が広いこともあるが、現存する庚申塔の約五十％に当たる十七基が建立されている。

〈表3〉

地区	場所 (小字)			基数	計
	上小池	下小池	北向庚申神社		
小池	4	2	2	6	
上栗原	嘉兵衛坂上	1	1	4	
	上栗原	1	1		
中栗原	中原	2		2	
下栗原	中下	1		3	
	八軒庭	1			
芹沢	大下	1		2	
	山王神社内	2			

(7) 小池地区の庚申塔

この表で明らかのように、この地区に六基の庚申塔が残されている。その六基の塔の建立場所を検討してみると三つの場所に伸よく二基ずつ建っている。

- ① No. 19・20の庚申塔がある小池東原、② No. 21・22 (No. 22の塔は、

それらの庚申塔の建

立場所を小字別等にしてまとめてみると〈表3〉のようになる。

この〈表3〉に基づ

いて「小池」、「上栗原」、「芹沢」地区について

日吉山王信仰及び修験

行者との係わりについて論述することにした。

他の地区は、個票を参照していただきたい。

現在、小池坂下に安置してあるが、かつては、No. 19の近くにあったものを移転したものである。庚申塔がある小池西原、③ No. 23・24の庚申塔のある下小池。そして、三つの場所がそれぞれ小池地区の集落の境に建っていることである。

①の場所の小池東原は、かつて「庚申塚」と呼ばれており、小池の庚申信仰の発祥の地ではないかと思われる。

この庚申塚というのは、庚申信仰の歴史の上で注目されるもので、一般的には中世後期から近世初頭にかけて造られた塚で、造塔を伴う以前の庚申信仰の形態を今日に伝えていると思われる。

現在、塚は存在していないが、小池地区の庚申塔の建立数、庚申塔の年代の古さからいって、伝承どおり「庚申塚」が存在していたのではないかと推定できる。

②の場所の小池西原は、小池の旧道に当たり明治六年(一八七三)栗原神社に合祀されるまであった絹張社の付近に建立されている。中でも注目されるのは、No. 19宝永四年(一七〇七)建立の青面金剛像付具像塔である。この塔の左側面に「真言宗系陀羅尼息災法」の経文の一部が刻まれており、修験行者との関係を想像させる碑文である。

真言宗系陀羅尼息災法は、修験行者の必修のお経で憑きものおとしや調伏に九字と共に誦えたものである。また、真言宗系陀羅尼息災法の中に、青面金剛についての記載がある点等から推察して、修

験行者との係わりを強く感ずる庚申塔である。

③の場所のNo. 24の塔は前述してあるように、本市初出の庚申塔で、下小池セーノ神坂下にあつて延宝二年（一六七四）の建立となつてゐる。建立者氏名から庚申信仰が上栗原地区との関係を持つて講が開かれていたことを証拠づける塔でもある。

「庚申塚」・碑文の「真言宗系陀羅尼息災法」・「庚申塔の基数の多さ」・「庚申塔の年代の古さ」等から推測してみると、修験行者との関係がオーバーラップしてくるのである。

しかし、前掲した風土記稿にも庚申信仰に関係のある修験行者や日吉山王信仰の記事を見出すことはできない。

そこで、修験行者との関係について大胆な推測を試みてみた。

それは、目久尻川を媒介とした相模一宮寒川神社との関係である。伝承によると、五十年程前までは、三月三日「小池の弁天社」の祭礼になると寒川村の代表が十数キロの道を歩いて参拝に訪れ、水不足のないよう祈願したという。これは古くから行われている行事であつたという。また、寒川神社の御供田（神社領）が下小池の南方（現市営水道第三水源井付近）にあり、分社もあつたといわれる。こういう関係を通じて、寒川神社に仕えていた修験行者が小池地区を訪れ、庚申信仰を広めていったのではないかという推測である。それを裏付けるものとして、No. 22の庚申塔の施主九名中の青木宗政の名に注目してみた。

何故ならば、青木姓は小池地区の伝承や文献の中にもこの姓は存在してなく、しかも宗政という名前は農民の名として異質な気がする。また、施主名の最後に列記されている点から考えて、この青木宗政なる人物はかつて寒川神社に所属していた修験者で、この地区に定住した在地修験者か、No. 21・22の二基の庚申塔位地から考えて絹張社の神官ではなかつたかという仮説である。

『座間郷土かるた』の絵札より

「①弁天の小池に始まる目久尻川」



いずれにしろ、寒川神社と小池地区の結び付きは、目久尻川を通じて深い係わりがあり、そのことが小池地区の庚申信仰の歴史を解く鍵ではないかと思われる。

(4) 上栗原地区

先に、下小池の庚申塔の中で上栗原地区との係わりについて述べたが上栗原地区の庚申塔で現存する塔は四基を数えている。しかし以前はもっと数があったのではないかと思われる。特に、嘉兵衛坂上には庚申塔を中心として数基の石造物があったらしい。No. 27明治二十七年（一八九四）の庚申塔は、以前いくつかの石造物があったが散逸してしまったので、それを供養する意味を込めて鈴野太郎氏が個人で再建している。

この上栗原地区で庚申信仰との関連で注目しなければならないのは、嘉平衛坂下にある石造群の中の出羽三山供養塔（湯殿山、月山、羽黒山）である。この碑文には年号が刻まれていないので、建立年代は不明であるが、出羽三山への登拝を目的とした講があったことはこの碑が証明している。

出羽三山は、羽黒系修験行者の聖地である。当然それを指導した修験行者がいたはずである。上栗原地区にはこの出羽三山の供養塔についての伝承や講について具体的に証明できるものは何も残されてはいないが、旧高座郡にはいくつかの出羽三山供養塔が残されている。その供養塔から出羽三山信仰をさぐってみることにしよう。



—嘉兵衛坂下にある上栗原の石造物群—
(左より六字名号碑、道祖神塔、秋葉山献燈、出羽三山供養塔)

このことについて、松村雄介氏はその著書「相模の石仏」の中で『出羽三山への信仰も、羽黒派修験の霊山に対する信仰であると同時に相模の民衆にとっては遠く出羽国まで旅をするという困難を伴う信仰であった。そして、地元大山への信仰を別にすれば、相模における山岳信仰としては富士山や木曽御岳山への登拝などに先行して、もっとも早くから組織化されていたと思われ、旧高座郡を中心

に散在する出羽三山の供養塔によって、この信仰が在地の修験と地方を檀那場^{だんなば}として出羽からやってきた修験の双方が関与し、高揚されたことを跡づけることができる。』と、修験行者との関連を記している。

また、供養塔の関係について、

『組織化された相模での出羽三山信仰を証明できる供養塔は、まず近世中期の高座郡にあらわれる。』と、記しており、藤沢市葛原と菖蒲沢の安永三年（一七七四）に造立された供養塔を紹介している。

その中に、寿原寺の観明法印という修験行者の名があり、その修験観明のことを紹介している。その部分を引用すると、

『湯殿山を中心とする三山信仰には、真言系寺院とこれらに連なる当山派修験が、主導的な役割を勤めていた。寿原寺の観明も当山派修験の活動家として、その地に出羽三山への信仰を詰め、地域住民を率いて遠く出羽まで巡拝の旅を遂行したのであろう。このうち高座郡や隣接する鎌倉郡、大住郡などにつぎつぎと出羽三山碑が造立されていくが、遺存する供養塔で判明する限り、この地方一帯に出羽三山信仰を最初に導入したのは、在地の宗教指導者である修験観明であるということができる。』

彼は、その後の天明二年（一七八二）造立の藤沢市用田にある供養塔にも名を残している。……………出羽三山信仰は、在地修験による布教だけでなく、羽黒山から檀那廻りをしてくる羽黒修験によっ

ても高揚される。

ここにも、在地の修験行者と出羽三山から派遣された修験との係わりを示している。

しかし、この三山信仰は、近世末になると富士信仰や木曾御岳信仰、秋葉山信仰におされ衰退していくのである。』

引用がすこし長くなったが、上栗原地区の出羽三山供養塔もこの高揚期の一七七〇年代から一八五〇年代に建立されたと推定している。そこには、修験行者が大きく係わってくることは自明の理である。

この視点から捉えてみると、上栗原地区の北向庚申塔・嘉兵衛坂上の消失した庚申塔等の建立に修験行者が大きく係わっていたと思われる。

(ウ) 芹沢地区

風土記稿栗原村の項にある「山王社」は、芹沢地区にある現山王神社である。この神社の創立年代等はいっさい不明だが、伝承によると、この地区の祖先は戦国時代織田信長に一敗地にまみれた甲州武田の末裔だと言われている。その時、地区の守り神として、この社を建てたと伝えられている。かつてこの社の近くに山王塚があり、境内には枝が地に垂れる程の松の太木があったということである。明治六年（一八七三）に栗原神社に合祀されたが、明治三十年頃この地区に疫病が流行したので、元の場所に戻し祀ったというこ

とである。

この境内に、No. 図の元禄五年（一六九二）建立の庚申塔とNo. 図の年代不明の庚申塔が他の石造物数基と共に安置されている。かつてこれらの石造物は、近くにあったと伝えられる「山王塚」に安置されていたと思われる。この塚の存在は、日吉山王信仰と庚申信仰との結び付きを示す貴重な伝承である。

また、No. 図の庚申塔が今回の調査で、本市初出の背面金剛像・悪鬼・三猿像付きの具像塔であることが判明した点は、本市の庚申塔の歴史からみて重要な発見であった。

（四）講中及び講について

庚申塔は、講の記念碑として建立され信仰の対象でないことは前述した通りである。では、庚申塔を建立したり、庚申信仰を支えた講の人数は何人位だったのであろうか、塔の建立者氏名から考察してみることとする。

人数	基数
2～5	3
6～9	7
10～15	3
31	1

複数の建立者の氏名が刻まれている塔は十四基あり、それらの塔の建立者数をまとめてみると、上の表のようになる。この表でも明らかかなように「六～九人」の数字が集中している。この数字から判断してみると、講中の人数はだいたい六～九人の人

数が平均的なものであろう。この傾向は、全国的にみてもほぼ妥当な線だといえる。しかも構成員の地域的な様子をみると、ごく狭い小字単位ぐらいの規模に限定されており、村民が必ず入っているとは限らないところに特長がある。サイトバライや村祭りが村落全員によって営まれるのとは対象的で、有志による団体であることは明白である。また、祖先代々引き継がれており、村への転居者が講中に加わできなかったことも事実として存在していた。

このことについて、宗教史の研究者である桜井徳太郎氏は、次のように論述している。

『民間信仰は集団全体が、長い時間的な経験をもとに、数代の世代を通じて次々と継承してきたものであるため、きわめて伝統性、持続性をもっている。』

本市において講がどのようにして、江戸時代に営まれたかを知る史料は少ないが、幸い座間宿村名主片野庄右衛門の元文四年（一七三九）の日記が残されているので、その日記の中から庚申講に関する部分を抜粋して記載してみよう。（この部分は「座間むかしむかし第五集『座間市内の庚申信仰』故鈴木芳夫氏著」より一部再構成して引用）

『（一月二十五日の記事）この年の初めの庚申講がこの日に開かれている。本来一月十三日が庚申塔の日に当たったのだが、庄右衛門が名主として江戸へ出張していたので、延期されていたものである。明記していないが「宿」は庄右衛門方であったようだ。』

「四月二十九日の記事」前年は何年にもない不作で、百姓たちが難渋しており、領主（大久保江七兵衛）に陳情して救済を仰ぐほどであったので、この講もこの年の夏の収穫があるまで、開催を延期することにした。そして品物などを持ちよることをやめ、一人一回十四文ずつ「かけ銭」（積み立て金）をし、それを飯綱権現（現座間神社）の坂の建設費に当てることを予定した。

講員は明記はないが七名であったようだ。」

「第三回は六月十六日「間かのへ講」を開いている。「間かのへ講」とは庚申の日の中間の適当な日に開催するらしい。」

「第四回目を七月三日に開き、第五回目は当り日（庚申の日）の七月十五日に開いている。さらに第六回目を九月四日に、第七回目の「間かのへ講」を十月二日に開いている。」

そして、十一月十七日、この年最後の講を開いて、翌年が庚申の年に当たるので、この席で翌年の「宿」をクジできめている。その順序は次の通りである。

「正月 市右衛門 三月 李左衛門 五月 手前（庄右衛門） 八月 佐五郎 十月 勘左衛門 極月（十二月） 八右衛門。」

この日記により、講の名称・講の人数・講の宿は講中の家を持ち廻りにしていること、講の開催日が前年に決められていること、この講では積み立て金を神社の坂の建設費に当てていること等がわかり、庚申講の様子を垣間見ることができて、たいへん興味深い史料である。

特に以前から疑問視されていた「講」が盛んであった座間宿村に庚申塔が何故少ないのかは、この日記により解明されたのである。

即ち、他の講中は積み立て金を塔の建立費に当てているが、この講中の人たちは神社の坂の修復の費用に当てていたためである。

また、庚申信仰の講はこのように七・八名の有志により営まれており、年々計画が継承され持続している姿がよく日記の中に記されている。

まとめに変えて

庚申信仰は、庚申塔と共に静かな終焉を迎えている。

この調査報告書をまとめながら、歴史の持つ過酷さをしみじみと味わった次第である。それは、つい最近まで行われていた行事にもかかわらず、時代の波はその事実を忘却の彼方へ葬り去ろうとしていることである。人の心は移ろいやすいというが、けだし、名言である。私たちの祖先が子孫への継承として残した庚申塔も、庚申信仰もすでに過去の遺物である。しかし、庚申塔の中に刻まれた「二世安楽」の願いは、人生の永遠の課題でもある。終焉を迎えた庚申信仰や庚申塔の歴史をこのまま葬らせてしまうことは、「二世安楽」の願いを子々孫々まで伝えたいと思った私たちの祖先の熱いまなざしを捨てることでもある。そんな思いにかられながら稿を進めていった。まだ解明しなければならない幾多の部分を残しながら、稿を綴じたいことをお許しいただきたい。

座間の庚申塔

字	No.	名 称	所 在 地	碑 形	形 態	銘 文	年 代	備 考
四 ツ 谷	①	日枝神社の庚申塔(1)	四ツ谷479 日枝神社内	唐破風付角柱形	背面金剛像・三猿像付	本文参照	文政10. 6. 吉(1827)	No.2の再建か
	②	日枝神社の庚申塔(2)	四ツ谷479 "	船 型 光 背 形	文字塔・三猿像付・有縁	消失	不 明	
	③	北河原の庚申塔	四ツ谷627 深沢国義氏宅横	円 柱 形	文 字 塔	本文参照	嘉永7. 8. 一(1854)	道標を兼ねる
	④	西三屋の庚申塔	四ツ谷1252 若菜谷之輔氏宅横	唐破風付角柱形	背面金剛像・三猿像・悪鬼付	"	寛延2. 9. 吉(1749)	道標を兼ねる
新 田 宿	⑤	宿尻の庚申塔	新田宿208 池上三郎氏宅横	笠 付 角 柱 形	背面金剛像・三猿像付	"	文化4. 10. 吉(1807)	
	⑥	諏訪明神社の庚申塔	新田宿288 諏訪明神社内	山 状 角 柱 形	文字塔・三猿像付	"	弘化2. 3. 吉(1845)	三猿立像
	⑦	窪河原宿の庚申塔	新田宿1839-2 旧堤防上	山 状 角 柱 形	文 字 塔	"	明治11. 2. 一(1878)	道標を兼ねる
座 間	⑧	中河原の庚申塔(1)	座間1丁目1804	皿 角 柱 形	文字塔・富士山形付	"	明治24. 9. 一(1891)	
	⑨	中河原の庚申塔(2)	座間1丁目1837 沢田芳雄氏宅横	角 柱 形	背面金剛像・三猿像付	"	享保7. 8. 吉(1722)	笠の残片あり
	⑩	中河原の庚申塔(3)	座間1丁目1837 "	角 柱 形	文字塔・一猿像付	消失	不 明	
	⑪	油面の庚申塔	座間2丁目2952 森田正義氏宅横	皿 角 柱 形	文 字 塔	本文参照	不 明	道標を兼ねる
	⑫	相武台神社の庚申塔	相武台1丁目6081相武台神社内	山 状 角 柱 形	文 字 塔	"	文久3. 6. 吉(1863)	道標を兼ねる
座 間 入 谷	⑬	三峯台の庚申塔	入谷3丁目2835-1大門坂上	唐破風付角柱形	背面金剛像・三猿像付	"	明和5. 4. 吉(1768)	三猿一部消失・道標を兼ねる
	⑭	入谷庚申北の庚申塔	入谷3丁目3734 星の谷橋横	山 状 角 柱 形	文 字 塔	本文参照	不 明	道標を兼ねる
	⑮	星の谷の庚申塔	入谷3丁目3755 三峯坂下	山 状 角 柱 形	文 字 塔	"	明治8. 2. 吉(1875)	道標を兼ねる
	⑯	明王堂の庚申塔	入谷3丁目5991 米軍貯水池前	角 柱 形	文字塔・三猿像付・有縁	"	宝永6. 6. 一(1709)	
	⑰	羽根沢の庚申塔	入谷5丁目2547 奥津昭仁氏宅横	山 状 角 柱 形	文字塔・有縁	"	明和2. 11. 吉(1765)	
栗 原	⑱	大下の庚申塔	栗原1-1 田野口孫光氏宅横	皿 角 柱 形	文字塔・有縁	"	明治5. 一. 一(1872)	
	⑲	小池東原の庚申塔(1)	栗原1066 玉木富蔵氏宅付近	唐破風付角柱形	文字塔・三猿像・悪鬼付・有縁	"	享保3. 10. 吉(1718)	
	⑳	小池東原の庚申塔(2)	栗原1066 "	山 状 角 柱 形	文 字 塔	"	天保4. 9. 吉(1833)	
	㉑	小池西原の庚申塔	栗原1216 相武台プール横	唐破風付角柱形	背面金剛像・三猿像・悪鬼付	"	宝永4. 11. 吉(1707)	
	㉒	上小池の庚申塔	栗原1231-1 小池坂下	山 状 角 柱 形	文 字 塔	"	文化2. 10. 吉(1805)	
	㉓	下小池の庚申塔	栗原1735 下小池バス停横	山 状 角 柱 形	文 字 塔	"	安永6. 9. 吉(1777)	
	㉔	セーノ神坂下の庚申塔	栗原1736 大木光雄氏宅横	唐破風付角柱形	文字塔・三猿像付・有縁	"	延宝2. 10. 一(1674)	
	㉕	北向庚申神社の庚申塔(1)	栗原1800-2 北向庚申神社内	隅 九 角 柱 形	背面金剛像・三猿像付	"	明和8. 8. 吉(1771)	三猿消失・道標を兼ねる
	㉖	北向庚申神社の庚申塔(2)	栗原1800-2 "	山 状 角 柱 形	背面金剛像・三猿像付	"	慶応4. 一. 一(1868)	道標を兼ねる
	㉗	上栗原の庚申塔	栗原2060 嘉兵衛坂上	隅 九 角 柱 形	文字塔・有縁	"	明治27. 12. 吉(1894)	
	㉘	中下の庚申塔	栗原3159-1 街道の坂	唐破風付角柱形	背面金剛像・三猿像付	"	正徳3. 9. 16(1714)	
	㉙	八軒庭の庚申塔	栗原3761 八軒庭稲荷横	唐破風付角柱形	背面金剛像・三猿像・悪鬼付	"	元禄13. 10. 吉(1700)	
	㉚	中原の庚申塔	栗原4293-2 鈴木小一氏宅横	船 型 光 背 形	背面金剛像付	"	延享元年. 8. 吉(1744)	
	㉛	西原の庚申塔(1)	栗原4514 佐藤正人氏宅横	角 柱 形	背面金剛像付	"	宝永4. 5. 吉(1707)	
	㉜	西原の庚申塔(2)	栗原4978 吉村利玄氏宅横	隅 九 角 柱 形	三猿像付・有縁	消失	不 明	一猿消失
	㉝	芹沢山王神社の庚申塔(1)	東原1丁目10-68 山王神社内	角 柱 形	背面金剛像・三猿像・悪鬼付	本文参照	園禄5. 〇. 吉(1692)	
	㉞	芹沢山王神社の庚申塔(2)	東原1丁目10-68 "	唐破風付角柱形	文字塔・三猿像付・有縁	消失	不 明	一猿消失

四ツ谷地域の道祖神・庚申塔

一、道祖神

現存する四ツ谷地域の道祖神塔は西三屋の一基である。この塔は、隅丸角柱形の文字塔である。建立月日は大正二年（一九一三）一月で、比較的新しいものである。講中は少なく昭和初期には四戸であった。

行事としては、一月のサイトバライが中心である。サイトバライは、正月のお飾りや門松類を各自が毎年一月十四日の朝持ち寄り、それを焚き上げ材料として行う。仮屋は作らず持ち寄った材料を積み上げて焚き上げる。この地区では、忌中の家でもサイトバライの行事に参加することができる。

この他に、日枝神社内に道祖神塔が建っていたといわれているが見当たらない。講中は、四ツ谷の宿全域であった。

サイトバライの行事は、道祖神塔が不明になってからも日枝神社内で行われていたが、いつの間にか講中の事業として実施されなくなった。現在では、一月十四日になると同所で個人毎に、おじいさん、おばあさんが孫を連れ、家から藁を持ち寄りサイトバライを行っている。子供会育成会でサイトバライの行事をしようという意見があるが具体化されていない。

二、庚申塔

四ツ谷地域の庚申塔は、四基である。その内訳は、日枝神社内に二基、北河原に一基、西三屋に一基である。日枝神社内にある二基の庚申塔の内一基は、再建のものといわれている。旧塔は、船型光背形のもので市内では珍しい形のものである。この塔は、欠損や磨耗が著しく建立年代が不明である。塔の下部に辛じて見える三猿像により、庚申塔と判明したものである。新塔は、文政十年（一八二七）六月に建立されたもので、唐破風付角柱形で青面金剛像・三猿像付のものである。



北河原の庚申塔

北河原の庚申塔は、嘉永七年（一八五四）八月に建立されたもので、円柱形の文字塔で道標を兼ねている。この円柱形の庚申塔は、市内では珍しい形のもので、この一基だけである。

西三屋の庚申塔は、唐破風付角柱形で青面金剛像・悪鬼・三猿像付きのもので、寛延二年（一七四九）九月建立のものである。

講は、昔庚申の日になると、当番の家に講中の人々が集まり行われていたが、現在は開かれていない。

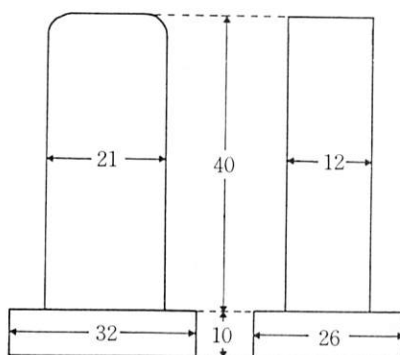
No. ① 西三屋の道祖神



この塔は、川島良太郎氏宅横(四ツ谷西三屋)の道を堤防上に上る左側にある。以前は、現地より百メートル程東方の改修前の「三谷道」の路傍にあつたが、戦後耕地整理により、現在地に移したものである。

ここから先、相模川に至る道が四ツ谷の渡船場道であつた。

この地域の特長としては、忌中の家でもサイトバライの行事に参加することが認められていた。又、団子は焼いてから取り替えてもよいことになっていた。



略図寸法(センチメートル)

所在地 四ツ谷一一九三
川島良太郎氏宅横
碑形 隅丸角柱形
形態 文字塔
年代 大正二年正月十四日
(一九一三)

左側面	正面	右側面	本体
四ツ谷 三谷 講中	道祖神	大正二年正月十四日 再建	

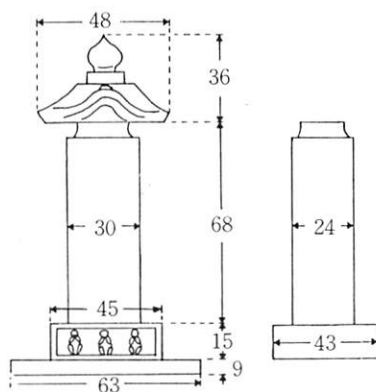
No. ① 日枝神社の庚申塔(1)



この庚申塔は、日枝神社の鳥居の左側にあり、笠は唐破風で一部破損しているが、本体の青面金剛像や文字ははっきりしている。

青面金剛像の顔は、金剛像特有の憤怒の形相でなくふつくらとした仏様のようにおだやかで、金剛像の時代の変化を表わしている。

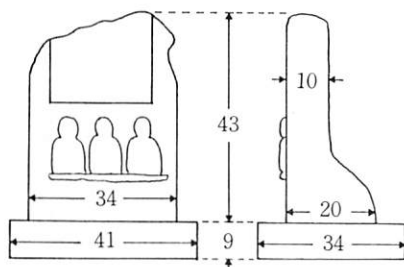
三猿像は、台座の正面に彫られている。講中八名により建立されたものである。



略図寸法(センチメートル)

所在地 四ツ谷四七九
日枝神社内
碑形 唐破風付角柱形
形態 青面金剛像・三猿像付
年代 文政十年六月吉日
(一八二七)

左側面	正面	右側面	
		文政十年亥年六月吉日	本体
講中 佐藤五左エ郎 同 七エ門 川嶋宗八 漆原善兵衛 同 佐兵衛		佐藤七良エ門 同 津右エ門 川島弥八	台座



略図寸法(センチメートル)

所在地 四ツ谷四七九
日枝神社内
碑形 船型光背形
形態 文字塔・三猿像付・有縁
年代 (不明)

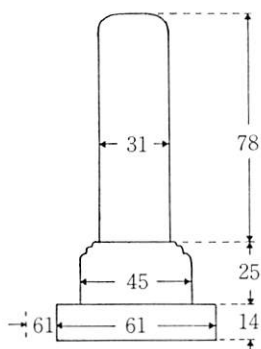
この庚申塔は、上部が欠損し銘文等も磨耗し、建立年代は定かではないが、材質が良い割には磨耗状態がはげしいのと、三猿の顔が素朴なのかから判断して、江戸中期ごろ(市内の塔としては古い方)に造られたのではないかと推定される。碑形は船型光背形で、市内の庚申塔としては珍しいものである。同境内にある文政十年建立の庚申塔(No. ①参照)は、本塔の再建であると伝えられている。

No. 3 北河原の庚申塔



旧八王子街道沿にある道標を兼ねた庚申塔である。形は円柱形で庚申塔の字が飾り文字で書かれている。この形態や飾り文字は、市内唯一のものであり、近隣の各地にある庚申塔系石造物の中でも珍しいものである。

また、江戸末期になると各地で庚申信仰そのものが、著しく衰退していく中で、この塔を建立するための協力者の氏名が、十数名に及んでいるのも、この地域の庚申講の協力体制の強さを示す貴重な資料となっている。



略図寸法（センチメートル）

所在地 四ツ谷六二七

深沢国義氏宅横

碑形 円柱形

形態 文字塔・道標を兼ねる

年代 嘉永七年八月

（一八五四）

裏面	左側面	正面	右側面	本体
嘉永七甲寅歳八月	右八王子 ほしのや みち	庚申塔	左厚木 ひら塚 道	

（台座中の銘
については
不明瞭な点
が多いので
記載せず）

台座

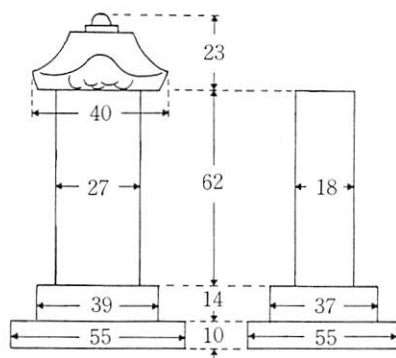
No. ④ 西三屋の庚申塔



四ツ谷西三屋、若菜氏宅の入口右側にあり、かつては、この前を道路が東西に通じていたが、東側への道は耕地整理のためなくなっている。この庚申塔は二分風化しているが、青面金剛像・三猿像・悪鬼付の具像塔で、上部に日輪と三日月が彫られている。

建立者名はないが、台座に四ツ谷村三谷と刻まれている。

現在は、若菜氏が時々掃除、供養などしている。



所在地 四ツ谷一二五二
若菜倉之輔氏宅横

碑形 唐破風付角柱形

形態 青面金剛像・三猿像・悪鬼付

年代 寛延二年九月吉日
(一七四九)

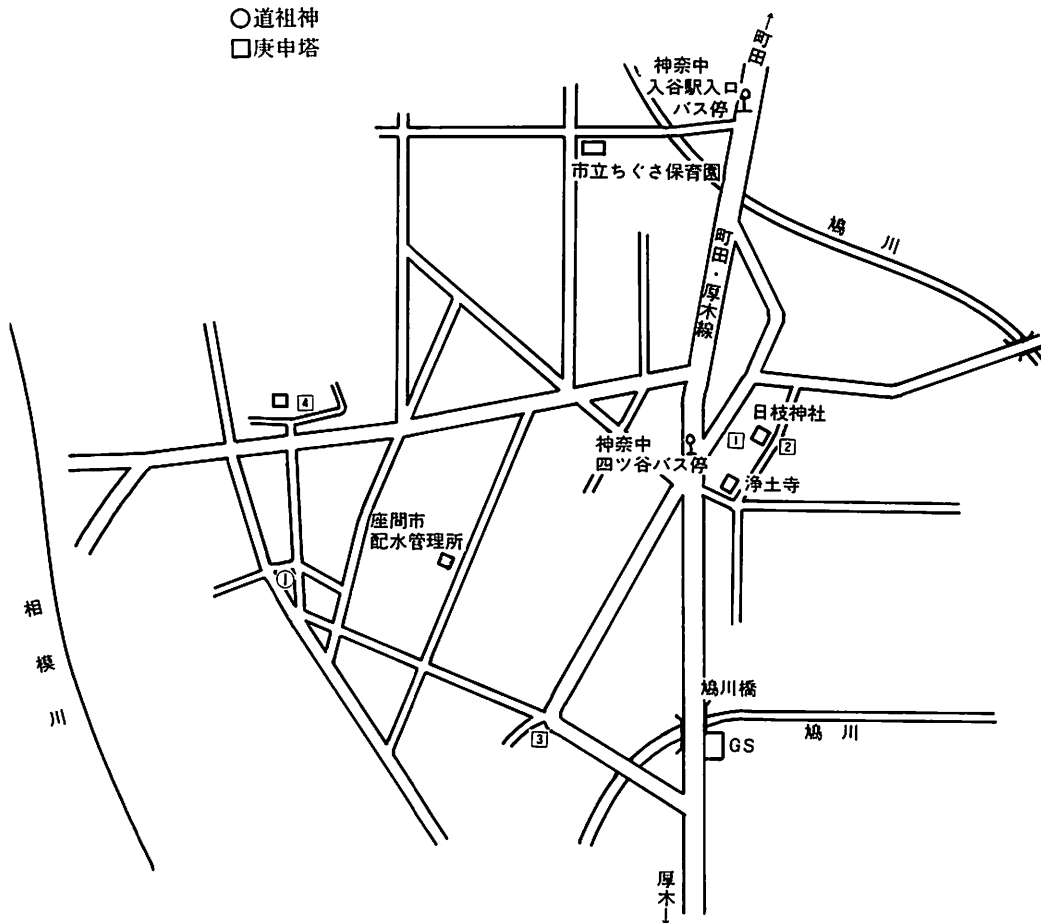
略図寸法(センチメートル)

左側面	正面	右側面	本体
寛延二己巳年九月吉日		庚申供養	
		三谷 四ツ谷村	台座

四ツ谷地域

番号	名 称
①	西三屋の道祖神
①	日枝神社の庚申塔(1)
②	日枝神社の庚申塔(2)
③	北河原の庚申塔
④	西三屋の庚申塔

○道祖神
□庚申塔



新田宿地域の道祖神・庚申塔

一、道祖神

新田宿は、南北に長い地域であるため、上・中・下の三地区に分かれており、それぞれ講中を設けていた。

新田宿の道祖神塔は五基である。いずれも角柱形文字塔であり、上組に二基、中組に二基、下組に一基ある。

上組の二基は、一基が再建のものである。旧塔は、上部が損失し建立年号が失われているが、刻まれている文字「十巳年」と石の状態から享保年間と思われる、市内で二番目に古いものと思われる。新塔は、大正三年（一九一四）一月建立のもので比較的新しいものである。中組の二基も、一基が再建である。旧塔は、天保十一年（一八四〇）一月建立のもので、道祖神としては比較的小型である。新塔は、大正九年（一九二〇）一月建立のものである。



下組の道祖神

下組の道祖神塔は、天保十二年（一八四一）一月に建立されたものであるが、磨耗が甚しかったので大正五年に表面を削り、文字も彫り直し改修したものである。この塔は、側面に「天

下泰平 国土安全」と刻まれており、市内では珍しいものである。

新田宿のサイトバライの行事は、三組とも一月十四日の早朝で、飯屋は子供が作る。中組では、十四日の夕方この行事を行っていたが、夕方は風が出て火災の恐れがあるので、十四日の早朝に変えたという。上組では、子供が「通せん棒」を行い、資金を集めたという。又、一ツ目小僧の伝説もある。

上組では、防災の神、子供の守り神としてもかつては信仰されていた。

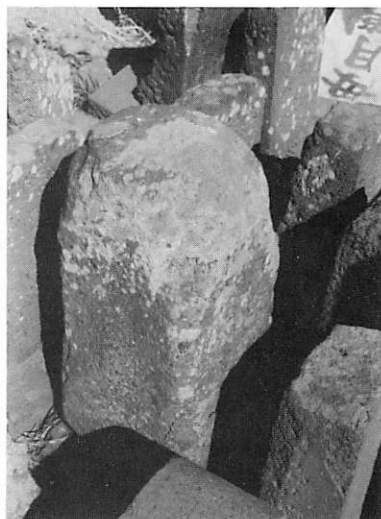
二、庚申塔

新田宿の庚申塔は三基である。宿尻、諏訪明神社内、窪河原にある。宿尻の庚申塔は、笠付角柱形で、青面金剛像・三猿像付のもので、文化四年（一八〇七）十月建立のものである。この塔は、お堂内にあり、側面に「天下泰平 国土安全」と刻まれている。

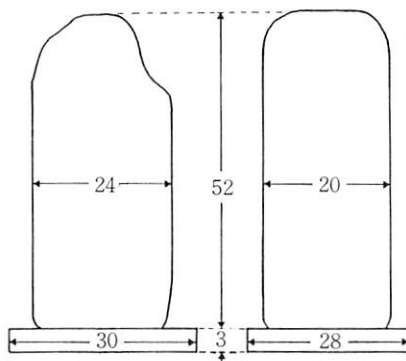
諏訪明神社内の庚申塔は、弘化二年（一八〇七）三月に建立されたものであり、山状角柱形の文字塔であるが、上面に日月像がある。又、台座には三猿の立像が刻まれており、市内では珍しいものである。窪河原の庚申塔は、明治十一年（一八七八）二月建立のもので、山状角柱形の文字塔で道標を兼ねている。

講は、現在上組では行っていないが、下組では行っている。宿尻では現在も「庚申様」のお札を配布し、講を行っている。

No. ② 上組の道祖神 (1)



この塔は、右側面上部が三分の一損失しているため、建立年号が失われ「十巳年」としか判読出来ない。そこで十巳年に当てはまる年号を調べてみると、慶長と享保の年号に該当する。市内の道祖神塔の建立年代の経過から判断して、享保年間と思われる。したがって、市内で二番目に古い道祖神塔と推定した。



略図寸法 (センチメートル)

所在地 新田宿一
諏訪明神社横
碑形 角柱形
形態 文字塔
年代 寛文十年一月吉日
(一七二五)

正面	右側面	本体
道祖神	□□十巳正月吉日	

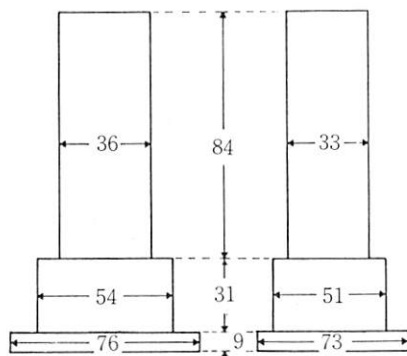
No. ③ 上組の道祖神(2)



この道祖神塔は、後方の石造群の中にある道祖神塔（No. ②）を再建したものと思われる。

この道祖神塔には、ヨウカゾウ（コト八日）の風習が、一ツ目小僧（疫病神）と関連して残されている。

十二月八日、一ツ目小僧が村の家々の所業を調べその記録を道祖神に預けて、翌年二月八日に持ち去る。悪行した家は神に知れ、罰が当るので、村人は、一月十四日に道祖神の仮屋を焼き記録を灰にしてしまうのだという。

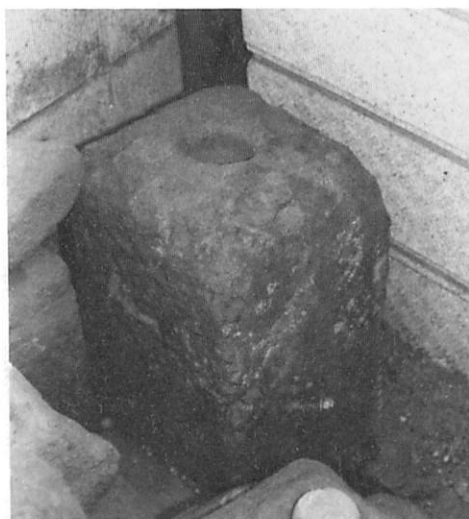


略図寸法（センチメートル）

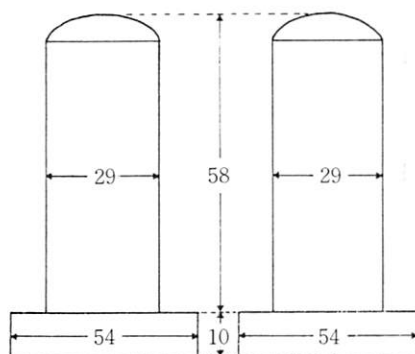
所在地 新田宿一
諏訪明神社横
碑形 角柱形
形態 文字塔
年代 大正三年一月吉日
(一九一四)

左側面	正面	右側面	
新田宿上組	道祖神	大正三年一月吉日	本体
	子氏		台座

No. ④ 中組の道祖神(1)



この塔は、道祖神塔としては比較的小型のものである。磨耗や剥落のため小型になったものでなく、山状の痕跡から判断してもこの形の塔であると思われる。かなり磨耗しているが、建立年月日は天保十一年と判読できた。



略図寸法（センチメートル）

所在地 新田宿七一
池上信幸氏宅横
碑形 山状角柱形
形態 文字塔
年代 天保十一年一月吉日
(一八四〇)

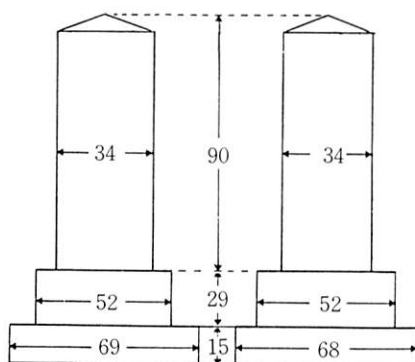
左側面	正面	右側面	本体
新田中宿 氏子中	道祖神	天保十一年 庚子正月吉日	

No. ⑤ 中組の道祖神(2)



新田宿中組の道祖神塔で、この塔には明瞭に再建の文字が記されている。旧塔はNo.④の塔である。

昭和五十年の聞きとり調査によると、サイトバライの焚き上げ時刻は、昔は十四日の夕方だったが、風がでて火災の恐れがあるので風が少ない早朝にするようになったという。

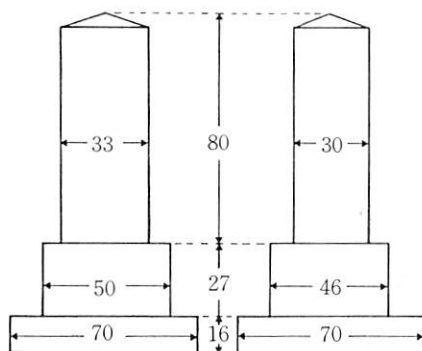


略図寸法(センチメートル)

所在地 新田宿七一
池上信幸氏宅横
碑形 山状角柱形
形態 文字塔
年代 大正九年一月 再建
(一九二〇)

左側面	正面	右側面	
座間村新田宿中講中	道祖神	大正九年一月再建	本体
	中講		台座

左側面	正面	右側面	本体 台座
天保十二辛丑歳 正月吉日 大正五年 一月改修	道祖神	天下泰平 国土安全	
	中講下	村宿田新	



略図寸法（センチメートル）

所在地 新田宿二四〇
松木頼三氏宅横
碑形 山状角柱形
形態 文字塔
年代 天保十二年一月吉日
(一八四一)

この道祖神塔は、現存する塔より一まわり大きく立派なものであった。しかし、長年風雨にさらされたため、磨耗が甚しくなったので、改修しようという話が出た。大正五年、専念寺の住職の発案により旧塔を削り直し、文字も彫り直し改修したものである。塔の文字は、この改修を発案した住職の筆になるものである。他の地区では、古くなったら再建する形をとっているが、この塔は改修という珍しい経過を経たものである。

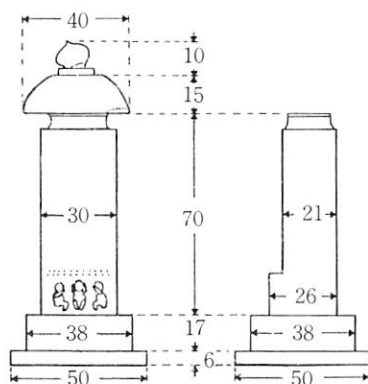
本塔右側面に「天下泰平 国土安全」と刻まれているのは、市内の道祖神塔では唯一のものである。

また、この地域の講中の者は、忌中でも遠慮なく行事に参加出来るようになきたりになっていた。

No. 5 宿尻の庚申塔



左側面	右側面	本体
文化四丁卯十月吉日	天下泰平国土安全	



略図寸法（センチメートル）

所在地 新田宿二〇八

池上三郎氏宅横

碑形 笠付角柱形

形態 青面金剛像・三猿像付

年代 文化四年十月吉日

（一八〇七）

現在は、新田宿通り南の左折分岐点にあるが、以前はここより西数十メートル先の新田宿分教場の隅にあったものを、昭和十年頃道路改修のため道路傍に移し、その後お堂を作り厚く信仰していたが、通行の邪魔になるので、昭和四十七年四月に現在地に新たにお堂を作りその中に移し変えた。庚申塔にお堂があるのは、市内では北向庚申神社とこの宿尻庚申だけである。

この塔は、青面金剛像、三猿像付の具像塔で、右側面に刻まれている「天下泰平国土安全」は庚申塔では市内唯一のものである。現在でも、青面金剛の木版の画像を刷って講中へ配布し年一回の講を続けている。

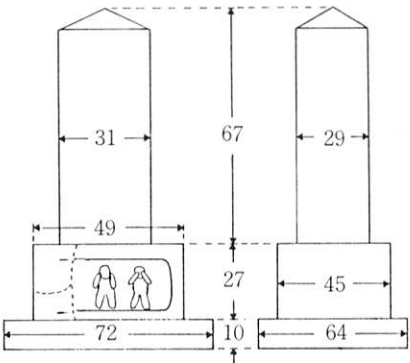
No. 6 諏訪明神社の庚申塔



諏訪明神社の鳥居右側にあり、大分風化している。正面上部左右に日月像が刻まれて、その下に庚申塔と刻まれている。三猿像は立像で市内唯一のものであり、また三猿像が台座に彫られているのも珍しい。

新田宿講中と記されているが、実際は新田宿上屋の十戸ぐらゐによる講中で、昭和十年頃まで講が開かれたという。

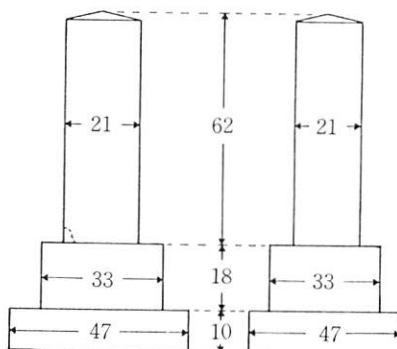
この近辺には、いろいろな石造物が集まっている。



所在地 新田宿二八八
諏訪明神社内
碑形 山状角柱形
形態 文字塔・三猿像付
年代 弘化二年三月吉日
(一八四五)
略図寸法(センチメートル)

正面	庚申塔	本 体
左側面	弘化二乙巳年三月吉日	
新田宿村 講中		台 座

裏面	左側面	正面	右側面	本体
明治十一年寅二月日	中多 左いい山道	庚申塔	右ほしのや 神奈かこ道	
	香川傳左エ門 佐野紋左エ門 同平左エ門 宮代佐吉	中講	新田宿村 宮代茂左エ門 波多野新左エ門 香川新左エ門 斎藤久左エ門 同甚右エ門	台座



略図寸法（センチメートル）

所在地 新田宿一八三九—二

旧堤防上

碑形 山状角柱形

形態 文字塔・道標を兼ねる

年代 明治十一年二月

（一八七八）

この庚申塔は、新田宿の旧堤防上の路肩にあり、道標を兼ねた文字塔である。以前は今の反対側に建っていたが、旧堤防の整備に伴い、昭和六十年六月に現在地に移したものである。

道標に「中多 左いい山道」とあり、以前は前の道が渡船場道で、対岸に行く重要な道であった。

この塔は庚申講がすたれたため、長い間草藪の中に埋もれていたものだが、昭和四十五年頃、草藪を整理した際に、建立者九名の名前が判明した。

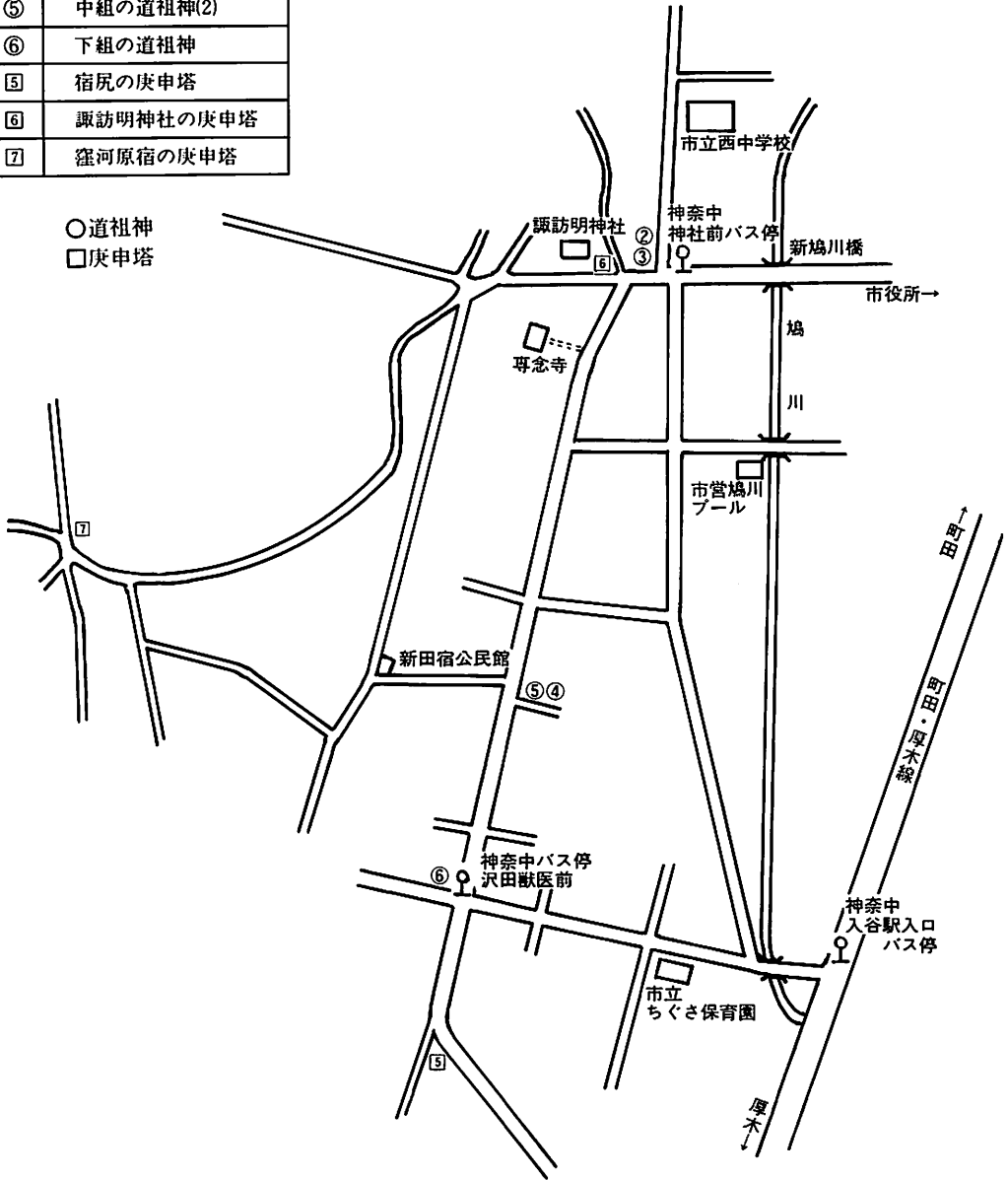
以前はこの塔の傍らに、珍しい四季桜の老木があり、これを手折って持ち帰った人の家では、必ず何等から異常（不幸）があったという伝説が残されている。この老樹は、昭和四十七、八年頃枯死したので伐採し、跡に若木を植えたが、これも数年で枯れてしまった。

現在でも建立者の子孫が講を再興し継続している。

新田宿地域

番号	名 称
②	上組の道祖神(1)
③	上組の道祖神(2)
④	中組の道祖神(1)
⑤	中組の道祖神(2)
⑥	下組の道祖神
⑤	宿尻の庚申塔
⑥	諏訪明神社の庚申塔
⑦	窪河原宿の庚申塔

○道祖神
□庚申塔



座間地域の道祖神・庚申塔

一、道祖神

座間地域の道祖神塔は七基あり、角柱形文字塔が二基、自然石文字塔が二基、双立拱手像の具像塔が二基、石祠形が一基ある。

中河原の道祖神塔は、明和九年（一七七二）一月建立のもので、船型光背形の双立拱手像付の塔である。市内の道祖神塔では四番目に古いものである。

下宿北の道祖神塔は、弘化五年（一八四八）建立のものであるが、自然石の文字塔のため、磨耗損傷がほとんどない。

上宿の道祖神塔は、文政八年（一八二五）一月建立のもので、隅丸角柱形の文字塔である。台座が不明となっている。

もう一基の道祖神塔は、石祠形のもので、昭和五十年十一月に再建されたものである。この石祠形の道祖神塔は市内では唯一のものである。

中宿の道祖神塔は、嘉永五年（一八五二）一月建立のもので、山状角柱形の文字塔である。

河原宿上河原の道祖神塔は、自然石の文字塔であるが、建立年代や講中名が刻まれておらず不明である。

河原宿・下河原の道祖神塔は、船型光背形の双立拱手像付の具像塔であるが、下半分が欠損紛失し建立年代は不明である。

座間地域は道祖神塔が他地域に比して少ない。これは昔この地域がひと続きの集落をなしていたためと思われる。

サイトバライの行事は、全地域とも子供が仮屋を作り、中河原、上宿、中宿は一月十四日の夕方行い、他は一月十四日の早朝に行う。子供の「通せん棒」は、中宿、下宿、河原宿で行っていた。

二、庚申塔

座間地域の庚申塔は五基あるが、その内訳は中河原に三基、下宿に一基、相武台（座間地域）に一基である。

中河原の庚申塔の一つは、明治二十四年（一八九一）九月建立の四角柱形の文字塔である。文字の上部に富士山形の像、側面に歌が刻まれており市内唯一のものである。二つ目は、享保七年（一七七二）八月建立のもので、笠付角柱形の背面金剛像・三猿像付の庚申塔である。三つ目は、角柱形の文字塔であるが、剥落のため建立年代は不明である。

下宿の庚申塔は、皿角柱形の文字塔で道標も兼ねている。剥落により建立年代は不明である。

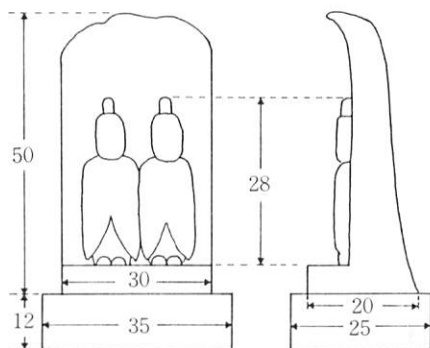
相武台の庚申塔は、文久三年（一八六三）九月建立のもので、山状角柱形の文字塔で道標も兼ねている。

中宿には庚申塔が建立されていないが、かつては「おかのエ講」といい講を開いていた。

No. ⑦ 中河原の道祖神



本塔は、双立拱手像付の具像塔で、二百年以上前に建立されているが、台座、光背共に概ね完全な形で現存している。
以前は、座間一丁目二一〇七地先に安置されていたが、昭和五十三年の道路拡幅のためこの地に移転された。



略図寸法（センチメートル）

所在地 座間一―一八〇四
沢田正氏宅横
碑形 船型光背形
形態 双立拱手像付
年代 明和九年一月吉日
(一七七二)

正面

道祖神
明和九千辰正月吉日

本体

No. ⑧ 下宿北の道祖神

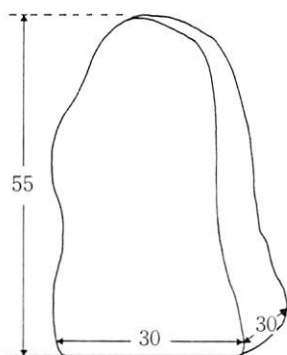


自然石に達筆で「道祖神」、裏面に弘化五戊申年、氏子中とはっきり刻まれている。

弘化五年は一月までなので、一月建立と思われる。

自然石を使用したため、百三十年を経過している今日でも磨耗損傷等はまったく見当らない。建立位置が私有地と道路の境にあつて、保存上は適当な場所とは言えない。

暫く中断していたサイトバライの行事は、自治会が主体となつて十年程前に復活し、以後、毎年盛大に行われている。



略図寸法（センチメートル）

所在地 座間一―三〇二八―一

小俣勝平氏宅横

碑形 自然石

形態 文字塔

年代 弘化五年

（一八四八）

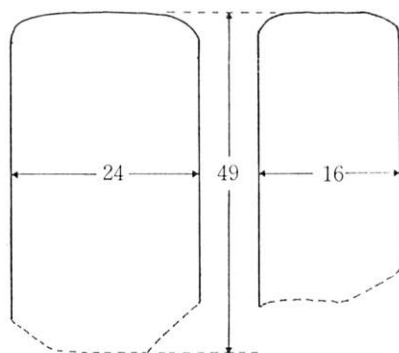
正面	右側面	本 体
道 祖 神	弘化五戊申年 氏子中	

No. ⑨ 上宿の道祖神



現在宗仲寺の塀に埋め込まれた形で安置されているので、台座及び塔下部が不明となっている。昭和五十年十一月撮影の写真では、現在地よりやや奥まった寺の塀の角に安置されており、石塀の改修と共に前面に出されたようだ。

昔は、二百メートル東の路傍に仮屋を作ったが、現在は、西方四百メートルくらいの川岸の空地でお飾りや門松を集めて仮屋を作り、サイトバライの行事を行っている。



略図寸法（センチメートル）

所在地 座間一―三三〇〇

宗仲寺塀外

碑形 隅丸角柱形

形態 文字塔

年代 文政八年一月一八日

(一八二五)

正面	左側面
道祖神	文政八 正月十八日 座間村

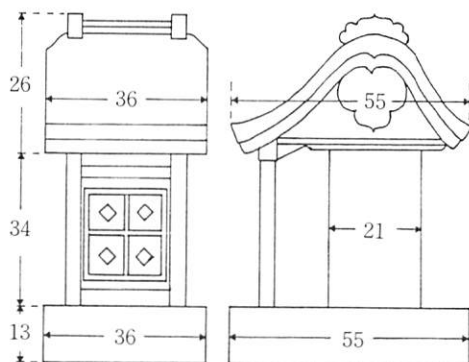
本体

No. ⑩ 座間神社の道祖神



本体

左側面	正面	右側面
世 加藤彌七 話 稲垣傳兵衛 人 小股平四郎 澤田安右エ門 片野要助 野島左右エ門	昭和三十年 十月吉日再建 瀬戸俊孝	安政六己未歳 九月吉辰 頭取 山本久兵衛 瀬戸喜三郎



略図寸法（センチメートル）

所在地 座間一―三四三七

座間神社内

碑形 石祠形

形態

年代 昭和三十年十月吉日

（一九五五）

この塔は安政六年（一八五九）に建立され、明治四十二年（一九〇九）に他の五社と共に移転合祀された道祖神塔の再建である。旧塔の移転前の位置については、これを証する記録類が無いため不明であるが、「谷戸山付近の旧府中街道沿いにあったものだ」と伝え聞いている」と座間神社の神官が証言されている。

旧塔（安政六年建立）は年代的には比較的新しいのに石質が脆弱だったためか、崩壊寸前の状態となり、昭和五十年十一月に旧塔の建立者の子孫である瀬戸俊孝氏が再建したものである。

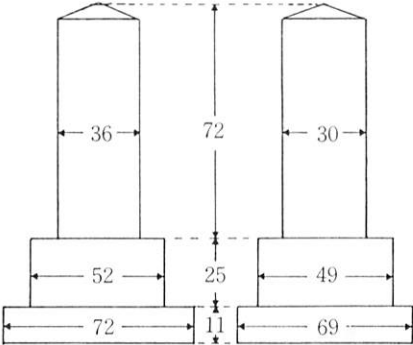
再建に際しては、旧塔の形と同じものを造ることを条件に、新戸の石材店が、両側面に刻まれた銘文を漸く判読し、元通りに刻んで建てたものである。従って、旧塔も「石祠形」と想像されるが、こうした碑形の道祖神塔は非常に珍しく、市内で唯一のものである。

No. ⑪ 中宿の道祖神



本道祖神塔は、中宿講中によって町内の中央部で八王子街道に面したスーバーの西北隅に建てられていたものである。

昭和十二年の陸軍士官学校移転に伴い、谷戸川を暗渠に改修し主要下水溝とした。また、道路も拡幅整備されたので、道祖神塔用地が無くなったため、現在地に移されたものである。



略図寸法（センチメートル）

所在地 座間一―四一二

平和坂横

碑形 山状角柱形

形態 文字塔

年代 嘉永五年一月吉日

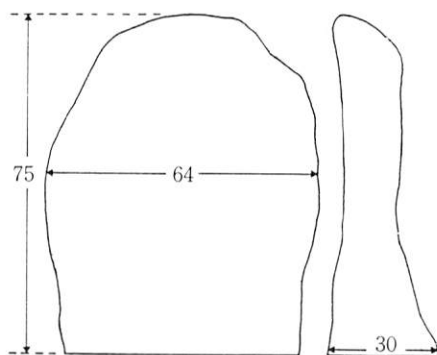
(一八五二)

左側面	正面	右側面	本体
中宿 氏子 中	道祖神	嘉永五壬子年 正月吉日	

No. ⑫ 河原宿・上河原の道祖神



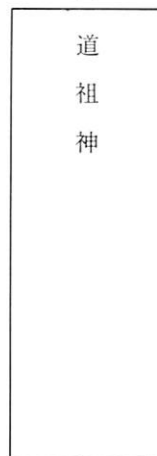
この道祖神塔も下宿のものと同様に自然石を利用したものであるが、表面に道祖神とこれも達筆で書かれているだけで、建立年月日や講中名等は刻まれた形跡はどこにも見当たらないので一切不明である。



略図寸法（センチメートル）

所在地 座間二二八〇三
河原宿公民館入口
碑形 自然石
形態 文字塔
年代（不明）

正面
道祖神



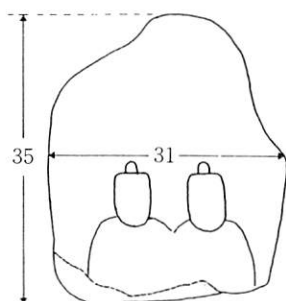
本
体

No. ⑬ 河原宿・下河原の道祖神



市内でも数の少ない双立拱手像付の具像塔であるが、惜しいことに下半身の部分は欠損している。建立年代は不明であるが、施主鈴木（以下欠損）の文字がかすかに判読出来る。

この塔は地蔵堂の中に安置されている。



略図寸法（センチメートル）

所在地 座間二二八三三

鈴木茂氏宅横

碑形 船型光背形

形態 双立拱手像付

年代（不明）

正面



本体

No. ⑧ 中河原の庚申塔(1)



この庚申塔は、碑文にある「信徒」の文字に象徴されるように、座間地域を中心とした丸山教信者により建立された富士講の記念碑である。

富士信仰は古くからあるが、江戸後期から特に盛んになり、全国各地に講が設けられた。その信仰は、日本一高い山、富士山を西方浄土にたとえ、神秘的な場所として崇拜したのである。

当時の人々の経済力では、講中全員が登れないので、代表を決めて登山させている。

塔の上部にある㊦の浮彫りと裏面に刻んである富士讃歌は、講中の人々の富士山に寄せる心

所在地 座間一―一八〇四

沢田正氏宅横

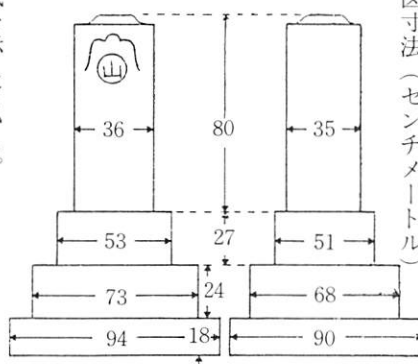
碑形 皿角柱形

形態 文字塔・富士山形付

年代 明治二十四年九月

(一八九一)

略図寸法(センチメートル)



意気を示している。

本市における庚申塔の中でも、ユニークな塔である。昭和五十五年一月に道路整備のため現在地に移転したものである。

月

裏面

左側面

正面

右側面

月 松 日 源 枝 ふし山に登りて見れば峯のなり いそかぬ旅の道のはやくて 源元に松日とあるを知らずして 枝□をまつ□申のおやなり	座間村 人 話 世 高橋喜右エ門 全周藏 小侯権平 高橋力藏 谷田竹松 吉川常吉 加藤市郎兵エ門 江成七郎左エ門 渡辺清吉	㊦ 庚申塔	明治廿四年九月日
	加藤弥助 鈴木紋左エ門 三橋熊藏 谷田三左エ門 森谷角藏 江成玉吉 全紋三郎 全□太郎 沢田□三郎 全保五郎	信徒	同村 沢田喜之助 全七三郎 全□松 全清兵エ 高橋熊次郎 全八十吉 沢田市五郎 全□右エ門 全□郎 全□次郎 全□郎

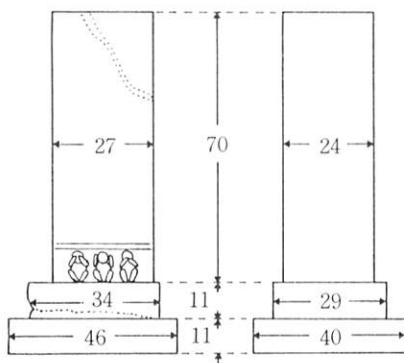
本体
台座

No. 9 中河原の庚申塔(2)



この庚申塔は、青面金剛像・三猿像付きの塔であるが、悪鬼が彫られていないのは珍しい図柄である。また、右側面に「観音」の意味を表わす種子が刻まれており、仏教系の庚申塔として本市唯一のものである。また、庚申信仰の歴史を知る上で重要な資料でもある。

本体上部に向かって真ん中から右側にかけてき裂が生じ、危険でもあるので、宝珠付きの笠ははずしてある。碑文の中に「渋谷庄」と記載されているのは江戸時代としては珍しい。



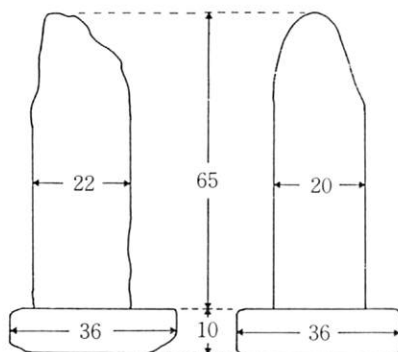
略図寸法(センチメートル)

所在地 座間一―一八三七―一
沢田芳雄氏宅横
碑形 笠付角柱形
形態 青面金剛像・三猿像付
年代 享保七年八月吉日
(一七二二)

左側面

右側面

本体	
奉供 猿庚申二世安楽	相双高座郡渋谷庄座間中河原村
高橋安左エ門	高橋安左エ門
沢田市右	沢田市右
同 左	同 左
同 六左エ	同 六左エ
同 市平	同 市平
同 半左	同 半左
享保七壬寅天八月吉日施主	享保七壬寅天八月吉日施主



略図寸法(センチメートル)

所在地 座間一―一八三七

沢田芳雄氏宅横

碑形 角柱形

形態 文字塔・一猿像付

年代 (不明)

この塔は、凝灰岩の七沢石のため全面剥落し、どんな石造物かわからなかったが、正面にかすかに一猿が見えたため、庚申塔と判明した。詳細に調査してみると、笠付有縁の形態で、文字塔であったと推定される。おそらく、両側面にそれぞれ一猿像があったと思われるが、残念ながら剥落して面影が残っていない。

もとは、座間一丁目二〇六二地先、農道傍にあったものを、昭和五十三年三月に現在地に移転されたものである。

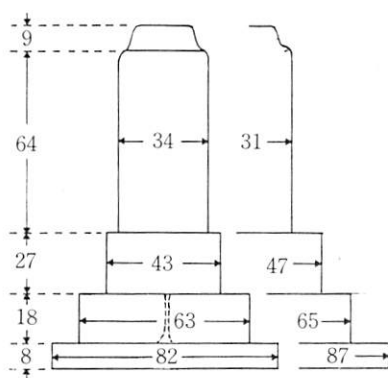
No. 11 油面の庚申塔



この庚申塔は、文字塔で道標を兼ねたものであり、旧八王子街道から藤沢街道への基点となる下宿の辻にある。

凝灰岩の七沢石のため、剥落が多く建立年月日ははっきりしないが、建立者は下宿の有力者の四名であり、この四名の生存年代から推定すると、江戸末期のものと思われる。

文字の「塙」は古字で「塔」のことである。



略図寸法（センチメートル）

所在地 座間二―二九五二
森田正義氏宅横
碑形 皿角柱形
形態 文字塔・道標を兼ねる
年代（不明）

左側面	正面	右側面	
小俣平四郎 鈴木清藏 黒沼与五兵衛 野嶋庄右衛門	庚申塔	下宿	本体
此方 八王子 ふちう この方 ふちさわ かまくら			台座

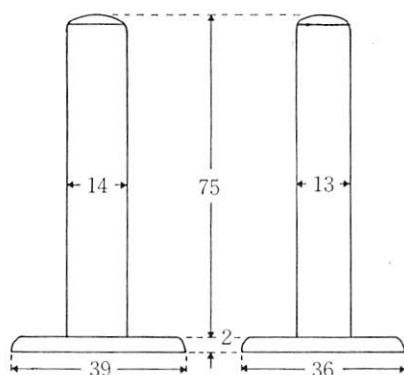
No. 12 相武台神社の庚申塔



この庚申塔は、相武台前駅広場の西南隅、府中街道から分岐する江戸街道の辻にあったものを、昭和十年頃駅前広場整備のため現在地に移転したものである。

本体は、道標を兼ねた縦細長のめずらしい文字塔であり「塔」の文字の上部が折損し補修してある。

この塔は、庚申講を中心とした石造物でなく、道案内の守護神として建立され、道標を主体として考えられたもので、庚申信仰の推移を示す資料でもある。



略図寸法（センチメートル）

所在地 相武台一六〇八一

相武台神社内

碑形 山状角柱形

形態 文字塔

年代 文久三年九月吉日

（一八六三）

右側面	正面	左側面	裏面
右 加奈川 江戸道	庚申塔 厚木 大山	左 木曾 ふちう道	文久参歳癸亥六月 座間願主稲□□兵衛

本体



座間入谷地域の道祖神・庚申塔

一、道祖神

座間入谷の道祖神塔は全部で九基あり、栗原地域について道祖神塔の数が多し。碑形の内訳は、角柱形が六基と多く、その他自然石一基、円柱形一基、船型光背形一基、前面加工隅丸形一基と多様である。番神堂横にある長宿東の道祖神塔は山状角柱形の文字塔で、嘉永五年（一八五二）十二月の建立である。一ツ目小僧の話が伝わっている。

長宿西の道祖神塔も皿角柱形の文字塔で明治四十五年（一九一二）一月の再建である。旧塔は紛失しているが新塔は市内の道祖神塔としては珍しく道標を兼ね、型もかなり大きい。この地域でも一ツ目小僧の話が伝承されている。



鈴鹿の道祖神

鈴鹿神社境内の文政十年（一八二七）十二月建立の塔は自然石の文字塔で珍しい。この地域では、サイトバライの時、風向により繭の値を占う言い伝えがあった。

北谷戸の道祖神塔は山状角柱形の文字塔で嘉永五年（一八五二）十月の建立で、サイトバライの時、子供達が焚き上げの材料を集める風習があった。



中谷戸の道祖神

中谷戸の道祖神塔は船型光背形の双立拱手像の具像塔である。明治年間迄、サイトバライの時、子供達の通せん棒の風習が残っていた。また、大正年間迄大人は宿（接待をする家）にあがり神酒をい

ただく風習があった。寛政十一年（一七九九）十一月の建立である。星の谷の道祖神塔は船型光背形の双立拱手像付の具像塔で、明和八年（一七七二）一月の建立である。田植の時、残った苗を供える風習があった。

皆原の道祖神塔は二基ある。一基は天保二年（一八三一）一月建立の角柱形の文字塔であり、皆原北地区の道祖神塔であった。この地域でもサイトバライの時、通せん棒の風習があった。他の一基は同年建立で、道祖神塔の碑形としては珍しい円柱形であり、皆原南地区の道祖神塔であった。市内の石造物ではこの碑形は二例しか見

られない。道路拡幅のため、二基とも現在地に移転した。

羽根沢の道祖神は文化七年（一八一〇）の建立の山状角柱形の文字塔である。

この他、座間入谷地域に残る特殊な行事として、ヨウカゾウの時、小豆粥を供える風習があったが、座間入谷のどの地域かはつきりしない。以上が座間入谷地域の道祖神塔の碑形・形態・行事に関する概略である。

二、庚申塔

入谷には五基の庚申塔がある。碑形は全て角柱形である。この内、文字塔が四基、青面金剛像付具像塔が一基である。次に、各地域に残る庚申塔の碑形、形態について概略を述べると次のようになる。

明王堂の庚申塔は宝永六年（一七〇九）六月の建立で、市内の庚申塔の中では五番目に古い塔である。角柱形の文字塔であるが、三猿の具像が付いており、文字塔としては珍しい形態をなしている。

星の谷橋横にある庚申北の庚申塔は山状角柱形の文字塔で年代は不明であるが、道標を兼ねている。

大門坂上にある三峯台の庚申塔は、通称「榎庚申」と呼ばれ、道標を兼ねたかなり大型の庚申塔である。塔は唐破風付角柱形で青面金剛像と三猿像が付いているが、一部消失している。明和五年（一七六八）一月の建立である。

星の谷の庚申塔は三峯坂下にあり道標を兼ねている。塔は山状角柱形の文字塔であり、時代は新しく、明治八年（一八七五）二月の建立である。

羽根沢の庚申塔は山状角柱形の有縁文字塔で明和二年（一七六五）十一月の建立である。



入谷庚申北の庚申塔（中央の道は栗原・大塚方面への旧道）

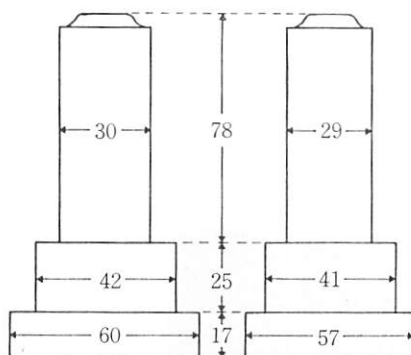
No. ⑭ 長宿西の道祖神



この塔は市内唯一の道標を兼ねた道祖神塔で、旧藤沢街道の三叉路に建っている。

この塔と併立して旧塔が建っていたが、いつの間にか行方不明になってしまった。この旧塔は若者たちの力石がわりに利用されていたという。

No. ③と同様に道祖神にまつわる一ツ目小僧の言い伝えが残されている。



略図寸法（センチメートル）

所在地 入谷一―三二〇五―二
飯島勇氏宅横
碑形 皿角柱形
形態 文字塔
年代 明治四十五年一月再建
(一九一二)

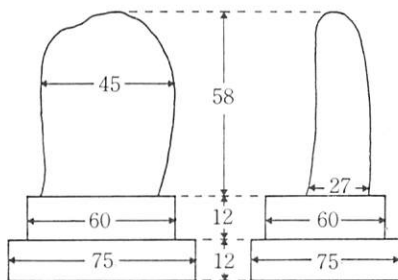
左側面	正面	右側面	
藤澤 八王子 往還	道祖神	原町田道 明治四十五年一月再建	本体
	中講		台座

No. ⑮ 鈴鹿の道祖神



自然石を用いた道祖神塔で、鈴鹿明神社の鳥居の左側にある。道祖神塔に自然石を用いたものは市内では数が少なく、この塔を含め三基ある。以前は市役所の東南隅の藤沢往還と天王道の分岐点に建立されていたが、昭和五十一年の庁舎建て替えの時、現在地に移された。

昔はサイトバライの時、繭値の吉兆を占う風習があった。南風が吹けばその年の繭の値が上がり、北風が吹けば繭値は下落すると言われた（桑の成育の関係か）。



略図寸法（センチメートル）

所在地 入谷一―三四九九
鈴鹿明神社内
碑形 自然石
形態 文字塔
年代 文政十年十二月吉日
(一八二七)

正面

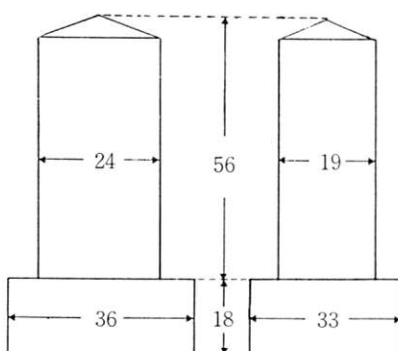


本体

No. ①6 長宿東の道祖神



番神堂の前から北東に向かって上る番神坂（現在廃道）の上り口右側の路傍にある文字塔で、建立者世話人と思われる三名の名前と氏子中の文字を判読することが出来る。
尚、塔の裏側に「セイノカミ」と思える四段積み
の石造物が現存している。



略図寸法（センチメートル）

所在地 入谷一―三九四〇
番神堂横
碑形 山状角柱形
形態 文字塔
年代 嘉永五年十二月吉
(一八五二)

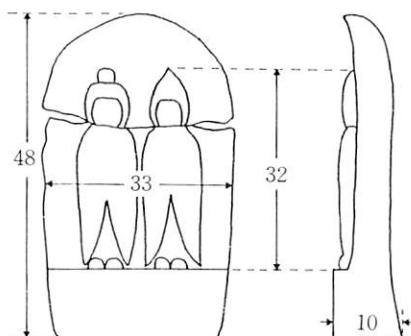
左側面	正面	右側面	
	道祖神	嘉永五年十二月吉	本体
人 辰五郎 □ 平左エ門 □ 和三郎	中子氏		台座

No. ⑰ 中谷戸の道祖神



府中街道の本堂坂の登り口にあり、市内では数少ない双立拱手像付の具像塔の一つである。

サイトバライの風習として、初午まで太神様のお飾りを残し、稲荷講の時、鈴木氏の稲荷祠の前で燃やした。また、大正末ごろまでは、近くの家二軒を毎年交互に宿として、簡単な肴で神酒を頂いていた。像には、「寛政十一年庚申三(年)」と刻まれてあるが、寛政十一年は己未であり、庚申は翌年となり、年と干支が一致していない。また、道祖神塔周辺には多重塔形式の石物が数基残されている。



所在地 入谷三―三六〇〇

加藤喜作氏宅横

碑形 船型光背形

形態 双立拱手像付

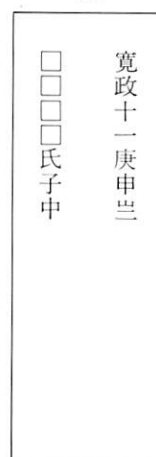
年代 寛政十一年庚申

(二七九九又は一八〇〇)

略図寸法(センチメートル)

正面

本体

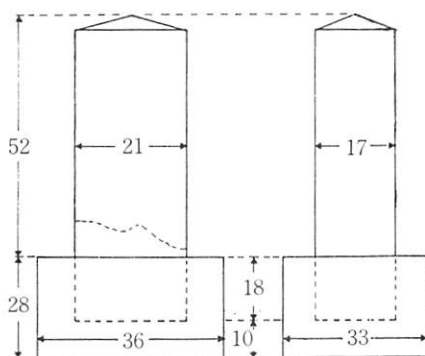


No. ⑮ 北谷戸の道祖神



この道祖神塔には、台座の両側面に、座間谷戸六名、新戸谷戸八名が記されているので、この人達が講を作り建てたものと思われる。

現在の位置は初めに建てた所としては、あまり適当でないように思われる。或はいつの時代にか、何かの理由で現在地に移されたものかも知れないので、付近の古老に尋ねた処、「最初からあの地にあつたものに間違いない」との証言を得た。理由はこの道は昔は長宿から谷戸を抜け、ヒョロケン坂を上り、打越や栗原台方面に通ずる重要な農道であり、しかも地積はかつて「新戸谷戸」の分であつたという。



略図寸法（センチメートル）

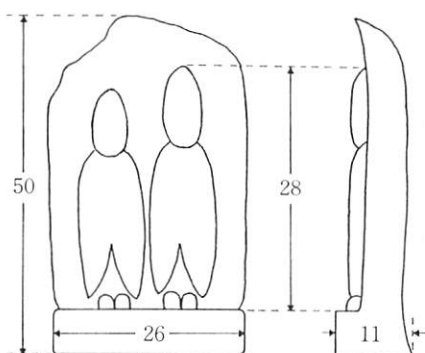
所在地 入谷三一五六三八
小田急ガード東側
碑形 山状角柱形
形態 文字塔
年代 嘉永五年十月吉
(一八五二)

左側面	正面	右側面	
	道祖神	嘉永五子年 十月吉辰	本体
新戸谷戸 田中源藏 同佐エ門 江成源之助 同甚兵エ 同園八 田中龍茂 江成辰五良 同伊之助	中講	座間谷戸 葛村林藏 同平兵エ 同八十八 福田勝五良 同菊五良 同權兵エ	台座

No. ①⁹ 星の谷の道祖神



鎌倉街道と鈴鹿坂上交差点南側に位置する双立拱手像付の具像塔である。道祖神塔としては、市内で三番目に古い明和八年の建立である。
明治末頃迄、田植えの終わった後、豊作を祈念して各戸で残った苗（約一束）を道祖神塔に納めた。また、ヨウカゾウと一ツ目小僧の言い伝えが残されている（No. ③参照）。



略図寸法（センチメートル）

所在地 入谷三―六三五一

浴 宗輔氏宅横

碑 形 船型光背形

形 態 双立拱手像付

年 代 明和八年正月吉日

（一七七一）

正
面

道祖神

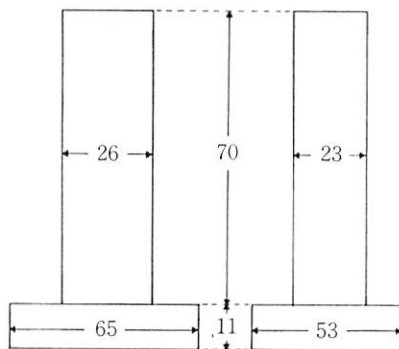
明和八卯正月吉日

本
体

No. 20 皆原の道祖神(1)



この道祖神塔は皆原北の一六七五番地にあったが、昭和四十三年県道座間杉久保線の拡幅工事のため現在地に移転したものである。この塔に刻まれている「龍舎」、「孟春」の文字は、本市唯一のものであり、この解説に多くの時間を費やし、ようやく解説できた。「龍舎」とは「リュウヤドル」と読み、年と同義語である。中世から近世にかけて年号を表わすのに使用された形式である。「孟春」とは、一月の別名で「天保二卯年一月吉日」と解説できた。



略図寸法(センチメートル)

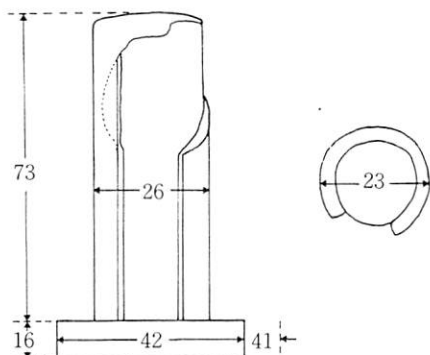
所在地 入谷五一八〇八一二
小川久重氏宅付近
碑形 角柱形
形態 文字塔
年代 天保二年一月吉日
(一八三二)

正面	右側面	本体
道祖神	天保二卯龍舎 圖春吉日	

No. ② 皆原の道祖神(2)



市内では一基だけの珍しい円柱形の道祖神塔であるが、昭和九年、桜田入口道路拡幅のため一七五三番ノ一より一七六二番に移し、更に昭和四十三年、県道座間杉久保線の拡幅工事に当り、やむなく現在地に移転したものである。再度の移動に伴い、剥落甚しく、正面の三文字も判読困難で、正面だけを残して外側はコンクリートで補修されている。しかし台座は以前のままで、右側に「天保二辛卯 十月中旬 團建之」とあり、左側の人名に一部判読不明の部分がある。



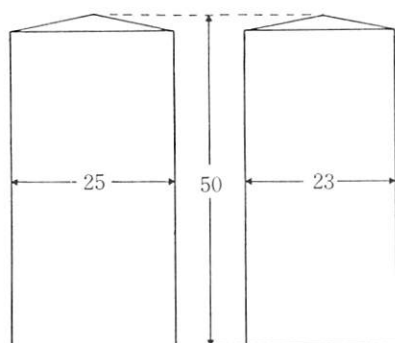
所在地 入谷五―一八〇八―二
小川久重氏宅付近
碑形 円柱形
形態 文字塔
年代 天保二年十月中旬
(一八三一)

左側面	正面	右側面	
	□ □ □		本体
世話人 皆原村 澤田佐十 内藤甚兵衛 一杉善□□ 飯島五良右エ門 澤田源兵衛		團時 天保二辛卯 十月中旬 團建之	台座

No. ② 羽根沢の道祖神



羽根沢地域の道祖神塔として、約百八十年前の文化七年に建立されたもので、台座は破損したため、コンクリートで補強され保存されている。
塔の右側面に「文化七年庚午天」とあるが「天」とは年を表わすことばである。



略図寸法（センチメートル）

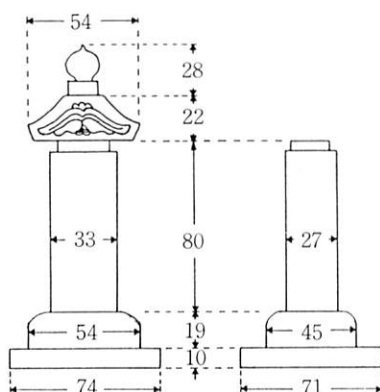
所在地 入谷五―二五四七
奥津昭仁氏宅横
碑形 山状角柱形
形態 文字塔
年代 文化七年
(一八一〇)

左側面	正面	右側面	本体
氏子中	道祖神	文化七年庚午天	

No. 13 三峯台の庚申塔



左側面	正面	右側面	本体
青面金剛供養塔 左大山あつぎみち		明和五戊子四月吉祥日 相島高座郡座間入谷園 右ほしのや道	台座
☐ 現世利益 ☐ 為利 ☐ 成佐 ☐ 兵衛 ☐ 市右衛門 ☐ 右衛門 ☐ 福田権兵衛 ☐ 加藤門兵衛 ☐ 施主			



略図寸法（センチメートル）

所在地 入谷三二八三五―
大門坂上
碑形 唐破風付角柱形
形態 青面金剛像・三猿像付・道標を兼ねる
年代 明和五年四月吉日
(一七六八)

昭和三十年初めまで、この庚申塔の傍に大きな榎が繁茂していたので「榎庚申」と呼ばれ、土地の人々に親しまれていた。

この庚申塔には、青面金剛像と三猿像が彫られており、道標を兼ねている。特に、青面金剛像は、憤怒の形相がよく表現され、市内で最も整った金剛像として評価されている。但し、三猿の部分が殆んど剥落しているのは残念である。

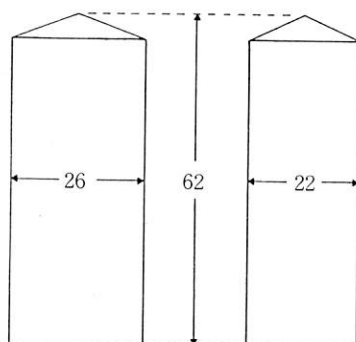
また、六名の施主名が、当時名主であった福田権兵衛外有力者の名であり、江戸中期の庚申講が土地の有力者の肝入りで、盛んに行われたことを示している。

この庚申塔は、旧星の谷・巡礼街道の三峰神社参拝口の重要な要路に建てられていたので、榎と共に旅人の目標であり、よい憩の場でもあった。現在は県道が別に造られたので、道そのものは廃道同然になってしまったが、昔の街道の面影を色濃く残している。

No. 14 入谷庚申北の庚申塔



この塔は、道標を兼ねた庚申塔で、府中街道星の谷橋横の栗原、大塚方面へ岐れる辻にある。建立年代、建立者名は刻れていないが、左側面の道標の中に「加な川」の文字が見える。この「加な川」の文字が使用されたのは、安政六年（一八五九）神奈川開港以降である。それらの事実から推定すると、建立年代は江戸時代末期であると思われる。



略図寸法（センチメートル）

所在地 入谷三―三七三四
星の谷橋横
碑形 山状角柱形
形態 文字塔・道標を兼ねる
年代（不明）

左側面	正面	右側面	
此方 く里原 大つか 加な川	庚申塔	此方 ほしのや あつぎ 大山	本体
	此方 きそ まちだ ふちゅう		台座

No. 15 星の谷の庚申塔



この庚申塔は、幕末から明治初年にかけての典型的な形態の文字塔で、道標を兼ねている。また、特に正面に刻られた「庚申塔」の文字は有名な書家の文ではないかと思われるほど立派な物である。

この塔は、星の谷・巡礼街道と府中街道との分岐点に建立されており、道標の中に東京や横浜の地名が見え、明治初年の息吹きを感じる。

また、この塔には、星の谷講中十三名の名が刻まれている。全体的にこの時期の庚申信仰は、衰退の一途をたどっていくが、世話人三名を中心に講が組織的に運営されていた姿を今日に残している。これは本市の庚申信仰の歴史の中で貴重な資料でもある。

所在地 入谷三―三七五五

三峯坂下

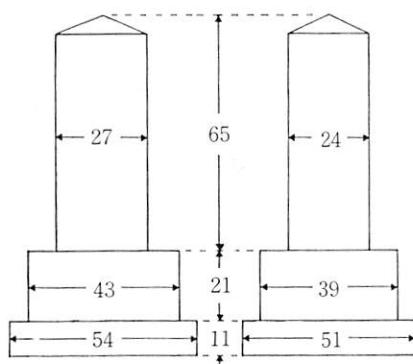
碑形 山状角柱形

形態 文字塔・道標を兼ねる

年代 明治八年二月吉日

(一八七五)

略図寸法（センチメートル）



左側面

正面

右側面

明治八乙亥年二月吉日 原町田 左きそみち ふちう	庚申塔	右 東京 横濱道 下りあつき 大山
星野圓藏 山田八左エ門 星野新兵衛 曾根孫右エ門 嶋村九右エ門 野島市良兵衛 増寫力藏 山田角左エ門 同 藤兵エ門 曾我茂右エ門 世 野島吉兵衛 話 加藤喜兵衛 人 遠藤源右エ門	中 講	星野谷

本体

台座

No. 16 明王堂の庚申塔



この庚申塔は、明王山頂、府中街道より立野台方面に分岐する辻にある三猿像付文字塔である。

三猿は、三面に一体ずつ彫られている。

建立年代は、上部が破損しているが干支により宝永六年と推定した。

笠や台座は不明である。

所在地 入谷三―五九九一

米軍貯水池前

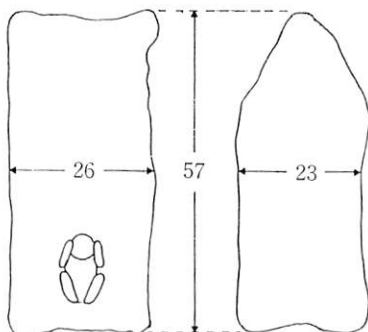
碑形 角柱形

形態 文字塔・三猿像付・有縁

年代 宝永六年六月

(一七〇九)

略図寸法(センチメートル)



本体

右側面

正面

左側面

相列高座郡
座間郷入谷村

奉□申供頼

□永六己丑□
六月吉祥□

No. 17 羽根沢の庚申塔



この塔は、羽根沢地区に唯一現存する庚申塔である。

この地区は清蔵坊の小字名が残され、修験道場がかつてあったと伝えられる。入谷地域の谷戸地区と共に、修験行者と庚申信仰の結びつきを示す庚申塔ではないかと思われる。

塔の下部が欠損し、コンクリートで補修されている。

所在地 入谷五―二五四七

奥津昭仁氏宅横

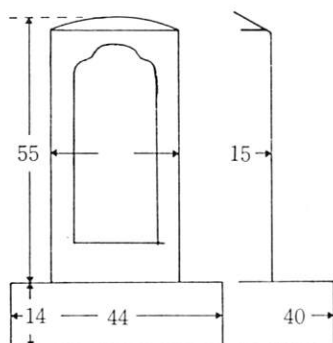
碑形 山状角柱形

形態 文字塔・有縁

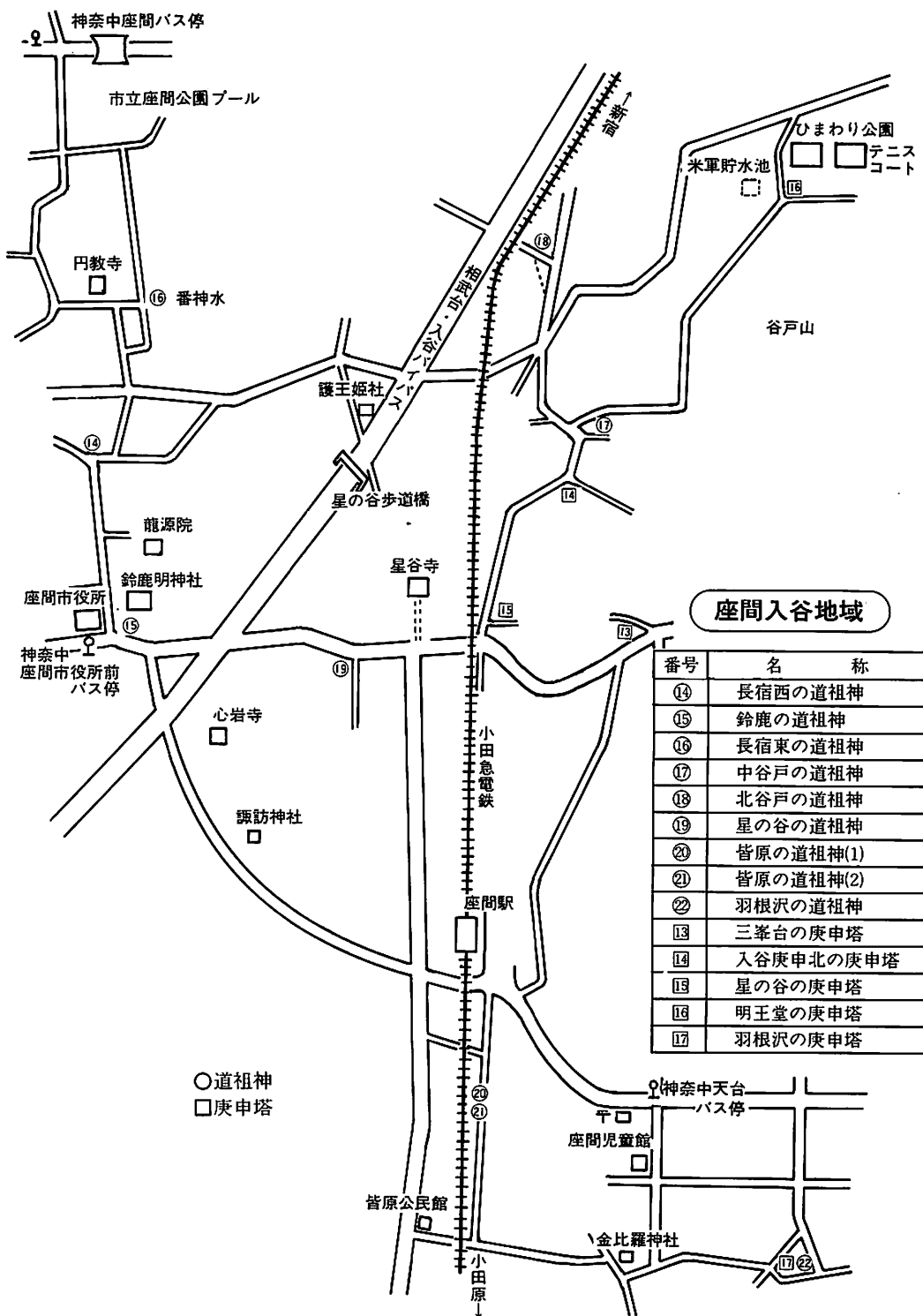
年代 明和二年十一月吉日

(一七六五)

略図寸法(センチメートル)



左側面	正面	右側面	本 体
十一月吉祥日座間郷羽根沢	庚申供養塔講中	明和二酉年	



栗原地域の道祖神・庚申塔

一、道祖神

栗原地域の道祖神塔は十三基であり、角柱形文字塔が九基、多重塔形無銘塔が二基、双立拱手像塔、単立拱手像塔が各々一基ずつある。

内容を小字に分けて説明する。

小池の道祖神塔は二基ある。一基は上小池の共有地にあり、多重塔形無銘塔で、年代は不明である。他の一つは、下小池セーノ神坂傍にある船型光背形の単立拱手像付の具像塔で、建立年代が享保六年（一七二一）で、市内では最も古い道祖神塔である。

上栗原の道祖神塔は隅丸角柱形文字塔の二基で、上村、下村に分かれて立っている。上村の道祖神塔は安政四年（一八五七）一月建立であり、碑文の「衛道神」は古字を使ったもので全国的に珍しく、市内唯一のものである。下村の道祖神塔は明治十七年（一八八四）一月建立であるが、あまりにも剥落が大きいので正面の文字は全く読むことができないが、側面の碑文から道祖神塔であることが判明した。

中栗原の道祖神塔は、角柱形文字塔一基のみで、昭和三十九年（一九六四）一月の再建である。旧塔は行方不明であるが、かつては力石といって若者達がこの塔をかついで力だめしをしたといわれている。

芹沢の道祖神塔は皿角柱形文字塔であり、上の坂と下の坂の分か

れる道にあり、安政四年（一八五七）の建立である。

中原の道祖神塔は二基で、同じ場所に並立している。一つは、嘉永五年（一八五二）九月建立の山状角柱形文字塔である。二つ目は、船型光背形の双立拱手像付の具像塔で、建立年代は不明である。並立している嘉永五年の道祖神塔はこの塔の再建と思われる。

立野台の道祖神塔は一基である。立野台公園の池の傍ロータリーに、昭和五十四年に建立された前面加工隅丸形文字塔であり、市内の道祖神塔で新築としては最も新しいものである。

下栗原の道祖神塔は五基である。一つは、安政四年（一八五七）一月建立の山状角柱形文字塔で、元は下谷にあったが関東大震災のため崖が崩れて塔が埋もれてしまったので現在地に移転された栗原、中下の道祖神塔である。二つ目の塔はこの安政四年の塔の再建（昭和五十三年）の道祖神塔である。三つ目の塔は、昭和八年（一九三三）五月再建の角柱形文字塔で、正面の文字、道祖神の神が古字を使っており、市内では珍しい栗原・大下の道祖神塔である。本塔は寒川橋のたもとにある多重塔形無銘塔の再建で、塔は中心部が折損している。四つ目の塔は、昭和八年建立の道祖神塔の再建で並立している。昭和五十九年（一九八四）に建立した、再建では市内で最も新しい道祖神である。五つ目は目久尻川にかかる寒川橋のたもとにある多重塔形無銘塔で、二つ目、三つ目の道祖神塔の元の道祖神塔である。

栗原のサイトバライの行事は、全地域で、ほとんど大人が仮屋と焚き上げに正月のお飾りや門松、または各戸から集めた竹や松、ワラを積み上げ、子供達も手伝って団子焼きの準備をした。一月十四日は、午前中から準備をし、夕方から団子焼きが行われた。団子を二つ以上取り替えたり、焼け棒を持ち帰り、門口に立てかけて魔除けにしたりした。

「通せん棒」をした話は残っていない。地域によって行事の二、三日前から当番が賽銭集めをし、当日子供達にミカンや菓子をあたえ供物分けをした。

サイトバライにちなんだ一ツ目小僧の話は栗原地域全体にかなり伝えられている。結婚して初めて里帰りをする者は、サイトバライが始まるまでに実家に戻らなくてはならない、帰してやらなければならぬ、これは栗原地域にかなり広く行われていた風習である。

二、庚申塔

栗原の庚申塔は十七基で、小字別に分けると、小池六基、上栗原四基、中栗原二基、芹沢二基、下栗原三基である。

小池の庚申塔は、上小池、下小池合わせて六基ある。その内小池東原庚申塚に二基ある。天保四年（一八三三）九月建立の庚申塔は山状角柱形文字塔で、台座の正面が有縁であるのが珍しい。他の一つは、享保三年（一七一八）十月建立の三猿像付・有縁の唐破風付

角柱形具像塔で、三猿は、それぞれ片手で、片目、片耳、口をふさいでおり、市内で唯一のものでたいへん珍しい。

小池坂途中路傍の庚申塔は、文化二年（一八〇五）十月建立の山状角柱形文字塔で、元、小池西原にあったものを昭和五十四年に現在地に移したものである。塔の中央部が折損している。

相武台プールにある小池西原の庚申塔は、宝永四年（一七〇七）

十一月建立のもので、青面金剛像・悪鬼・三猿像付の唐破風付角柱形具像塔である。塔の左側面に、二行の経文（十五字）が刻まれており、このような庚申塔は、本市で唯一のものである。



小池西原の庚申塔

下小池目久尻川畔にある庚申塔は、安政六年（一七七七）九月建立の角柱形文字塔で、元、小池尻橋のたもとにあったものを県の遊水池事業として土地買収がされたため、昭和五十八年に現在地に移

されたものである。

下小池セーノ神坂下の庚申塔は、延宝二年（一六七四）十月建立の三猿像付・有縁の唐破風付角柱形文字塔の具像塔で、市内で最も古い庚申塔である。

上栗原の庚申塔は四基である。内二つは、北向庚申神社のご神体で、一つは、明和八年（一七七二）八月建立の青面金剛像・三猿像付の角柱形の具像塔で、青面金剛像の顔は、表情にやさしさがあるのが特長である。塔の剝落が著しい。他の一つは、この塔に並立している慶応四年（一八六八）建立の青面金剛像・三猿像付の角柱形の具像塔で明和八年の庚申塔の再建と思われる。

北向庚申神社の塔は、村の一人が眼病平癒を毎日路傍の庚申塔に祈願したところ治癒したので、霊験あらたかとして有名になった庚申塔である。

上栗原嘉兵衛坂路傍の庚申塔は、明治二十七年（一八九四）十二月建立の隅丸角柱形文字塔で、塔の周囲に破損した笠石等があるので、この塔は再建と思われる。庚申塔の個人での建立は市内でも数少ない。

上栗原西原の庚申塔は隅丸角柱形の三猿像付・有縁である。剝落が大きく銘文は判読不能で建立年代は不明であるが、辛うじて三猿の内二猿が残っている。

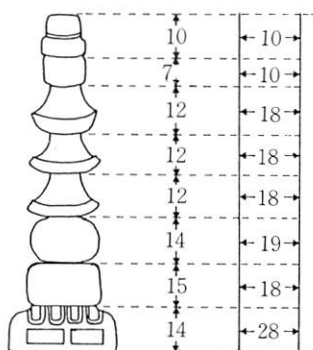
芹沢の庚申塔は二基で、二基とも山王神社境内にある。一つは、

元禄五年（一六九二）建立の青面金剛像・三猿像・悪鬼付の角柱形の具像塔で、市内で二番目に古く、青面金剛像初出の庚申塔である。他の一つは、三猿像付・有縁の唐破風付角柱形の文字塔で、剝落がひどく建立年代は不明で、塔の左側面に言わざる像が残っている。中栗原の庚申塔は中原に二基ある。一つは、立野台地域と芝原道が交差するストアーの横にある宝永四年（一七〇七）五月建立の青面金剛付具像塔で、この塔は道標を兼ねた庚申塔としては市内初出のものである。二つ目は、芝原道の脇にある延享元年（一七四四）八月建立の船型光背形の青面金剛像付具像塔である。この碑形の庚申塔は市内で唯一のものである。

下栗原の庚申塔は四基ある。巡礼坂途中にある中下の庚申塔は、正徳三年（一七一四）九月建立の青面金剛像・三猿像・悪鬼付の唐破風付角柱形の具像塔で、この塔の青面金剛像は腹部がなくなっているのが、他の青面金剛像とは異なっている。

大下八軒庭の庚申塔は、元禄十三年（一七〇〇）一月建立の青面金剛像・三猿像・悪鬼付の唐破風付角柱形の具像塔で、市内で三番目に古い庚申塔である。

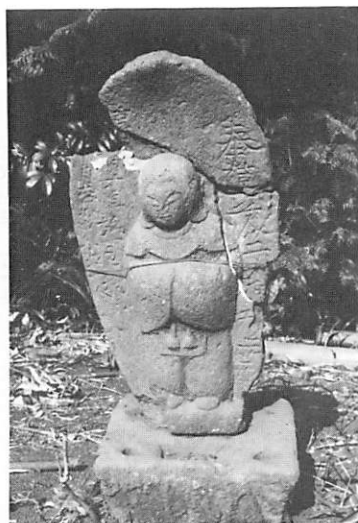
大下・大塚の庚申塔は、明治五年（一八七二）建立の皿角柱形の文字塔で、大山街道から栗原縦貫道に分かれる辻にあり、本塔は、八軒庭地区にあったものを現在地に移したものである。施主は個人名となっている。正面の「庚申塔」の字体は、すばらしいものである。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原一〇六六
 玉木富蔵氏宅付近
 碑形 七重塔形
 形態 無銘塔
 年代 （不明）

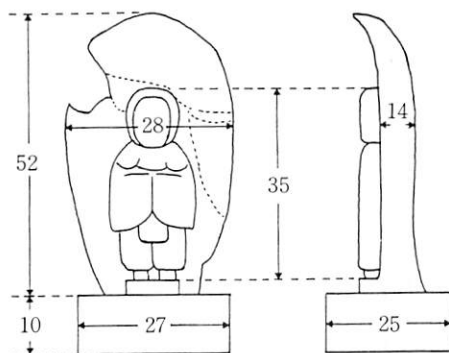
元の所在地は、栗原一一二六地先（小池谷）であつたが、自動車の通行が多くなり、破壊の恐れが生じたため、十数年前、小池集落の共有地である通称庚申塚の現在地に移転された。
 この七重塔形の道祖神塔は市内では唯一のものである。



正面

奉造立冬二〇〇之霊
享保六年 施主村中
□月吉日 小池□□

本体



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原一七三六

大木光雄氏宅横

碑形 船型光背形

形態 単立拱手像付

年代 享保六年

（一七二一）

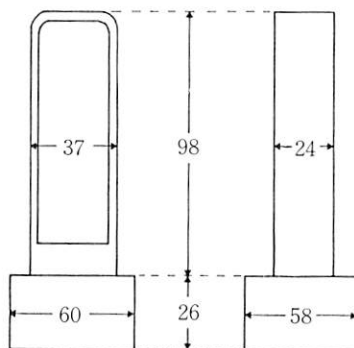
栗原縦貫道セーノ神坂傍にある単体立像の道祖神塔である。

享保六年（一七二一）に建立されたもので、市内で年代の判明するものでは最古のものである。そのため、風化が著しく本体上部の欠損、ひび割れがあり、銘文も判読困難な箇所が多い。ここにも、ヨウカゾウに係わる道祖神と、一ツ目小僧との次のような言い伝えが残されている。

道祖神が村人を救うため自分の家を焼いて地域の人を救ったというのである。そのため、道祖神は有難い神様であると崇められ、坂道の名の由来ともなった。また、旅の帰着には、必ず道祖神に詣でたという。

No. 25 上栗原北の道祖神

左側面	正面	右側面	
上栗原村	道祖神	安政四年丁巳春 正月	本体
	中子氏		台座



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原二〇六五―一
嘉兵衛坂下
碑形 隅丸角柱形
形態 文字塔・有縁
年代 安政四年一月
(一八五七)

この塔は上栗原石造群の中にあり、「衛」の字を使った道祖神塔は、全国的にも珍しく、市内唯一のものである。「衛」は「道」の古字で、「ちまた」、「みち」とも読み、「多く分岐した辻」を意味していると言われている。この道祖神塔が建っている場所は星の谷街道・栗原縦貫道の重要な分岐点であるので、この字が使われたと思われる。この地域では昔、道祖神が一ツ目小僧に借金し、返済できなくなり、証文を燃やすために仮小屋を燃やしたと言いつい伝えが残されている。また、焚き上げの火にあたりながら地域の役員を決める相談をしたという。

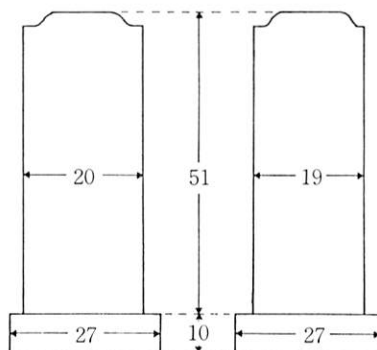
No. ②⑤ 芹沢の道祖神



この塔は、芹沢川に架る下の橋を渡って二十メートル程行った道路の右側にある。

昔サイトバライの時、子どもたちが地区の家を廻り、賽銭を集めて歩いた。

子どもたちは、賽銭集めの最後に最年長の子どもの家に寄り、五目飯をご馳走になった。集められた賽銭は、サイトバライのご神酒や供物の費用に当てられた。供物は、地区の子どもたちに分けられた。現在では、この風習は残されていない。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原二七八七―一
芹沢下の橋横
碑形 皿角柱形
形態 文字塔
年代 安政四年一月十四日
(一八五七)

左側面	正面	右側面	本体
氏子中	道祖神	安政四丁巳年正月十四日	

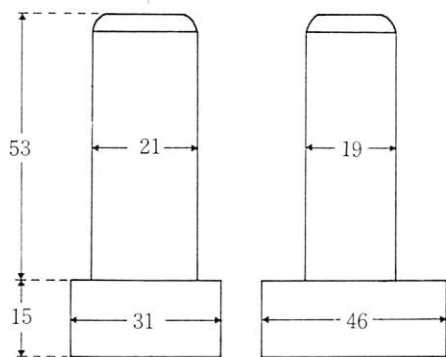
No. ②⑦ 中栗原の道祖神



この道祖神塔は、昭和三十九年一月に再建されたものである。

旧塔は、これよりひと周り大きく、高さ七十センチ、幅四十センチぐらいの文字塔で、栗原三二七五地先より昭和二十五年の道路改修のため移したが、その後行先不明となっている。

新塔は氏子の一人が建立したものである。ヨウカゾウの中の一ツ目小僧の言い伝えが残されている（No. ③参照）。旧塔は力石として用いられていた。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原二九八三

消防倉庫前

碑形 角柱形

形態 文字塔

年代 昭和三十九年一月十四日

（一九六四）

左側面	正面	本体
昭和三十九年一月十四日建之	道祖神	

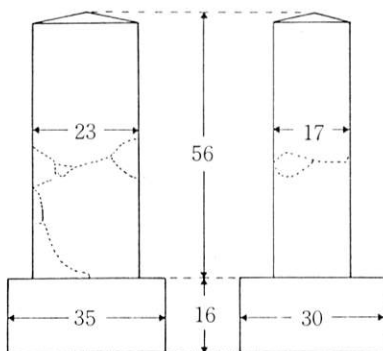
No. ②⑧ 栗原・中下の道祖神(1)



この塔は、栗原縦貫道を少し入り、目久尻川に架る竹橋から、山下の坂、巡礼坂に至る中間の所に祀られている。塔の破損が大きいので、コンクリートで補修されている。

塔は、以前、近くの崖下にあったが、関東大震災のとき崖が崩れたため現在地に移したものである。

中下地区のサイトバライは毎年この場所で行われている。この地区にもヨウカゾウにかかわる一ツ目小僧の言い伝えが残されている。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原三四七〇
 渋谷神八氏宅横
 碑形 山状角柱形
 形態 文字塔
 年代 安政四年一月十四日
 （一八五七）

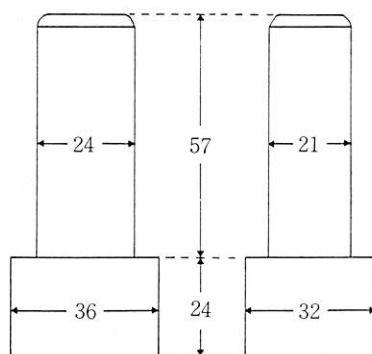
左側面	正面	右側面	本体
下栗原村講中	道祖神	安政四丁巳年正月十四日	

No. ②⑨ 栗原・中下の道祖神(2)



この塔は、No. ②⑧の再建であり、旧塔の左側に並立している。

中下地区のサイトバライは毎年この場所で行われている。この地区にもヨウカゾウにかかわる一ツ目小僧の言い伝えが残されている。



略図寸法(センチメートル)

所在地 栗原三四七〇
 洪谷神八氏宅横
 碑形 角柱形
 形態 文字塔
 年代 昭和五十三年三月吉日
 (一九七八)

左側面	正面	右側面	本体
昭和五十三年三月吉日再建	道祖神	下栗原上庭講中	



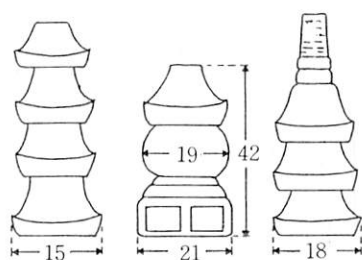
所在地 栗原三九二三
寒川橋横

碑形 多重塔形

形態 無名塔

年代 (不明)

略図寸法 (センチメートル)



本道祖神塔は、多重塔で、目久尻川に架る寒川橋のたもとにある。現在十個あるが台風による目久尻川の再三の氾濫で、いくつか流失してしまっただと言われている。

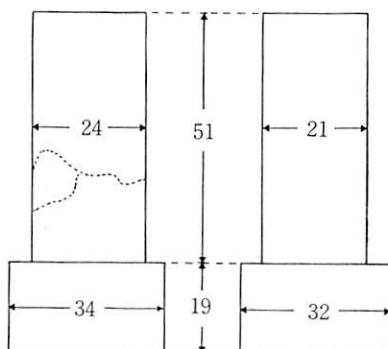
塔の流失防止と近くに新築の家ができたための火災予防上、塔は、昭和八年五月にNo.③⑪の場所へ一度移転したことがある。その時No.③⑩の道祖神塔を建立した。

その後、氏子の中に病人が多くて災難が続いたため、昭和八年五月に本塔だけを元の場所に戻したのである。

No. ③① 栗原・大下の道祖神(2)



本道祖神塔は、大下の栗原縦貫道寒川橋の北方約百五十メートル先の路傍に建てられており、昭和八年五月にNo. ③①の道祖神塔（多重塔）がここに移転されてきた時に建立されたものである。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原三九一〇
 碑形 角柱形
 形態 文字塔
 年代 昭和八年五月吉日
 （一九三三）

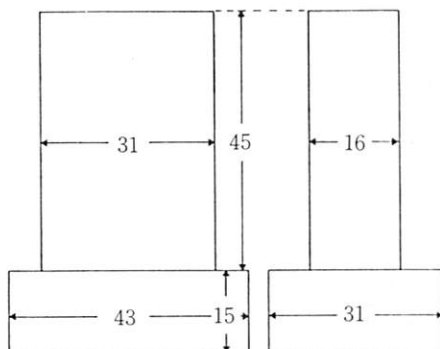
本体	正面	左側面
道祖神	下栗原 昭和八年五月吉日	

No. ③② 栗原・大下の道祖神(3)



この塔は、No. ③①の塔が破損磨耗が著しくなったので、昭和五十九年四月に再建されたもので、旧塔と並立して建っている。

大下地区のサイトバライは、毎年ここで行われているが、この行事も、近年塔の付近の住宅化に伴いしだいにむずかしくなってきた。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原三九一〇
 碑形 角柱形
 形態 文字塔
 年代 昭和五十九年四月吉日
 (一九八四)

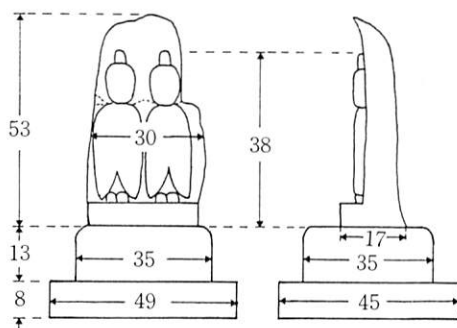
左側面	正面	本体
大下中講中 昭和五十九年四月吉日	道祖神	

No. ③③ 中原の道祖神(1)



この塔は、中原地区の中央に位置する場所に、No. ③④の道祖神塔と並立して安置されている。

本塔は、双立拱手像の具像塔であるが、永年の風雨にさらされ磨耗、剥落が著しく、かろうじて像の姿がわかる程である。したがって、年代も不明である。並立している嘉永五年建立の道祖神塔や塔の磨耗等の状況から判断して、嘉永五年（一八五二）より、数十年前に建立されたものであると推定される。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原四三三二

市川長作氏宅横

碑形 船型光背形

形態 双立拱手像付

年代 (不明)

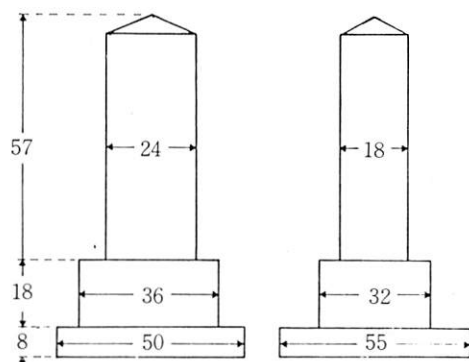
右側面

相残高座郡

本体



本塔は、並立している双立拱手像付具像塔の再建と思われる。この塔は、江戸末建立の塔としては保存状況もたいへん良いのが特長である。昔、サイトバライの時、当番が毎年きめられ、前もって地区の家々から賽銭を集めて廻り、その賽銭で菓子を購入し行事に参加した子どもたちに分けた。現在は行われていない。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原四三三二
市川長作氏宅横
碑形 山状角柱形
形態 文字塔
年代 嘉永五年九月吉日
(一八五二)

左側面	正面	右側面	
栗原村	道祖神	嘉永五壬子年 九月吉日	本体
	中子氏		台座

No. ③⑤ 西原の道祖神

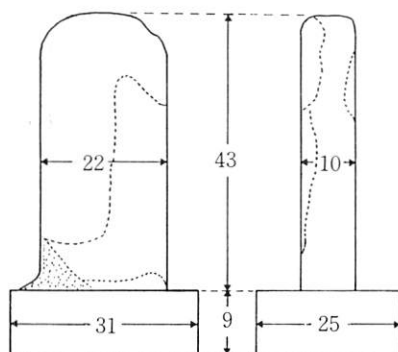


巡礼街道より市営住宅に入った路傍にある。

明治十七年一月十四日に建てられているが、凝灰岩のため、あまりにも剝落が大きいので、正面の文字は、全く読むことができない。

左側面には上栗原惣氏子中（この碑文によって道祖神塔と判明）とあるが、実際は上栗原の下村地区の講中である。

結婚してはじめて里帰りする者は、サイトバライのはじまるまでに実家に戻らなくてはならないという風習が残っている。この塔に並立して庚申塔がある。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原四九七八
吉村利玄氏宅横
碑形 隅丸角柱形
形態 文字塔
年代 明治十七年一月
(一八八四)

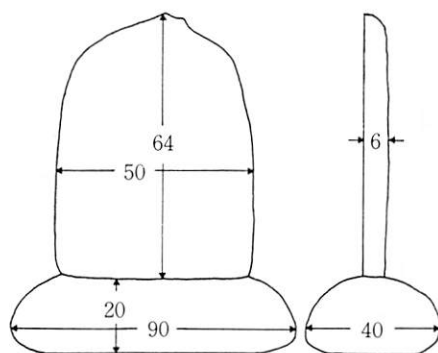
左側面	右側面	本体
上栗原 惣氏子中	明治十七年一月十四日	

No. 36 立野台の道祖神



本道祖神塔は、昭和五十四年に立野台連合自治会が、立野台公園の池の傍のロータリーに建立したもので、市内の道祖神塔では最新しいものである。

当自治会は歳時記「町づくり」の一環とし、地区の中に自然や行事を取り入れたふるさとづくりとして、正月のドンド焼き行事を催すため道祖神塔を建立したものである。以来毎年一月十四日にサイトバライの行事を行っている。



略図寸法（センチメートル）

所在地 立野台三八五番地

立野台公園ロータリー中央

碑形 前面加工隅丸形

形態 文字塔

年代 昭和五十四年一月吉日

（一九七九）

裏面

正面

道祖神	昭和五十四年己未正月吉日 立野台十二自治会連合会 建立
------------	--

本体

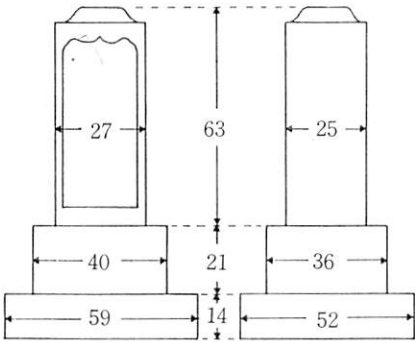
No. 18 大下の庚申塔



この庚申塔は、大山街道から栗原縦貫道に岐かれる辻にある文字塔である。

以前は、栗原三七七四・大矢平七氏宅内にあったものを、明治十三年に同家移転に伴い現在地に移したものである。

右側面に明治五申年秋八月龍集と建立年代が彫られている。「龍集」とは、歳星（木星）がやどること、この星は一年に一度めぐるので、一年を龍集といい、普通は干支の名の上に冠することであるが、本塔には、干支がなく上に秋八月と記されている。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原一一一

田野口孫光氏宅横

碑形 皿角柱形

形態 文字塔・有縁

年代 明治五年

（一八七二）

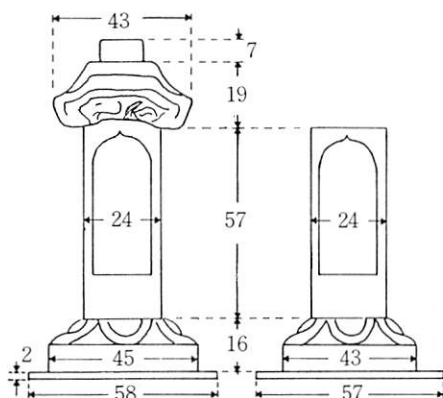
左側面	正面	右側面	本体
志主 大矢平七	庚申塔	明治五申年 秋八月龍集	

No. 19 小池東原の庚申塔(1)



左側面	正面	右側面
享保□戊戌天閏十月吉日	奉□□□庚申	相州□□□小池□
	久左エ門 久二郎	

本体
台座



略図寸法(センチメートル)

所在地 栗原一〇六六

玉木富藏氏宅付近

碑形 唐破風付角柱形

形態 文字塔・三猿像・悪鬼付・有縁

有縁

年代 享保三年十月吉日

(一七一八)

この庚申塔の所在地は、庚申塚と呼ばれているが、現在は平坦な草地で塚が存在したかどうかは不明である。

この庚申塚という名前から推定すると、塔を建立する以前からこの地で庚申講が行われていたのではないかと思われる。

この庚申塔は、悪鬼・三猿像付の文字塔であるが、文字は剥落し不明の部分がある。

建立年代は、左側面にある「享保□戊戌天」から干支により享保三年と判明した。

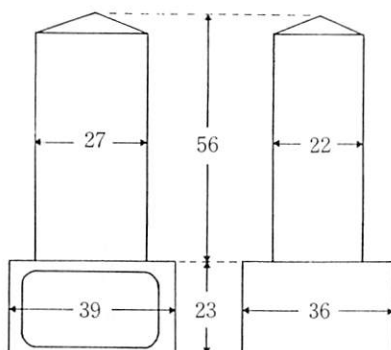
この塔の三猿は変った姿で、それぞれが片手で片目、片耳、口をふさいでいる。市内では唯一のものであり、大変めずらしい。

建立者は九名で、久左エ門、久二郎の名前は判読できるが、他の七名は磨耗し判読不可能である。

No. 20 小池東原の庚申塔(2)



この庚申塔は、No. 19の庚申塔と並立している。塔の文字は、深く刻まれ鮮明であり、台座が縁付であるのは珍しい。



略図寸法(センチメートル)

所在地 栗原一〇六六 玉木富藏氏宅付近
 碑形 山状角柱形
 形態 文字塔
 年代 天保四年九月吉日
 (一八三三)

正面	右側面	
庚申塔	天保四巳 九月吉日	本体
中講	小池 村中	台座

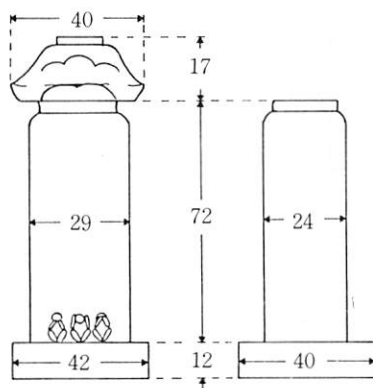
No. 21 小池西原の庚申塔



小池西原の喜作坂上にあるこの庚申塔は、本市の庚申信仰と修験行者を結びつける貴重な資料である。

特に、その左側面に刻まれている呪陀羅尼の呪文、憤怒の形相をした青面金剛像等、修験行者が広めた庚申信仰の影響を色濃く受けていると思われる。

この塔に刻まれている陀羅尼は、真言の中にある息災法で、種々の災厄を消滅させるための修法で、九字と共に修験行者必修の呪文である。詳細は本文で参照されたい。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原一二一六

相武台プール横

碑形 唐破風付角柱形

形態 青面金剛像・三猿像・悪鬼付

年代 宝永四年十一月吉祥日

（一七〇七）

本体		台座	
右側面	相易高座郡栗原村小池 宝永四丁亥天十一月吉祥日	加藤 四郎 同 理兵衛 同 与右エ衛	
左側面	唵縛帝吒摩訶嚩呼 羅之阿微吒帝娑婆訶	小林 勘田 草薙 田園 同 徳右エ門 同 小左エ門	

No. 22 上小池の庚申塔

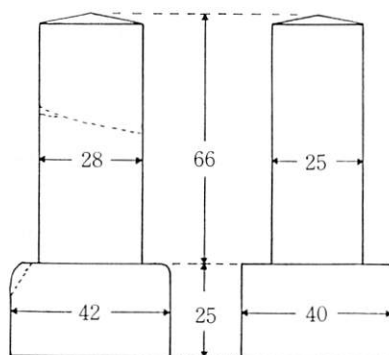


この庚申塔は、栗原縦貫道の小池坂下にあるが、小池西原一三〇九一より、昭和五十四年に現在地に移したものである。

本体は、中央部が折損しているが、文字は鮮明に刻まれている。

右側面に「陽月吉日」と刻まれているが、「陽月」とは旧暦十月のことである。

大正の初期までは、講が開かれていたという。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原一二三一一

小池坂下

碑形 山状角柱形

形態 文字塔

年代 文化二年十月吉日

（一八〇五）

左側面	正面	右側面	
	庚申供養	文化二乙丑年 陽月吉日	本体
草薙徳右エ門 同 与五兵衛 同 七右エ門 青木宗政		世話人 同 増右エ門 同 清藏 同 三左エ門 同 忠治良 加藤直好	台座

No. 23 下小池の庚申塔



この庚申塔は、下小池のバス停横にある文字塔である。以前は、これより約百メートル南の小池尻橋のたもとにあったが、県の遊水事業として土地が買収されたため、昭和五十八年四月に現在地に移されたものである。

本体の下部が欠損しているため建立者の氏名は不明である。

この庚申講は、「おかのエ講」と呼ばれ第二次大戦中まで続いていたという。

所在地 栗原一七三五

下小池バス停横

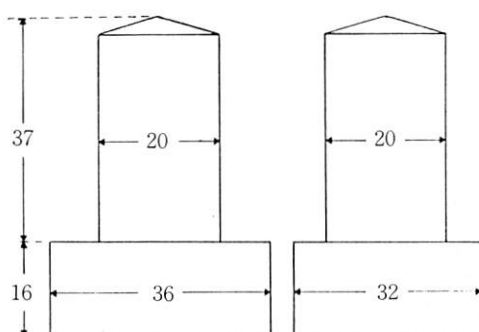
碑形 山状角柱形

形態 文字塔

年代 安永六年九月

(一七七七)

略図寸法(センチメートル)



左側面

正面

右側面

同 同 同 同	安永六丁酉 庚申□□ 九月□□	世話□ 栗原村小池
---------	--------------------------------	----------------------

本体

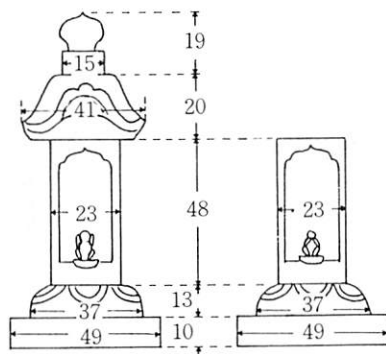
No. 24 セーノ神坂下の庚申塔



この塔は、市内で最も古く、猿像が三面に一体ずつ彫られた有縁の文字塔である。

旧栗原縦貫道のセーノ神坂（現在は廃道）傍に道祖神塔と並んで建っている。江戸初期の建立にもかかわらず保存がよく、「二世安楽」を主体としたその頃の庚申塔の形態を今日に伝える貴重な塔である。

また、建立者四名の氏名から当時の庚申講が、上栗原、小池の両地区にまたがって組織されていたことがわかる。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原一七三六

大木光雄氏宅横

碑形 唐破風付角柱形

形態 文字塔・三猿像付・有縁

年代 延宝二年十月

（一六七四）

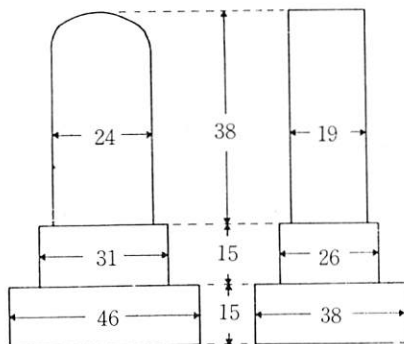
裏面	左側面	正面	右側面	本体
七月七日	十月朔日 吉志者立	奉待庚申供 養二世安楽処 □□□□□□□□	延宝二甲寅天 同 藤兵衛 鈴野□□	

No. 25 北向庚申神社の庚申塔(1)



左側面	正面	右側面
つる□□江戸道 南ふ□沢道	供 腹	明和八□年 ほし□や 大□ 八月吉日

本
体



略図寸法(センチメートル)

所在地 栗原一八〇〇—二

北向庚申神社内

碑 形 隅丸角柱形

形 態 青面金剛像・三猿像付・道

標を兼ねる

年 代 明和八年八月吉日

(一七七二)

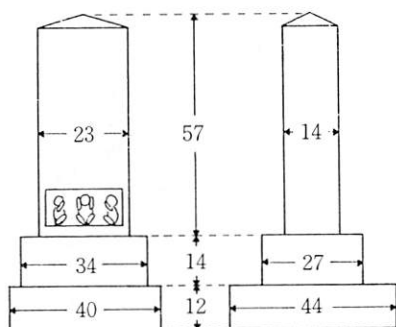
北向庚申神社の御神体の一つで、青面金剛像三猿像付の道標を兼ねた庚申塔である。材質は、脆い凝灰岩の七沢石らしく、各所に剥落、亀裂が生じている。特に金剛像の中央部の亀裂と三猿の見猿像の剥落が著しく、いずれもセメント補修されている。この庚申塔が信仰の対象として注目されたのは、昭和になってからである。この塔は地形の關係から北向に建っている珍しいものであった。昭和の初め頃眼病平癒を祈願した人が、後に治癒したので靈驗あらたかであると、信仰する人が増加した。そこで、昭和十年に寄付を募って現在の堂宇を完成させ、社殿に安置したものである。特に戦争中は、武運長久祈願のため、遠く横浜、藤沢、その他県内外各方面からも多くの人々がおとずれたという。点である一地域の講中信仰から、面への一般信仰へ移行した珍しいケースの信仰形態をたどった庚申塔である。この青面金剛像は、金剛像に似合わずやさしい顔をしているのが特長である。現在は神社の奉賛会と自治会が維持管理をしている。

No. 26 北向庚申神社の庚申塔(2)



北向庚申神社のもう一つの御神体で、先の明和八年の庚申塔の傷みが著しいため、再建されたものである。この塔の建立年代は、慶応四年即ち明治元年で、塔は青面金剛像・三猿像付の道標を兼ねた具像塔である。No. 25の金剛像がやさしい顔をしているのに比して、この像はきびしい青面金剛本来の顔をしている。

この庚申塔は、信仰の対象の他に星の谷街道の道標としての役割を重視して建立されたものではないかと思われる。



略図寸法(センチメートル)

所在地 栗原一八〇〇—二

北向庚申神社内

碑形 山状角柱形

形態 青面金剛像・三猿像付・道標を兼ねる

年代 慶応四年

(一八六八)

本体

右側面

比方ほし乃や大山道

左側面

左つる間

江戸道

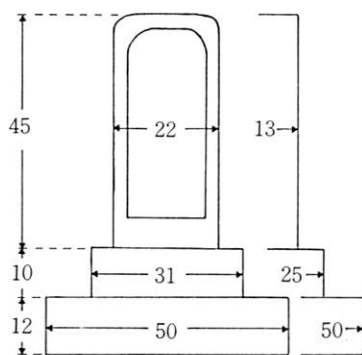
慶應四戊辰年

No. 27 上栗原の庚申塔



星の谷街道の嘉兵衛坂頂上付近の北側にある文字塔であり、市内では最も新しいものである。この辺は、かつては坂の頂上にあたり、道路と並行して建っていたが、道路の改修により、坂がけずられ、現在の庚申塔は崖の中腹に残されてしまった。

建立者は個人となっており、市内では珍しい。塔の周囲には、破損した古い笠石等があり、再建したものではないかと思われる。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原二〇六〇
嘉兵衛坂上
碑形 隅丸角柱形
形態 文字塔・有縁
年代 明治二十七年十二月吉日
(一八九四)

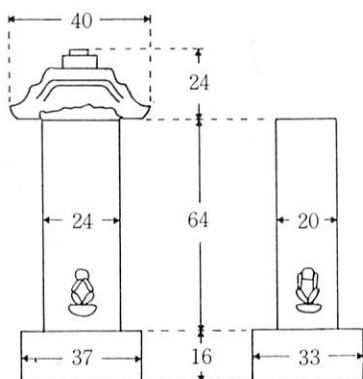
左側面	正面	右側面	本体
上栗原 鈴野太郎作	庚申塔	明治廿七年十二月吉日	

No. 28 中下の庚申塔



星谷寺から中下へ至る巡礼街道の「街道の坂」の途中にあって、青面金剛像・三猿像付きの庚申塔である。

青面金剛像は、他の金剛像に比して異常に腹部がふくれていて、アンバランスな感じである。そのため怒れる金剛像でなく、ユーモラスな感じさせるのは面白い。三猿も正面に「言わ猿」、右側面に「聞か猿」、左側面に「見猿」がある。元は、崖を掘り込んだ所にあったが、保存上周囲をブロックで囲ってしまったため、側面がよく見えない状況である。



略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原三一五九一

街道の坂

碑形 唐破風付角柱形

形態 青面金剛像・三猿像付

年代 正徳三年九月十六日

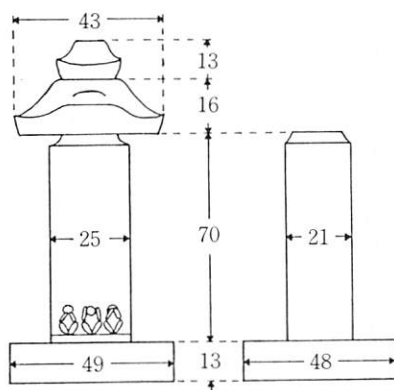
(一七二三)

左側面	正面	右側面	
九月十六日		正徳三癸巳年	本体
	中村七平 大矢□□		台座

No. 29 八軒庭の庚申塔



海老名市と郷境の天下八軒庭稲荷前にあって、
青面金剛像・悪鬼・三猿像付きで、現存する市
内の庚申塔の中で、三番目に古いものである。
銘記されている建立者は八名（大矢姓七名、
星野姓一名）で構成されている。庚申講の供養
碑として、また稲荷社と共に八軒庭の歴史と絆
の強さを証明する貴重な資料でもある。
塔の方位は、地形上から北向きになっている
のも、北向庚申神社と共に珍しく、靈驗あらた
かで古くから多くの信仰を集めてきた。



略図寸法（センチメートル）

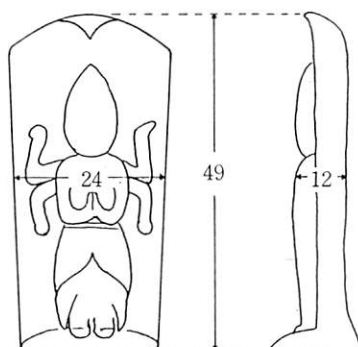
所在地 栗原三七六一
八軒庭稲荷横
碑形 唐破風付角柱形
形態 青面金剛像・三猿像・悪鬼
付
年代 元禄十三年十月吉日
(一七〇〇)

左側面	正面	右側面	本体	台座
	養供申庚納奉 辰十月吉日 元禄十三	相州高座郡栗原村		大矢三兵衛 同市良兵衛 同平兵衛 同三右エ門
星野倭 同久右エ門 同重兵衛 同源兵衛				

No. 30 中原の庚申塔



中原地区の中央部にある本庚申塔は、日輪・月輪・青面金剛像付の船型光背形の塔である。この船型光背形で青面金剛像付の庚申塔は、市内で唯一のものである。また、塔の大きさも他の庚申塔に比べて半分ぐらいであり、珍しいものである。



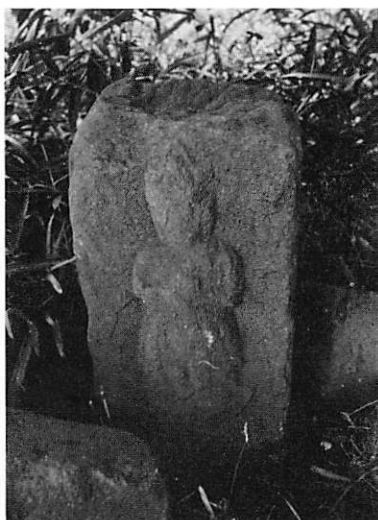
略図寸法（センチメートル）

所在地 栗原四二九三―二
鈴木小一氏宅横
碑形 船型光背形
形態 青面金剛像付
年代 延享元年八月吉日
(一七四四)

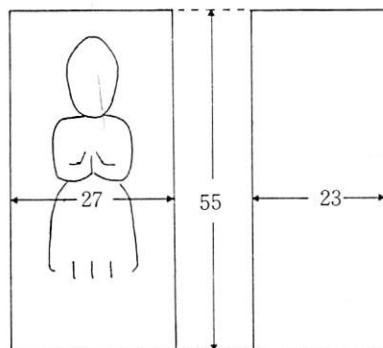
正面

延享元申子天
八月吉日
施主村中

本体



左側面	右側面	本体
宝永四年亥五月吉日 施主 大矢 清左エ 弥市	にしわほしのやみち ひがしくみやうじみち 施主 大矢□右 大矢□左	



所在地 栗原四五一四

佐藤正人氏宅横

碑形 角柱形

形態 青面金剛像付

年代 宝永四年五月吉日

(一七〇七)

略図寸法(センチメートル)

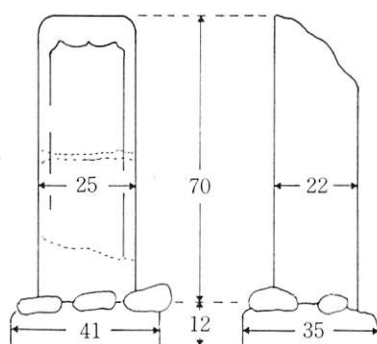
この庚申塔は、昭和五十七年一月十四日のサイトバライの時、地中から偶然に発見されたものである。

塔の発見された場所は、芝原道と巡礼街道が交差する辻に当り、栗原の豪農大矢弥市一族が建立したものである。

塔は、長年地中に埋れていたためか磨耗状況が著しいが、庚申塔として次の二つの重要な点を備えている。

一つは、道標として本市最古のものであるということ。他の一つは、塔の右側面に「にしわほしのやみち ひがしくみやうじみち」と刻まれ、本市における巡礼街道の存在と道筋を明らかにした点である。

また、当時の庚申信仰が豪農大矢一族の肝いりで盛んに営まれた点も注目したい。この塔が発見された辻には、各種石造物の残片が残されており、この塔を初めとしていくつかの塔が並立し、辻の石造群を形成していたのではないかと推定される。



略図寸法(センチメートル)

所在地 栗原四九七八

吉村利玄氏宅横

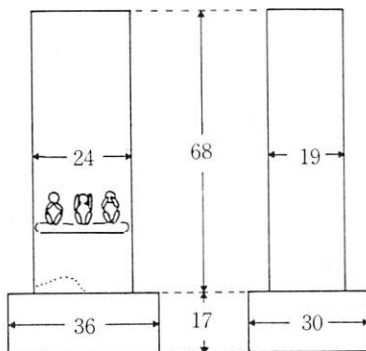
碑形 隅丸角柱形

形態 三猿像付・有縁

年代 (不明)

上栗原西原の巡礼街道から上栗原へ岐かれる辻に建っている。かつては畑地であったが、現在は市営住宅を中心とした住宅地となっている。本塔は剥落が著しく、銘文や年代等は判読がでない。本体左側の聞かざる像と右側の言わざる像により、三猿像付有縁文字塔と推定した。

左側面	正面	右側面	本体
中 猪 同 同 中 股 弥 六 仁 久 太 太 □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	養供申庚納奉 園 禄 五 国 国 天 □ 月 吉 日 同 左 エ 門 大 沢 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	栗原村芹澤 飯 島 市 兵 同 同 同 同 同 同 同 同 中 戸 川 佐 太 同 同 同 同 同 同 同	本 体



略図寸法（センチメートル）

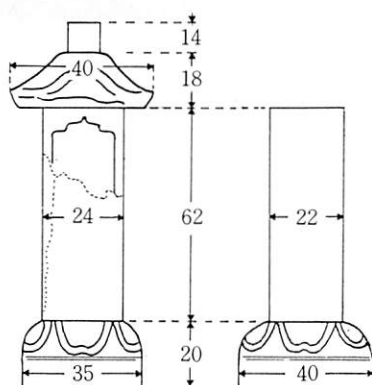
所在地 東原一―十六八
山王神社内
碑形 角柱形
形態 青面金剛像・三猿像・悪鬼付
年代 元禄五年
(一六九二)

この庚申塔は、No. 34の庚申塔と並び山王神社々殿右側、ブロックの建物の中に収納されている。

青面金剛像・三猿像・悪鬼付の庚申塔で、元は芹沢地区の道筋にあったものを、保存のため移転したものと思われる。

塔自体をよく観察すること、他の塔よりも文字、金剛像・三猿像の全体が上部に寄っている。このバランスから推定すると、笠付ではなかったかと思われる。

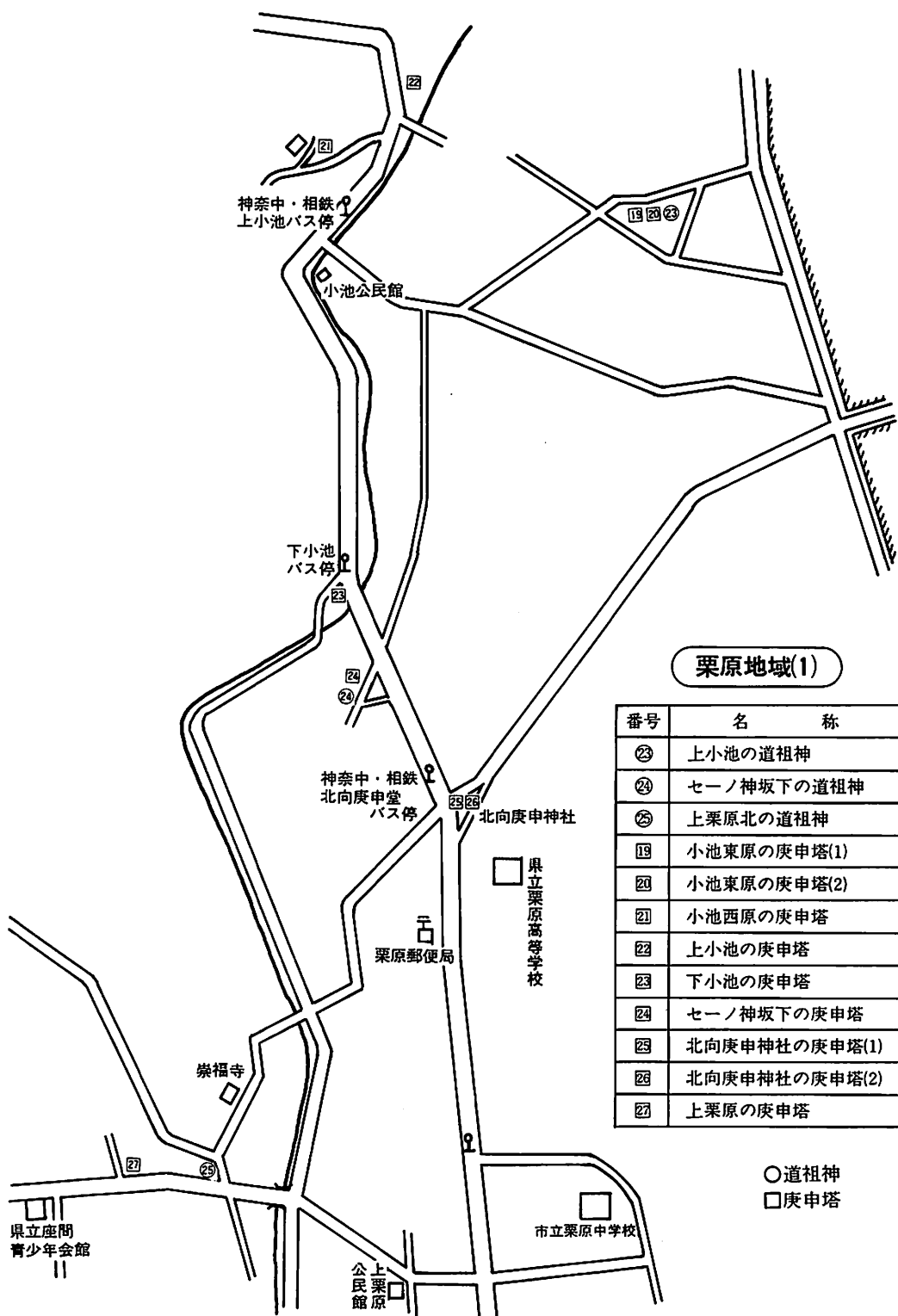
年代は、□禄五□□天と判読できる。□禄を年表でみると、文禄と元禄の二つの年号があるが、文禄は四年までで五年はない。そこで園禄と推定した。市内の庚申塔の中でも二番目に古く、また、青面金剛像付の具像塔としては最も古いもので注目すべきものである。しかし、全体的に磨耗、剥落があり、塔の細かいところが見えないのは残念である。また、飯島、中戸川、大沢、猪股等の施主十五名が彫られており、江戸中期のこの地区の庚申信仰の貴重な資料でもある。



略図寸法（センチメートル）

所在地 東原一―十一六八
山王神社内
碑形 唐破風付角柱形
形態 文字塔・三猿像付・有縁
年代（不明）

この塔は、材質が脆い凝灰岩で全体に剥落が著しく、わずかに左側面に言わ猿像が残り、三猿像付三面有縁の庚申塔であることが判明した。
現在は、笠付になっているが、塔のバランス、塔の形態（角柱形）から判断して、本来は笠がなかったかと思われる。
また、正面右側上に年号らしきものがかすかに見えるが、磨耗が著しく判読不能である。



あとがき

ここに「座間の石造物調査報告書」を、お送りいたします。

幾多の風雪に耐え、路傍にたたずむ石造物。それは、人間の有為転変の歴史を、静かに見守ってきた証人でもあります。また、その石造物に託した祖先の願いは、子孫繁栄の熱い思いだったと思います。しかし、有為転変の慣いは石造物の消失という事実で、祖先の熱い願いを葬り去ってしまい、あるいは、磨耗・剝落という風化により、建立の目的さえ不明のものもあります。

現存している石造物が、いつこのような運命に遭遇しないとも限りません。そこで私たちは、現存している石造物を正確に記録に残し、祖先の願いを後世に伝えようと考えたのが、今回の調査の目的でした。

まず第一弾として、市内各地に散在し人々と深いかかわりをもつ、「道祖神塔」「庚申塔」を対象をしほり調査をいたしました。

幸い、これらの塔については、飯島忠雄、故鈴木芳夫両氏の筆になる「座間市の道祖神」（この論文は、県の委託によって昭和五十年にまとめられたもので、一部刊行になっている）と、故鈴木芳夫氏が執筆された「座間市内の庚申信仰」（昭和五十五年刊行）座間むかしむかし第五集所載）の研究が残されています。また、上記の研究をまとめるのに際して作成した、「調査カード」も保存されており、

これらの資料を基に、五十九年五月から調査を開始いたしました。以来、約二か年間、延べ四十数回に及ぶ会合を重ね、まとめることが出来ました。

この調査には幾多の思い出がありますが、中でも、三十五度を超える炎天下の中、繁茂した草で姿が見えない塔を草を刈ってようやく探し当てた夏の日の一刻。碑文が判読出来ず終日その碑文にとらめっこをしてすすこと帰途についた晩秋の夕暮。……が、蘇ってきます。

このように、塔を一基一基でいねいに踏査し、今まで不明だった部分を根気よく埋め、個票をまとめていきました。正に「継続は力なり」の諺を地でいった調査でした。

ともあれ、刊行の運びとなりました。ここに、曲がりなりにもたどりつけたのも、関係の皆様のご支援の賜ものと深く感謝申し上げます。

この調査報告書自体ささやかなものですが、調査員一同がこの調査に寄せたひたむきな心意気が伝われば、これに優るものはありません。

最後に、この調査を献身的に支えて下さいました教育委員会のスタッフの方々に、心よりお礼を申し上げます「あとがき」といたします。

（S 60・12・13記）

〈参考文献〉

執筆者紹介（アイウエオ順、敬称略）

- | | | | |
|---|------|--|-------------|
| ○「新編相模国風土記稿」……………（雄山閣） | | | |
| ○「定本柳田国男集」……………（筑摩書房） | 赤石智子 | | |
| ○「日本庶民生活史料集成第十七巻」……………（五来重著 山一書房） | | | 市文化財調査員 |
| ○「相模の石仏―近世庶民信仰の幻想―」……………（松村雄介著 木耳社） | | | 市史編さん資料収集員 |
| ○「庶民のほとけ・観音・地藏・不動」……………（瀬富本 宏著 NHKブックス） | 井上収一 | | 市文化財調査員 |
| ○「新版地方史研究必携」……………（地方史研究協議会編 岩波書店） | | | 市立相模が丘小学校教頭 |
| ○「皇国地誌残稿」……………（明治八年編） | 大谷之彦 | | 市文化財調査員 |
| ○「修験道―山伏の歴史と思想」……………（宮家 準著 教育社） | | | 市立相模野小学校教頭 |
| ○「神奈川県史―民俗編」……………（神奈川県） | 小俣国栄 | | 市文化財調査員 |
| ○「津久井郡文化財―石像編」……………（新津久井地域市町村計画推進協議会） | | | 元市史編さん資料収集員 |
| ○「座間町土地宝典」……………（帝国市町村地図刊行会） | 見上昭二 | | 市文化財調査員 |
| ○「座間の語り伝え（信仰編）」……………（座間市企画課市史編さん係） | | | |
| ○「市内文化財散歩」……………（座間市教育委員会） | | | |
| ○「座間むかしむかし（第一―七集）」……………（座間市教育委員会） | | | |
| ○「座間の道坂橋」……………（座間市教育委員会） | | | |

昭和六十一年三月一日 印刷

昭和六十一年三月三十一日 発行

座間市文化財調査報告書 第十一集

座間の石造物

道祖神・庚申塔編

執筆
編集 座間市文化財調査委員会

発行 座間市教育委員会

座間市座間二―二八八二

電話 ○四六二―五五―二二二(代)

印刷所 株式会社 藤昭印刷興業

座間市入谷一―一五六九―一

電話 ○四六二―五四―八九五七